
幸 手 市

槇野地原遺跡

首都圏氾濫区域堤防強化対策（幸手市外）事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 6

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は関東平野の中央にあり、県の東半分が荒川と利根川という二大河川にはさまれております。また、首都東京に隣接し、いくつもの河川が県内を流れて東京湾へと注ぎ、水災害の多い県でした。

このような河川の一つである江戸川は、17世紀に先人達により開削され、水上交通、治水といったさまざまな面から、四百年間にわたって、流域の生活を支えてきました。

しかし、近年のゲリラ豪雨を始めとする異常気象は、各地で水害をもたらしております。江戸川右岸の堤防がひとたび決壊すれば、埼玉県内だけではなく、東京を始めとする首都圏の多くが深刻な被害を受けるおそれがあります。

このような災害が発生するおそれのある堤防区間では、安全性を確保し、人々の生活を守るために、拡幅による堤防強化が実施されています。

事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在していますが、今回発掘調査を実施した榎野地原遺跡もその一つです。発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代前期の住居跡や貝塚のほか、古墳時代前期の住居跡などが発見されました。また、近世の溝跡や墓墳が見つかり、遺跡は、断続的ながら、縄文時代前期ころから現代にいたるまで様々な目的で利用されてきたことがわかりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局、幸手市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 樋 田 明 男

例 言

1. 本書は幸手市に所在する植野地原遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

植野地原遺跡（第2次）

幸手市大字植野地字原628番地他

平成24年8月17日付 教生文2-32号

3. 発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策（幸手市外）事業に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。植野地原遺跡の調査は、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業（平成24年度）

「江戸川堤防強化対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」

報告書作成事業（平成27年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（幸手市外）」

5. 発掘調査、整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

植野地原遺跡第2次発掘調査は、平成24年8月1日から平成24年11月30日まで実施し、西井幸雄、岩瀬譲が担当した。

整理報告書作成事業は、平成27年10月1日から平成28年2月29日まで実施し、砂生智江が担当した。

平成28年3月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第419集として印刷、刊行した。

6. 植野地原遺跡の発掘調査における基準点測量は、有限会社埼京コンサルタントに委託した。

空中写真撮影は、中央航業株式会社に委託した。

自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

7. 発掘調査における写真撮影は、西井、岩瀬が行い、出土遺物の写真撮影は砂生が行った。

8. 出土品の整理、図版作成は、砂生が行った。

9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、縄文土器・土製品を細田勝、石器を/石田識好が行い、その他を砂生が行った。

10. 本書の編集は砂生が行った。

11. 本書にかかる諸資料は平成28年3月以降、埼玉県教育委員会が管理、保管する。

12. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

幸手市教育委員会

凡 例

1. 植野地原遺跡第2次調査全体におけるX・Yの数値は、日本測地系（旧測地系）、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。

D-5グリッド北西杭の座標は、X = 6540.000m、Y = -4170.000m、北緯36° 03′ 32″ 1745、東経139° 47′ 13″ 3621である。

2. グリッドは、10m×10mを単位とし設定した。表記は、北西隅を起点として、北から南方向にアルファベット、西から東方向に数字を付した。
3. 本書の本文、挿図、表、写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。
- SJ…住居跡 SD…溝跡
SK…土壌 P…ピット

4. 本書での挿図の縮尺は以下のとおりである。
- 全体図1:600 遺構配置図1:200
遺構図1:30 1:60 1:120 1:160
土器破片1:3 土器実測図1:4
土製品1:3 陶磁器1:3 石器1:3 2:3
銭貨2:3 鉄製品1:3 瓦1:3
ガラス製品1:1

5. 住戸跡の規模は、長軸長、短軸長で表示した。
6. 遺構、遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

焼土、焼土ブロック：網20% 赤彩：網20%
研磨範囲：平行線 使用痕、調整痕範囲「↑」
施釉範囲：1点破線

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高（単位m）で示した。
8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。法量の単位はcm、（ ）の数値は推定値、[]の数値は現存値、それ以外は計測値を示す。胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-赤色粒子 B-白色粒子 C-長石
D-角閃石 E-石英 F-雲母
G-黒色粒子 H-白色針状物質
I-砂粒子 J-片岩 K-小礫

残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

備考には、出土位置、注記No、調整や整形の特徴などを記した。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図、1/25,000地形図の幸手市周辺を編集、使用した。
10. 本書に掲載した遺構番号は、原則として調査時のものを使用した。ただし、変更したものは本文及び各遺構一覧表に示した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(2) 土壌	45
1. 発掘調査に至る経過	1	(3) 土器集中	46
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	3. 中、近世の遺構と遺物	47
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2	(1) 溝跡	47
II 遺跡の立地と環境	3	(2) 墓墳	51
1. 地理的環境	3	(3) 土壌	54
2. 歴史的環境	4	(4) ビット	63
III 遺跡の概要	8	4. グリッド出土遺物	64
1. 植野地原遺跡の概要	8	(1) グリッド出土土器	64
2. 植野地原遺跡の基本層序	15	(2) グリッド出土土製品	71
IV 遺構と遺物	16	(3) グリッド出土石器	72
1. 縄文時代の遺構と遺物	16	(4) グリッド出土陶磁器	72
(1) 住居跡	16	V 自然科学分析	77
(2) 土壌	33	1. シオフキの貝殻成長線分析について	77
(3) 貝層	38	2. 放射性炭素年代測定について	80
2. 古墳時代の遺構と遺物	40	VI 結語	82
(1) 住居跡	40	写真図版	

挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	3	第31図	第4号住居跡	40
第2図	周辺の遺跡	6	第32図	第4号住居跡遺物出土状況	41
第3図	遺跡の位置図	8	第33図	第4号住居跡出土遺物(1)	42
第4図	榎野地原遺跡第2次全体図	9	第34図	第4号住居跡出土遺物(2)	43
第5図	遺構配置図(1)	10	第35図	土城	45
第6図	遺構配置図(2)	11	第36図	土城出土遺物	46
第7図	遺構配置図(3)	12	第37図	土器集中出土遺物	46
第8図	遺構配置図(4)	13	第38図	第1、3、4号溝跡	48
第9図	遺構配置図(5)	14	第39図	第2、5号溝跡	49
第10図	基本層序	15	第40図	溝跡出土遺物	50
第11図	第1号住居跡	17	第41図	墓域	51
第12図	第1号住居跡遺物出土状況	18	第42図	墓域出土遺物	52
第13図	第1号住居跡出土遺物(1)	19	第43図	土城(1)	55
第14図	第1号住居跡出土遺物(2)	20	第44図	土城(2)	56
第15図	第2、3、5号住居跡	22	第45図	土城(3)	57
第16図	第2号住居跡、遺物出土状況	23	第46図	土城(4)	58
第17図	第2号住居跡出土遺物	24	第47図	土城(5)	59
第18図	第3号住居跡	25	第48図	土城出土遺物	60
第19図	第3号住居跡遺物出土状況	26	第49図	ビット	63
第20図	第3号住居跡出土遺物(1)	27	第50図	グリッド出土遺物(1)	65
第21図	第3号住居跡出土遺物(2)	29	第51図	グリッド出土遺物(2)	66
第22図	第3号住居跡出土遺物(3)	30	第52図	グリッド出土遺物(3)	67
第23図	第3号住居跡出土遺物(4)	31	第53図	グリッド出土遺物(4)	68
第24図	第5号住居跡、出土遺物	32	第54図	グリッド出土遺物(5)	69
第25図	土城(1)	34	第55図	グリッド出土土器(1)	73
第26図	土城(2)	35	第56図	グリッド出土土器(2)	74
第27図	土城出土遺物(1)	36	第57図	グリッド出土遺物	76
第28図	土城出土遺物(2)	37	第58図	シオフキの貝殻成長線分析	79
第29図	貝種組成グラフ	39	第59図	暦年校正結果	81
第30図	段長、段高分布	39	第60図	現行地割りと検出された遺構	83

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	7	第14表	土壌出土遺物観察表	60
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	20	第15表	土壌一覧表(1)	60
第3表	第2号住居跡出土石器観察表	23	第16表	土壌一覧表(2)	61
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表	31	第17表	土壌一覧表(3)	62
第5表	土壌出土遺物観察表	36	第18表	ビット一覧表	64
第6表	貝種組成表	39	第19表	グリッド出土遺物観察表(1)	73
第7表	第4号住居跡出土遺物観察表	44	第20表	グリッド出土遺物観察表(2)	75
第8表	土壌出土遺物観察表	46	第21表	貝殻成長線分析試料	77
第9表	土器集中出土遺物観察表	46	第22表	シオフキの各年齢での殻高	78
第10表	溝跡一覧表	47	第23表	シオフキの推定採集季節と年齢	78
第11表	溝跡出土遺物観察表	51	第24表	測定試料および処理	80
第12表	第1号墓壇ガラス製品観察表	53	第25表	放射性炭素年代測定および 暦年校正の結果	80
第13表	銭貨観察表	53			

写真図版目次

図版1	1 調査区遠景	5 第4号住居跡ビット1
	2 調査区全景	図版5
図版2	1 第1号住居跡完掘	1 第1号溝跡(北東から)
	2 第1号住居跡遺物出土状況(1)	2 第1号溝跡(南東から)
	3 第1号住居跡遺物出土状況(2)	3 第2、5号溝跡(北東から)
	4 第1号住居跡ギサ跡1、2	4 第3号溝跡(北東から)
	5 第1号住居跡ギサ跡3	5 第3号土壌
図版3	1 第2、3、5号住居跡完掘	6 第4、5号土壌
	2 第2、5号住居跡完掘	7 第4号土壌遺物出土状況
	3 第2号住居跡ギサ跡1	8 第8号土壌
	4 第2号住居跡ギサ跡2	図版6
	5 第5号住居跡ギサ跡3	1 第9号土壌
	6 第5号住居跡ギサ跡4	2 第10号土壌
	7 第3号住居跡遺物出土状況	3 第12号土壌
	8 第3号住居跡ギサ跡5	4 第14、15号土壌
図版4	1 第4号住居跡完掘	5 第18号土壌
	2 第4号住居跡遺物出土状況(1)	6 第22号土壌
	3 第4号住居跡遺物出土状況(2)	7 第32号土壌
	4 第4号住居跡遺物出土状況(3)	8 第44号土壌
		図版7
		1 第54、55、56号土壌
		2 第57号土壌

	3	第63、64号土塋	図版17	1	グリッド出土遺物 (1)
	4	第84号土塋		2	グリッド出土遺物 (2)
	5	第94、95、97号土塋	図版18	1	グリッド出土遺物 (3)
	6	第102号土塋		2	グリッド出土遺物 (4)
	7	第98号土塋貝層検出状況	図版19	1	グリッド出土遺物 (5)
	8	第98号土塋貝層堆積状況		2	グリッド出土遺物 (6)
図版8	1	第4号墓塋遺物出土状況	図版20	1	グリッド出土遺物 (7)
	2	第1号墓塋		2	グリッド出土遺物 (8)
	3	第2号墓塋	図版21	1～4	第1号住居跡出土石器
	4	第3号墓塋		5	第2号住居跡出土石器
	5	第4号墓塋、第82号土塋		6～9	第3号住居跡出土石器
図版9	1～3	第1号住居跡出土遺物		10	第5号土塋出土石器
	4～10	第3号住居跡出土遺物		11～18	グリッド出土石器
	11	第4号住居跡出土遺物	図版22	1～16	グリッド出土石器
図版10	1～10	第4号住居跡出土遺物	図版23	1～3	グリッド出土石器
図版11	1～15	第4号住居跡出土遺物		4～6	第1号溝跡出土陶磁器
図版12	1～4	第4号住居跡出土遺物		7～10	グリッド出土陶磁器
	5	第4号土塋出土遺物		11	グリッド出土土師質土器
	6	第12号土塋出土遺物	図版24	1	第1、2号溝跡出土陶磁器
	7、8	第84号土塋出土遺物		2	グリッド出土陶磁器 (1)
	9	第102号土塋出土遺物	図版25	1	グリッド出土陶磁器 (2)
	10	土器集中出土遺物		2	第1号溝跡出土石器
	11、12	第1号住居跡出土土製品		3	第2号溝跡出土石器
	13	第3号住居跡出土土製品		4	第33号土塋出土石器
	14	第3号土塋出土土製品		5	第116号土塋出土鉄製品
	15	グリッド出土土製品		6	グリッド出土瓦
図版13	1	第1号住居跡出土遺物 (1)		7	第2号墓塋出土銭貨
	2	第1号住居跡出土遺物 (2)		8	第4号墓塋出土銭貨
図版14	1	第2号住居跡出土遺物	図版26	1	第1号墓塋出土銭貨
	2	第3号住居跡出土遺物 (1)		2	第2号墓塋出土銭貨
図版15	1	第3号住居跡出土遺物 (2)		3	第3号墓塋出土銭貨
	2	第3号住居跡 (3)、 第5号住居跡出土遺物		4	第4号墓塋出土銭貨
図版16	1	土塋出土遺物 (1)		5	第1号墓塋出土ガラス製品
	2	土塋出土遺物 (2)		6	第98号土塋出土貝

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所(以下、江戸川河川事務所)は、幸手市域から杉戸町域にかけての江戸川右岸地域において、江戸川堤防強化対策事業を実施している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係機関との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

江戸川堤防強化対策事業については、工事に先立ち、江戸川河川事務所長から平成20年3月27日付け江沼第65号で、埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて、埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。

これに対して県教育委員会は、工事計画の進捗に応じて、平成21年11月24・25日及び平成22年1月25日に、遺跡の所在及び範囲確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が確認されたことから、平成22年3月29日付け教生文第2408号で、埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて、以下のとおり回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
植野地原遺跡 (No.87-024)	貝塚・ 集落跡	縄文	幸手市植野地 地内

2 取り扱い

工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、江戸川河川事務所と県教育委員会はその取り扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから、記録保存の措置を講ずることになった。

江戸川河川事務所長からの文化財保護法第94条第1項の規定に基づく発掘通知及び公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの法第92条第1項の規定に基づく発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告

平成24年3月13日付け 教生文第4-1439号

発掘調査届に対する指示通知

平成24年8月17日付け 教生文第2-32号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

植野地原遺跡は、平成24年度に第2次の発掘調査を行った。調査の経過は、以下の通りである。

平成24年8月に発掘調査事務所を設置した。8月初旬から中旬にかけて重機による表土の掘削を実施し、8月中旬から人力による遺構の確認作業に入った。9月初旬から遺構の精査を行い、9月中旬からは記録等の作成を行った。11月中旬に埋戻しを行い、作業を終了した。

(2) 整理、報告書の作成

整理、報告書作成作業は、平成27年10月1日から平成28年2月29日まで実施した。

10月から、遺物の水洗、注記を行い、接合、復元作業に着手した。作業が終了した遺物は、11月から順次抽出を行い、拓本、実測作業を開始した。実測、拓本の終了した遺物からトレースを開始し、遺物版下図の作成に着手した。遺物の整理と並行して、10月から貝層サンプルの選別

作業を行った。貝層サンプルの計測を行った後、状態の良いものを抽出し、自然科学分析を行った。

遺構図の整理は、遺物の整理作業と並行して10月から開始した。図面照合と修正を経て第二原図を作成し、終了したものから、画像ソフトを用いて遺構図のトレースを行った。土層説明等のデータを組み込んで編集作業を実施し、遺構挿図の版下を作成した。12月から、遺構写真図版の作成を開始し、合わせて遺物写真撮影を行った。

原稿は、11月下旬より執筆した。1月中旬に印刷起案を作成し、1月下旬に印刷業者に入稿した。2月には、整理作業の終了した図面、遺物実測図、写真データ、遺物などの整理、仮収納を行った。

報告書は、2月上旬から3月上旬に3回の校正を経て3月末に事業団報告書第419集「植野地原遺跡」を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成24年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	矢 島 将 和

調査部

調 査 部 長	昼 間 孝 志
調 査 部 副 部 長	剣 持 和 夫
調査監兼調査第一課長	瀧 瀬 芳 之
主 査	西 井 幸 雄
主 査	岩 瀬 譲

平成27年度（報告書作成）

理 事 長	樋 田 明 男
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭
総務部	
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之
総 務 課 長	安 田 孝 行

調査部

調 査 部 長	金 子 直 行
調 査 部 副 部 長	細 田 勝
調査監兼整理第一課長	黒 坂 禎 二
主 事	砂 生 智 江

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

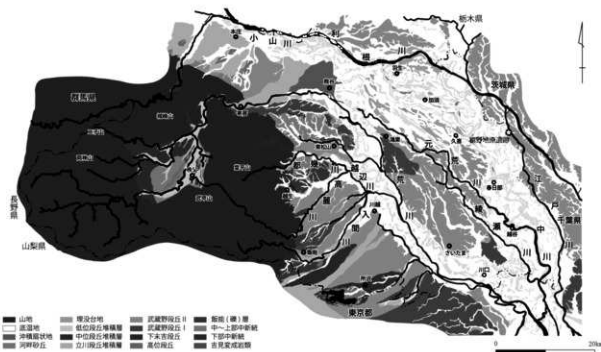
植野地原遺跡は、埼玉県幸手市植野地字原に所在する。埼玉県は、関東平野の中央に位置し、その地形を大別すると、西側の山地と、東側の平野とに二分される。東側の平野は、西側の秩父山地に連なる北武蔵台地、入間台地、武蔵野台地、関東造盆地運動によってローム台地が沈降した加須低地、河川の開析によって形成された荒川低地や中川低地、これらの低地に挟まれた大宮台地からなる。さらに、中川低地の東側には、下総台地西縁の一部が編入されている。本遺跡は、この下総台地の西縁に位置する。

幸手市は埼玉県の東端にあり、北側は茨城県五霞町、西側は久喜市、南側は杉戸町と接し、東側は江戸川を隔てて千葉県野田市（旧関宿町）と接している。遺跡は、昭和44年に埼玉県選定重要遺跡に指定された杉戸町の木杵内貝塚と近接する。

幸手市の地形を概観すると、市域の大部分は中川低地に属し、標高は低いところで4.7mである。また、北側には加須低地が広がっており、幸手市

周辺には、中川や権現堂川に代表される利根川水系の流路が集中している。この地域は、河川の恵みを受ける一方で、度重なる水害に常に脅かされてきた地域でもあった。

市の東部には江戸川を臨む台地があり、遺跡はこの台地上に位置する。近世初頭に、治水や舟運の確保を目的として利根川の東遷事業が展開された。それに際して、下総台地を開削し江戸湾へとそそぐ新たな流路をつくる大規模工事がなされた。この流路が現在の江戸川であり、工事によって分断された下総台地の一部が、本遺跡の立地する宝珠花支台である。このように、宝珠花支台は、かつては下総台地と一体であった。そのため、出土する遺物の特徴は下総台地上の遺跡との関連を強く示している。下総台地の西端は、小河川の細かな開析を受けており、樹枝状の開析谷が発達している。植野地原遺跡は、このように形成された谷に面して営まれたものと考えられ、周辺には同様の遺跡が多数分布している。



第1図 埼玉県の地形図

2. 歴史的環境

旧石器時代

植野地原遺跡の周辺では、春日部市(旧庄和町)の米島貝塚において細石器などが出土しているほか、同市風早遺跡では、局部磨製石斧や細石器が、千葉県野田市の岡田山ノ内遺跡(52)や茨城県坂東市(旧岩井市)下根貝塚(65)では、槍先形尖頭器などが出土している。また、茨城県境町西泉田伏木遺跡からは石器集中が2地点発見され、石器製作遺跡と考えられている。

このように、下総、猿島台地上には数は少ないながらも旧石器が出土しており、わずかに生活の痕跡を認めることができる。

縄文時代

縄文時代草創期、および早期の遺跡は少なく、大半が、調査区内より土器片が採集されるにとどまる。縄文時代草創期では、植野地北遺跡(2)から土器片が採集されているほか、宮代町前原遺跡で微隆起縄文土器や表裏縄文土器が出土した。縄文時代早期では、遺跡に近接する向山遺跡(8)、木津内貝塚(9)のほか、向台遺跡(21)、島通遺跡(20)、野田市の砂南南遺跡(64)から擦糸文系土器が出土している。一方で、幸手市植野地北遺跡では、擦糸文期から条痕文期の遺構、遺物が比較的良好な状態で検出されている。

転じて、縄文時代前期になると、遺跡の数は急増する。特に、関山期から黒浜期にかけての地点貝塚の分布は濃密であり、杉戸町の木津内貝塚、鷺巣前原遺跡(18)、春日部市(旧庄和町)貝の内遺跡(30)、坂東市(旧岩井市)下根貝塚(65)、五霞町山王浦B遺跡(67)、野田市の(旧関宿町)飯塚貝塚(40)、同市内町貝塚(84)などが挙げられる。

縄文時代早期から前期にかけては、気候の温暖化に伴って海水面の昇昇が生じた。いわゆる縄文海進である。前期前半の黒浜式期は、海進が最も進んだ時期とされ、中川低地、加須低地におい

ては、茨城県古河市付近まで海が入り込んだと考えられている。当時、宝珠花支台に暮らした人々が、海から得られる資源を利用して生活していたことは想像に容易く、その結果、多くの貝塚が残されることとなった。

しかし、縄文時代前期後半の諸磯式期になると、次第に気候が冷涼化し、さらに、河川の運ぶ土砂によって干潟は徐々に埋め立てられていった。海水面は下降し、海退の兆しが見え始める。このころ、野田市の北前貝塚などに集落が形成されるが、前期前半と比べて遺跡の数は減少する傾向にある。これは、海退によって海辺での食料採集が困難となり、しだいに内陸へと生活の場を移していったためと考えられる。

縄文時代中期になると、一般的に、中央に広場を有し、円形や馬蹄形を呈する大規模な集落が増加する。さらに、台地の縁辺部よりやや奥まった位置に集落を営むようになる。植野地原遺跡周辺では地形的な影響からその数は少なく、春日部市(旧庄和町)浅間下遺跡(27)がある。一方で、小規模な集落は一定数が認められ、春日部市(旧庄和町)宮前前原遺跡(14)や、向台遺跡(21)、野田市の(旧関宿町)桐ヶ作貝塚(36)、茨城県五霞町の瀬沼遺跡(69)などがある。

海進と海退は繰り返れ、縄文時代後期には再びわずかな海進が生じる。春日部市(旧庄和町)神明貝塚(25)は、堀之内式期から加曾利B式期にかけて形成された貝塚である。貝層は、前期に多く見られた地点貝塚とは規模が異なり、直径160mに達する馬蹄形に広がっている。主体となる貝は、汽水域に生息するヤマトシジミで、貝塚周辺には、鹹水と淡水が混在する河川や湖沼の存在がうかがえる。

縄文時代晩期には、下総台地上に野田市(旧関宿町)内町貝塚(84)、同市岡田山ノ内貝塚(51)、中新宿C遺跡(55)、香取原貝塚(60)、木間ヶ瀬

中学校裏遺跡(61)、坂東市(旧岩井市)福寿院南貝塚(53)などが立地する。さらに、この時期には再び海退が進み、晩期中葉になると、海岸線は現在と変わらない位置まで後退した。それに伴い、台地上に限られていた居住域は低地へと進出する。しかし、低地内の微高地に形成された遺跡は沖積作用によって深く埋没しているため、その調査事例は少ないのが現状である。

弥生時代

本遺跡周辺の弥生時代の遺跡は少なく、春日部市(旧庄和町)須釜遺跡を挙げるにとどまる。須釜遺跡は、中川低地内の自然堤防上に位置し、中期中葉の再葬墓が11基検出されている。

古墳時代

古墳時代前期から後期にかけては、台地上はもとより、低地の微高地上にも集落が形成される。古墳時代前期の集落として、幸手市植野地北遺跡、植野地西遺跡(3)、幸手市№22遺跡、野田市(旧関宿町)岡田山ノ内遺跡(52)、中期の集落として、杉戸町向山遺跡、後期の集落として春日部市(旧庄和町)塚崎遺跡(26)、陣屋遺跡(31)などが挙げられる。また、杉戸町上椿遺跡(32)からは、前期末から後期前半の住居跡15軒が、下椿遺跡(34)では、後期の住居跡24軒が検出されており、中椿遺跡(33)と併せて、前期から後期まで続く大規模な集落として注目される。

対して、古墳の築造数は少なく、前期に、春日部市(旧庄和町)権現山遺跡において方形周溝墓が造営されているものの、古墳は、杉戸町大塚豊明神社古墳の築造が認められるのみである。この古墳は、低地に立地することなど一般的な前期古墳とは様相を異にしており、今後の調査の進展が期待される。坂東市(旧岩井市)上出島古墳は、中期の前方後円墳と推定され、滑石製勾玉、鉄剣、ヤリガンナなどが出土している。杉戸町目沼古墳群(10)は後期と考えられ、9号墳より三鈴古葉が出土している。野田市(旧関宿町)親野井古墳

(37)は円墳で、後期の築造とされている。杉戸町木野川古墳群(23)は、10基の円墳からなり、埴輪の出土がないことから、終末期に築造された群集墳と考えられている。

奈良・平安時代

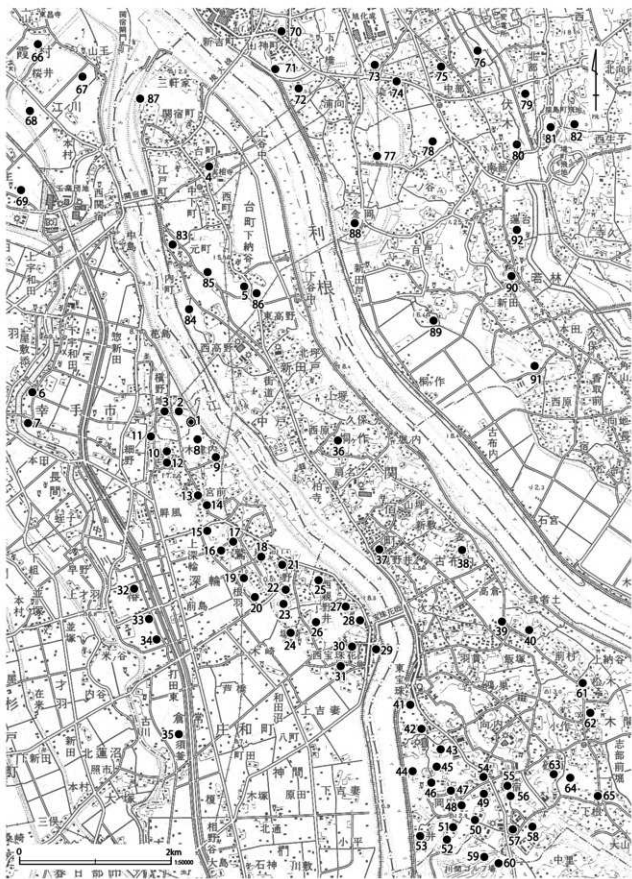
奈良・平安時代では、集落の数が減少し、散在して分布するようになる。また、古墳時代より断続的に営まれる集落も多い。幸手市植野地北遺跡、杉戸町上椿遺跡(32)、下椿遺跡(34)などがこれに該当する。植野地北遺跡では、近年の調査において大型の焼失住居跡が検出され、注目される。また、春日部市(旧庄和町)浅間下遺跡(27)では、平安時代の住居跡が検出されたほか、茨城県境町染谷遺跡(74)、大歩遺跡群(76)では奈良、平安時代の遺物が表面採集されている。

中世以降

鎌倉時代は、遺跡の周辺は下河辺荘にあたり、鎌倉御家人である下河辺氏によって治められていた。しかし、1247年に起こった宝治合戦で、下河辺氏は三浦氏に味方したために没落する。その後、下河辺氏は、鎌倉幕府が滅亡するまで金沢北条氏の治めるところとなり、その一部は同氏の菩提寺である金沢称名寺に寄進された。15世紀の中頃に、足利成氏が上杉氏との対立から古河へと入ったのを発端として、水運の要である関宿周辺には、にわかに古河公方方の城や砦が築かれるようになる。古河市(旧総和町)大海城跡や茨城県五霞町栗橋城跡、幸手市一色氏陣屋跡(幸手城跡)、野田市(旧関宿町)関宿城跡(87)などがこれにあたる。

関宿城は、古河公方の重臣梁田氏によって、長祿元(1457)年に築城され、天正2(1574)年、後北条氏の攻撃によって落城するまで、古河公方方の重要拠点としてその役割を果たした。後北条氏の支城となってからは、後北条氏が北関東へと侵攻する重要な足がかりとなった。

天正18(1590)年、豊臣秀吉の小田原攻めによって後北条氏は滅亡し、同年に徳川家康が関東に



第1表 周辺の遺跡一覧表(第2図)

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	植野地原遺跡	縄文(前)・古墳(前)・近世	47	岡田上尻坪遺跡	縄文(中・後)
2	植野地北遺跡	縄文(草)・古墳(前)・奈良・平安	48	西橋遺跡	縄文(中)
3	植野地西遺跡	古墳(前)	49	下橋遺跡	縄文(中)
4	東一番遺跡	縄文(中)	50	上橋遺跡	縄文(中)
5	飯塚貝塚	縄文(前・中)・古墳(前)	51	岡田山ノ内貝塚	縄文(前・中・後・晩・晩)
6	幸手市№17	奈良・平安・近世	52	岡田山ノ内遺跡	旧石器・縄文(中・後・晩)・古墳(前)
7	幸手市№18	奈良・平安・近世	53	福寿院南貝塚	縄文(中・後・晩)・奈良・平安
8	向山遺跡	縄文(早・前・中)・古墳(前)	54	新宿貝塚	縄文(前・中)
9	木津内貝塚	縄文(早・前・中)・奈良	55	中新宿C遺跡	縄文(前・中・後・晩)
10	目沼古墳群	古墳(前・後)	56	中新宿A遺跡	縄文・奈良・平安
11	目沼古墳群14号墳	古墳(後)	57	下新宿B遺跡	縄文(中)・奈良・平安
12	目沼古墳群15号墳	古墳(後)	58	下新宿A遺跡	縄文(中)
13	目沼第1貝塚・宮前遺跡	縄文(前)・平安	59	香取原古墳群	古墳
14	宮前原遺跡	縄文(前・中)	60	香取原貝塚	縄文(後・晩)
15	登戸遺跡	縄文(前・中)	61	木間ヶ瀬中学校裏遺跡	縄文(中・後・晩)
16	登戸南遺跡	縄文(前・中)・古墳(前・後)	62	松の木遺跡	縄文(前・中)
17	中原遺跡	縄文(前)・奈良	63	砂東遺跡	縄文
18	鷺原前原遺跡	縄文(前)	64	砂南南遺跡	縄文(早・前・中・後)
19	宮の腰遺跡	縄文(前)・古墳(後)	65	下根貝塚	旧石器・縄文(前・中・後)
20	島通遺跡	縄文(早・中)	66	西新堀遺跡	縄文・近世
21	向台遺跡	縄文(早・前・中)・古墳(中)・奈良	67	山王浦B遺跡	縄文(前)・古墳・奈良・平安・近世
22	漆遺跡	縄文(前・中)	68	板井前遺跡	縄文・中世・近世
23	木野川古墳群	古墳(後)	69	瀬沼遺跡	縄文(中)・古墳
24	野添北遺跡	縄文(前)	70	山神町古墳群	古墳
25	神明貝塚	縄文(前・中・後)	71	板山古墳群	古墳
26	塚崎遺跡	縄文(前)・古墳(後)	72	下小橋遺跡	縄文・古墳
27	浅間下遺跡	縄文(前・中・後)・奈良	73	染谷香取神社遺跡	縄文・古墳
28	天神前遺跡	縄文(前)・古墳(後)	74	染谷遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
29	町通中遺跡	縄文(前・中)	75	大塚山遺跡群	古墳
30	貝の内遺跡	縄文(前・中)・古墳(後)・奈良・平安	76	大歩遺跡群	縄文・古墳・奈良・平安
31	陣屋遺跡	縄文(前・中)・古墳(後)・奈良・平安	77	沼台古墳	縄文・古墳
32	上橋遺跡	古墳(前・後)・奈良・平安	78	青木遺跡	縄文・古墳
33	中橋遺跡	古墳(後)	79	天神前遺跡	縄文
34	下橋遺跡	古墳(後)・奈良・平安	80	宿遺跡	縄文
35	須釜遺跡	弥生・奈良・平安	81	大照院遺跡群	縄文
36	鯛ヶ作貝塚	縄文(前・中)	82	西浦遺跡	縄文・古墳
37	親野井古墳	古墳(後)	83	雲岡寺内貝塚	縄文
38	古布内貝塚	縄文(前・中)	84	内町貝塚	縄文(前・晩)
39	武者土貝塚	貝塚	85	元町遺跡	縄文
40	飯塚貝塚・木所前遺跡	縄文(前・中)・古墳(前)	86	下納谷遺跡	縄文
41	相耕地B遺跡	縄文(中)	87	関宿城跡	中世・近世
42	相耕地A遺跡	縄文(中)	88	金岡遺跡群	縄文・古墳
43	下奉目遺跡	縄文(中)	89	百戸遺跡群	縄文・古墳
44	相田B遺跡	縄文(中)	90	堀江船跡	—
45	相田A遺跡	縄文(中)	91	若林遺跡群	縄文・古墳
46	八幡前遺跡	縄文(中)・奈良・平安	92	元屋敷遺跡群	縄文・古墳

入府する。これに伴い、当地は関宿藩領となる。併せて、利根川の改修事業が開始された。これは、水害を防ぐことに加えて、舟運の整備も重要な目的であった。関宿周辺は、江戸と関東内陸とを結ぶ流通の中継地点として発達し、幸手市の権現堂河岸や茨城県境町の境河岸が形成され大いに賑わった。しかし、河川によって発展した当地は、ひとたび氾濫がおこると甚大な被害を被った。被害

は関宿周辺にとどまらず下流域にまで及び、現代に至るまで幕府や政府による数々の水防活動が行われてきた。

明治33年には利根川第一期改修工事が開始され、これに伴い江戸川の改修工事が計画、施行された。工事は昭和期まで断続的に行われており、水路の拡幅や水閘門の設置、堤防の強化などが実施され、今日の堤防を見るに至った。

Ⅲ 遺跡の概要

1. 槇野地原遺跡の概要

槇野地原遺跡は幸手市槇野地字原に所在し、下総台地を開削する江戸川右岸に立地する。遺跡は、下総台地西端部に位置し、南北約240m、東西約175mの範囲に広がる。

平成10年には、幸手市史編さんに伴う学術調査（第1次調査）が実施され、黒浜1式期の住居跡1軒が検出された。住居跡は、ブロック状に貝が堆積した地点貝塚でもある。また、調査区内からは、縄文時代早期から中期の土器片が採集された。

平成24年度には、江戸川の堤防強化事業に伴って、当事業団による発掘調査（第2次調査）が実施された。調査区は現江戸川堤防沿いにあり、標高はおよそ9.0m、第1次調査地点からの距離は北東に約87mである。調査区の東際は、農業用の

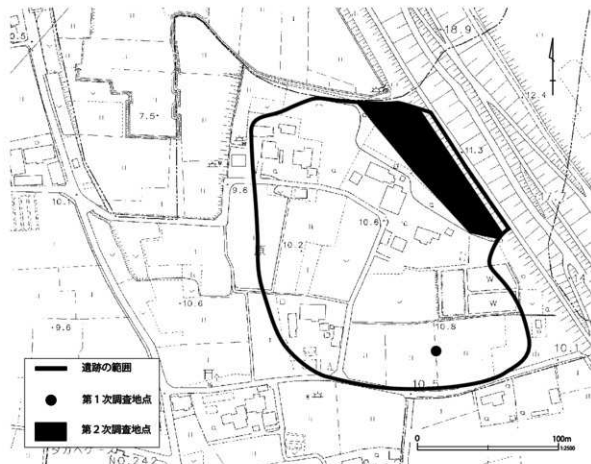
配水管が埋設されていた。そのため、東側の調査区境に並行し幅2～3mの範囲が擾乱されていた。

第2次調査では、縄文時代の住居跡4軒、土壌25基、古墳時代の住居跡1軒、土器集中1か所、土壌6基、江戸時代の溝跡5条、墓墳4基、土壌79基、ビッド46基が検出された。

縄文時代の住居跡は、いずれも縄文時代前期中葉の諸磯b式期に相当する。

また、第98号土壌は、貝ブロックの堆積する地点貝塚である。形成時期は、住居跡よりも一段階古い縄文時代前期中葉の黒浜式期である。

古墳時代の遺構は、すべて前期のものと考えられる。第4号溝跡の北側に近接する浅い落ち込みには、土師器の細片が集積した土器集中が検出さ



第3図 遺跡の位置図

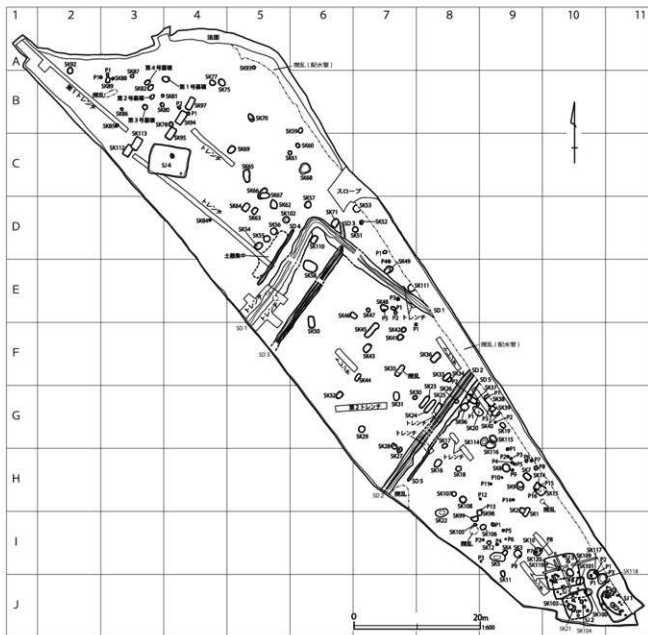
れた。古墳時代の土壌は、土器集中周辺に分布している。

古墳時代中期以降から古代までは、遺構と遺物は検出されておらず、調査の成果から、植野地原遺跡における当該時期の様相をうかがうことは困難である。中世の様相も同様であるが、13世紀中葉の所産と考えられる山茶碗窯系片口鉢片が出土している。近世になると、台地の縁辺部に墓地が形成される。すべて土壌墓と考えられ、副葬品で

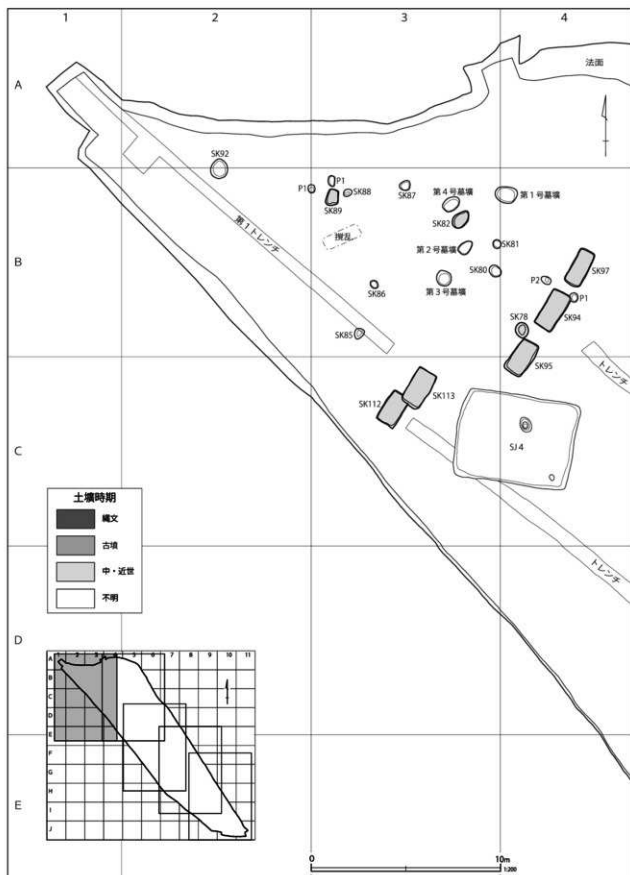
あるガラス製の数珠や銭貨が出土した。

一方で、調査区中央部には溝が掘削される。第1号溝跡をのぞいて、溝跡は調査区を横断する方向に走っている。いずれも、地境溝と考えられる。溝跡の覆土中からは、17世紀後半～19世紀前半頃までの陶磁器などが出土した。

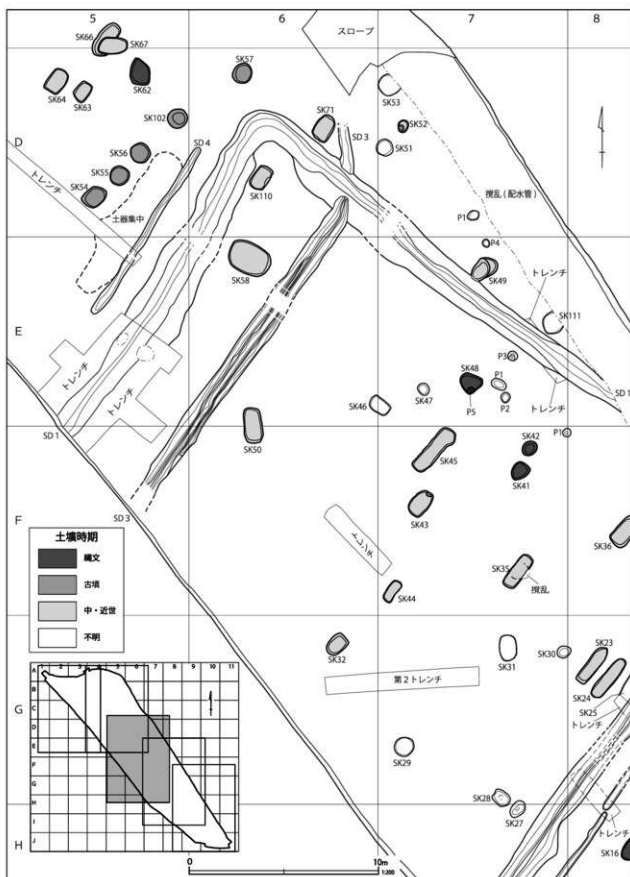
近世の遺物を明確に伴う土壌は検出されなかったが、溝跡と長軸が一致するものなどは、溝跡と同時期に掘削、使用されていたものと想定した。



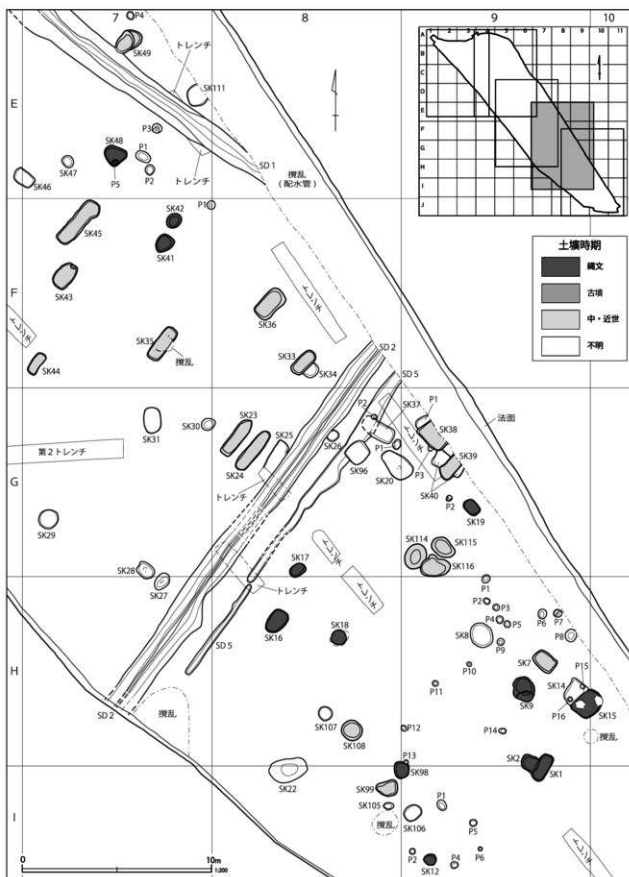
第4図 植野地原遺跡第2次全体図



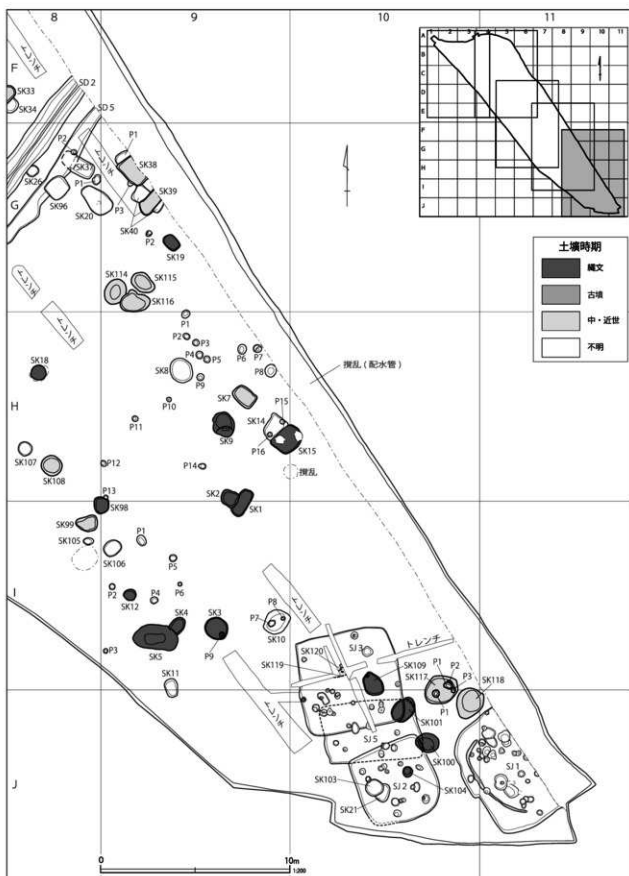
第5図 遺構配置図(1)



第7図 遺構配置図(3)



第8図 遺構配置図(4)



第9図 遺構配置図(5)

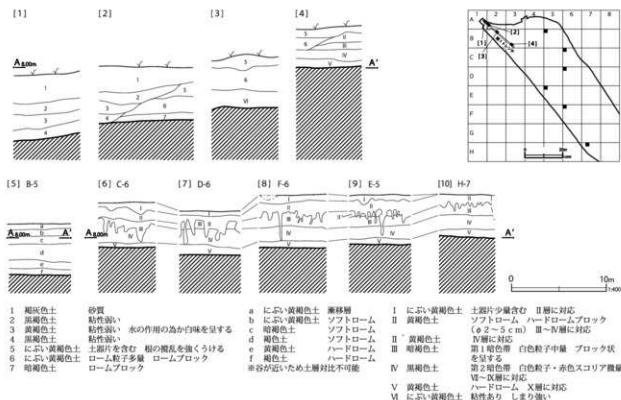
2. 槇野地原遺跡の基本層序

槇野地原遺跡の地形は、台地部と谷部とに大別できる。調査区は北側の谷に向かって緩やかに傾斜しており、台地の縁辺部であるB-3、A-4グリッド周辺では、ローム層の急な落ち込みが認められる。今回の調査では、B-H-5〜7グリッドの南北ラインに沿って、9か所のテストピットを掘削し、旧石器及びローム層の堆積状況を確認した。このうち、6か所について、第10図[5]〜[10]に土層図を示した。また、谷と垂直方向に交わる第1トレンチを設定し、谷の埋没状況を確認した。堆積状況は、同図[1]〜[4]に示した。

台地部の、[5]は、谷との距離が近く浸食の影響を受けているため、土層の対比ができなかった。一方、[6]〜[10]では、武蔵野台地標準層序との対比が可能であった。I層は、にぶい黄褐色土の漸移層で、主に縄文時代の遺物を包含する。武蔵

野台地標準層序II層に対応する。II・II'層は、武蔵野台地標準層序III〜IV層に対応する。根による攪乱が激しく、ソフトローム化が進行している。これは、深いところでIV層下位まで達する。III層は第1暗色帯、IV層は第2暗色帯である。V層は、武蔵野台地標準層序X層に対応する。VI層はハードローム層であるが、土層の対比はできなかった。

谷部は、ローム粒子やロームブロックを主体とするにぶい黄褐色土や、ロームブロックを多量に含む暗褐色土によって埋没している。あわせて、[1]・[2]に示すとおり、この埋没層を侵食する一段階新しい谷が形成されていた。新しい谷では底面に近い3・4層で発掘調査時に湧水が認められ、地下水の影響を強く受けていたと想定される。3層には水の影響による白色化が認められた。



第10図 基本層序

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第2次調査では、縄文時代の住居跡が4軒検出された。すべて、縄文時代前期後葉の諸磯b式期に属するものである。

縄文時代の遺構は調査区の南側に分布し、住居跡は特に南端部に集中している。本調査区の南に位置する植野地原遺跡第1次調査地点では、縄文時代前期の黒浜1式期の住居跡が1軒検出されている。このことから、縄文時代の集落はより南側に広がり、今回検出された住居跡群が、集落における住居分布域の北縁にあたると思われる。

出土した遺物は相対的に少なく、器形を復元できた個体はわずかであった。出土した土器の多くが、浮島Ⅱ式に比定されるものであり、諸磯b式が少量含まれる。

第1号住居跡（第11～14図）

J-10・11グリッドに位置する。調査区東側の境界と接しており、住居跡のおよそ半分が調査区外となる。東側境界から約2mの範囲は農業用の配水管によって壊されている。

規模は計測範囲で、長軸長6.6m、短軸長3.7m、深さ0.4m、長軸方位はN-33°-Wである。平面形態は、隅丸方形と推察される。

西壁に沿って、深さ5cmの壁溝が、弧状に検出された。

が跡は、3基検出された。住居跡の北寄りにP2と、これを壊すが1が位置し、西寄りにP7を壊すが3が位置する。

出土遺物は第13、14図に示した。

土器・土製品（第13、14図1～53）

第1号住居跡からは、浮島式土器を主体に、少量の諸磯b式が出土した。浮島式土器は、砂粒が多く含まれた灰褐色ないしは灰白色の胎土が特徴的で、暗褐色で小礫を含む諸磯b式の胎土とは対

照的である。

1は外反する2単位小波状口縁の浮島式深鉢で、口唇上に斜位の押圧が施されている。胴中位を境に文様帯が区分される。胴上部は半截竹管による結節沈線文間に、三角ないしは斜行する沈線文が施されている。胴下部はアナグラ属貝殻腹縁による連続鋸歯文が施文される。口径15.6cm、現存高16.0cm、推定高20.0cmである。

2は底部から直線的に開く浮島式深鉢で、口唇部に斜行する押圧、口唇直下に平行結節沈線が施されている。器面のほとんどが無文である。推定口径25.0cm、現存高22.4cm、推定高26.5cmである。

3は口縁が直線的に開く深鉢で、地文に附加条縄文が施文されている。文様は半截竹管による爪形文の区画間に、半截竹管の爪形文による交差鋸歯文が施文されている。文様区画や施文の特徴は諸磯b式古段階の特徴を有するが、胴下部には浮島式の地文が施された土器である。推定口径33.3cm、現存高13.4cmである。

4以下に破片を一括した。4～12は諸磯b2式土器で、他に比して胎土に砂粒や小礫を含む傾向がある。4～8は縄文地文上に浮線文を有する諸磯b2式土器で、浮線文上には押圧や刻目が施されている。9、10は地文上に沈線文が施された諸磯b2式土器である。11は諸磯b2式の有孔浅鉢である。12は諸磯式の底部である。

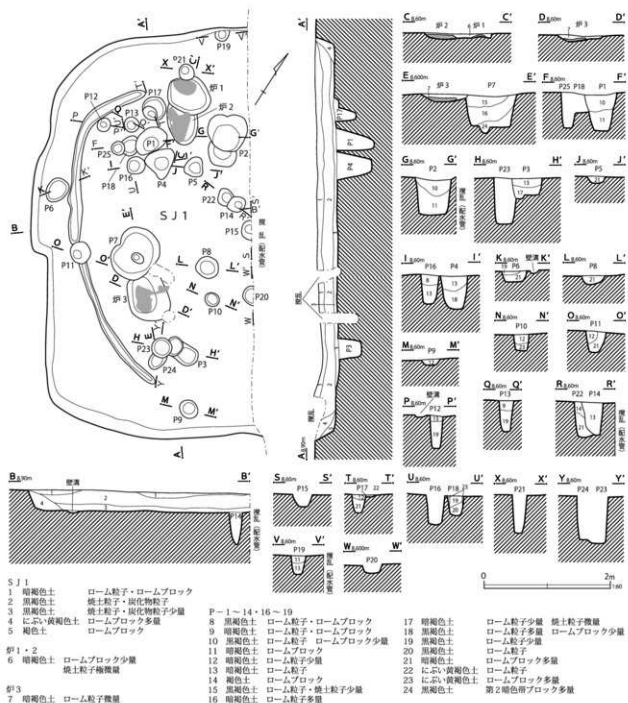
13以下には浮島式を一括した。14は附加条縄文による地文を有するが、他は地文をもたない土器群である。いずれも胴上部に文様が施文され、胴下部は貝殻腹縁文が施文されるか、もしくは素文となる土器と考えられる。

13～18、32～36の口頸部やその周辺部の破片では、半截竹管による平行沈線ないしは爪形文や結節沈線で区画され、平行沈線や結節沈線で、同図

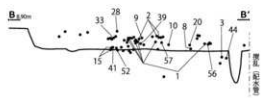
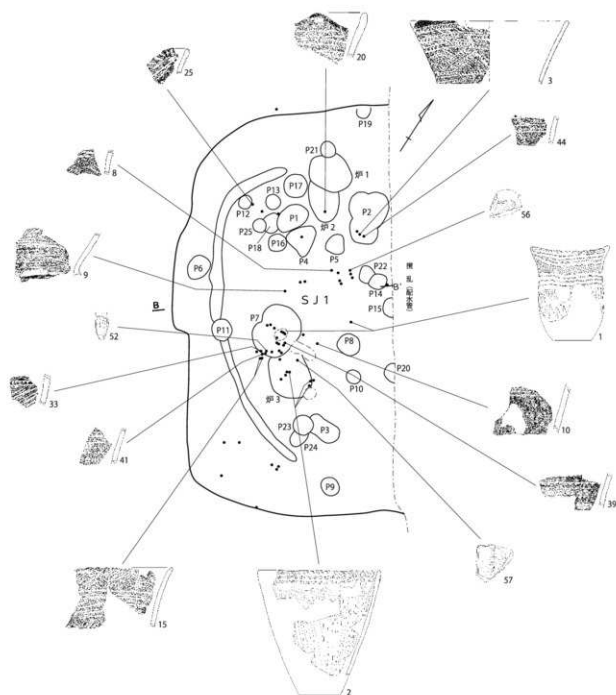
14、15のような鋸歯文や斜行する沈線文が施文されている土器と考えられる。28は平行沈線によるモチーフ間に、同様の工具により列点状の沈線が充填されている。

19~27、29~31、37~51は口唇に沿うか水平に

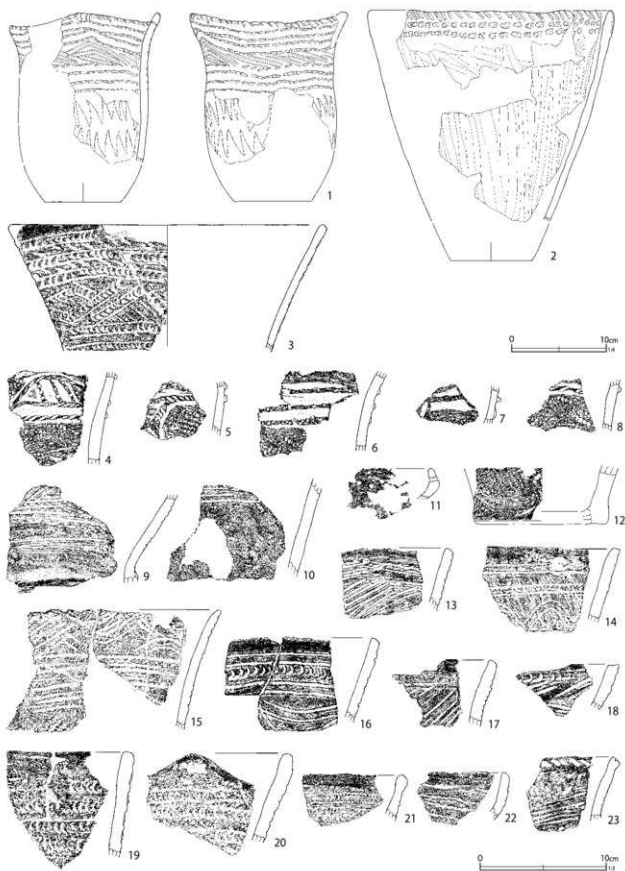
廻る半截竹管による爪形文や結節沈線文、平行沈線が施され、モチーフをもたないと思われる土器を一括した。19、20は同一個体と推定され横走する爪形文が施されている。23～27、29は口唇上に押圧が施されている。30、31は折り返し口縁の粗



第11图 第1号住居跡



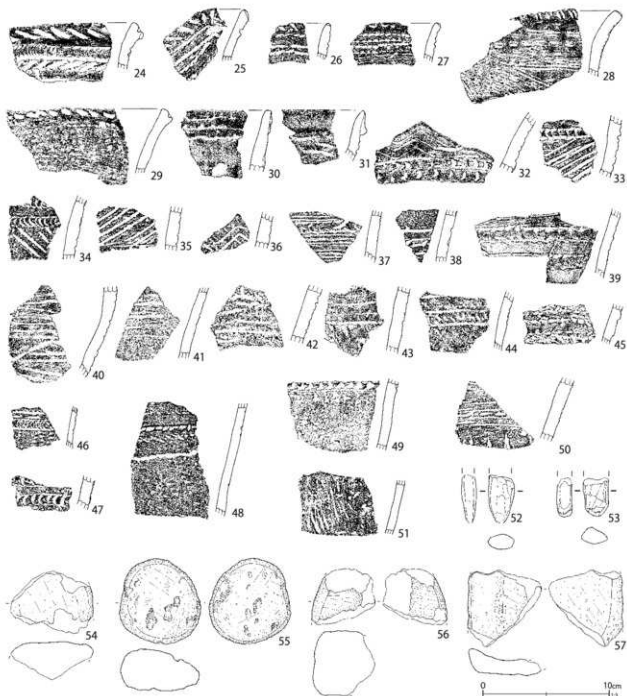
第12图 第1号住居跡遺物出土状況



第13图 第1号住居跡出土遺物(1)

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
52	土製垂飾か	最大幅:2.0cm 高さ:3.6cm 重さ:7.98g 胎土:BDEF 焼成:普通 残存:80% 色調:灰黄褐 №36						12-11
53	土製垂飾か	最大幅:2.0cm 高さ:2.1cm 重さ:6.72g 胎土:BEFJ 焼成:普通 残存:70% 色調:灰黄褐						12-12
54	磨石	安山岩	[5.0]	[6.5]	[3.1]	95.9		21-1
55	磨石	軽石	6.8	6.5	3.4	35.1		21-2
56	石皿	安山岩	[4.4]	[5.1]	5.2	107.7	№6	21-3
57	石皿	安山岩	[6.0]	[5.9]	2.8	41.1	№30	21-4



第14図 第1号住居跡出土遺物(2)

製土器であろう。49～51は胴下部に貝殻腹縁による連続鋸歯文が施文されている。圧痕の状況から、ハイガイもしくはハマグリによる施文と考えられる。

52、53は、上部を欠損する土製品である。形態から垂飾の可能性がある。

石器 (第14図54～57)

54は、安山岩製の磨石である。表面が滑らかに摩耗している。55は、軽石である。平坦面にわずかに擦痕がみられることから、磨石と考えられる。ただし、多孔質であることから、浮子として使用された可能性もある。56、57は、安山岩製の石皿である。56は、表裏面の平坦部が摩耗している。57は縁部が明確で、皿部に敲打による浅い凹みがみられる。

第2、3、5号住居跡 (第15図)

I・J-10グリッドに位置し、3軒が重複して検出された。第2、3号住居跡に壊されていることから、最も古いのは第5号住居跡である。

出土遺物はほぼ同時期であり、住居跡間の時期差を遺物からうかがうことはできなかった。そのため、第2、3号住居跡の新旧関係は不明である。

発掘調査時には、重複部分における壁面の検出が困難であった。また、3軒の住居跡は、床面の高さがほぼ同位であった。そこで、整理の際に壁の遺存部分から平面形態を想定し、復元した。

なかでも、第5号住居跡は、大部分が重複する住居跡や土壌によって壊されていたため、平面形態をとらえることは非常に困難であった。そのため、第1～3号住居跡とは相違が生じるものの、遺存する南西コーナーと東壁の一部を結び長方形とした。柱穴の帰属については、発掘調査時の覆土の特徴や深さを検討し、平面的な配置を加味して確定した。なお、帰属関係が明確にできなかった柱穴も存在する。炉跡は、第2、3、5号住居跡の範囲から5基検出されている。これらは、平面的な配置から帰属を決定した。

第2号住居跡 (第16、17図)

J-10グリッドから検出された。第5号住居跡と重複し、これを壊している。また、第21、100、103、104号土壌に壊されている。平面形態は、隅丸方形と考えられる。発掘調査時には、南西コーナーが検出できなかったため、遺存する部分から復元した。規模は計測範囲で、長軸長4.3m、短軸長4.2m、深さ0.3m、長軸方位はN-33°-Wである。主柱穴はP1、2、4、5と考えられる。柱痕は認められなかった。炉跡は、住居跡の南寄りに2基検出された。炉2はP3に壊されている。

出土遺物は、第17図に示した。

土器 (第17図1～25)

第2号住居跡から出土した遺物量は多くはない。また、小破片が多く断片的な資料であるため、住居跡の所属時期が不明瞭である。

1は波状口縁で、口唇下に幅広い爪形文が施文されることから、諸磯a式新段階と考えられる。

2～6は、縄文地文上に浮線文が施文される諸磯b2式土器と考えられる。2、3はキャリバー形の口縁部破片である。2は口縁部に渦巻状の浮線文が施文されている。いずれも浮線には棒状工具による押王が施されている。

7～10は縄文地文上に半截竹管による平行沈線文が施文された諸磯b式土器で、同図2～6と同時期と考えられる。7は小波状の口縁部破片で、口唇に沿って廻る平行沈線下に、器面を区画する平行沈線が描かれている。10は渦巻状の平行沈線が描かれている。

11～23には浮島式土器を一括した。11～14、16は半截竹管による平行沈線や爪形文が施文される。11、12は口唇上に押王が施されている。

15は平行沈線間に重畳する鋸歯文が施文されている。

17には貫通孔が施されていることから、浅鉢形土器であろう。文様は認められない。

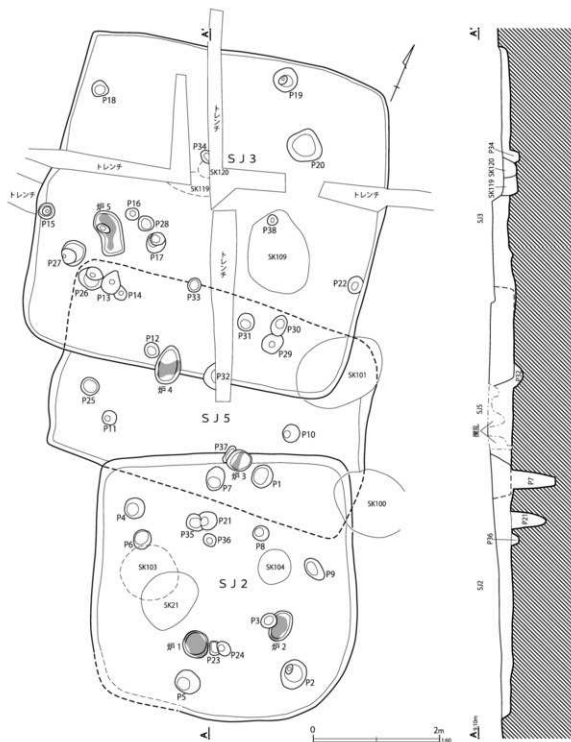
18～20は半截竹管による鋸歯文が施されると思

われる胴部破片である。21は平行沈線が施文されている。22、23は胴下部の破片で、貝殻腹縁による鋸歯文が施文されている。

24、25は底部破片で、24は諸磯Ⅱ式、25は胎土や整形から浮島式と考えられる。

石器 (第17図26)

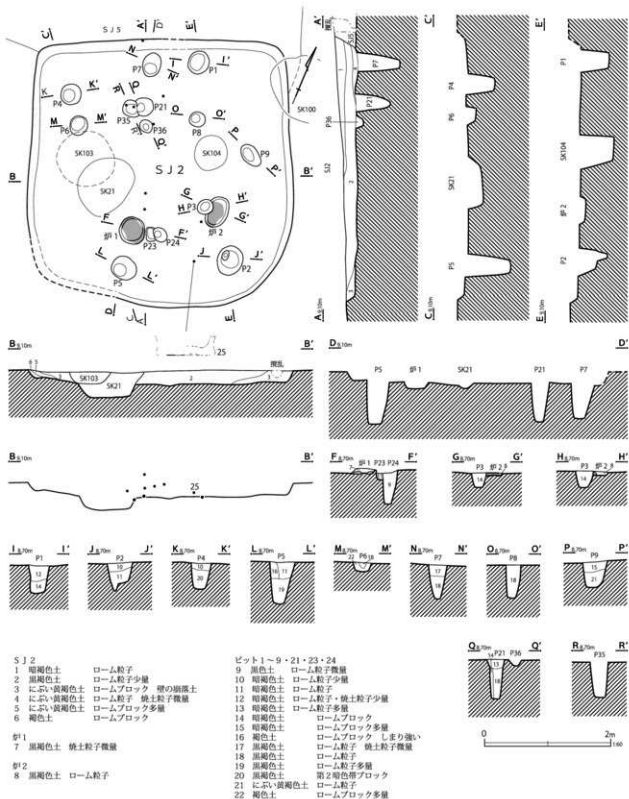
26は、チャート製の石鏃である。無茎で基部が平坦である。剥片の縁辺を加工している。先端部を鏃状に作り出していることから、石鏃の可能性もある。



第15図 第2、3、5号住居跡

第3表 第2号住居跡出土石器観察表(第17図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
26	石鏃	チャート	2.3	[1.6]	0.8	2.5	石鏃の可能性あり	21-5



第3号住居跡 (第18～23図)

I・J-10グリッドに位置し、第5号住居跡、第101、109号土壌と重複しこれを壊している。第119、120号土壌に壊されている。検出された4軒の住居跡のうち、最も遺存状態が良好であった。

規模は計測範囲で、長軸長5.5m、短軸長5.2m、深さは0.4m、長軸方位はN-78°-Eである。平面形態は、隅丸方形を呈する。

ガ跡は、住居跡の西寄りに1基検出された。出土遺物は第20～23図に示した。

土器・土製品 (第20～23図1～87)

第3号住居跡は、検出された縄文時代の住居跡の中で最もまとまって遺物が出土した。

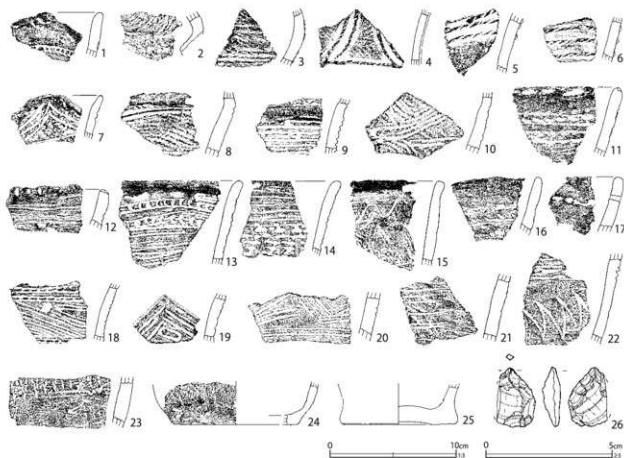
1は半截竹管により区画された横帯間に、鋸歯状の平行沈線文が密に施されている。口径35.5cm、現存高21.3cmで、本遺跡で出土した浮島式土器の中では最も大型の個体である。

2は器面前面に恐らくハマグリ腹縁による鋸歯文が施された土器である。施文方向は横位だが、方向は不安定である。推定口径19.6cm、現存高20.0cm、推定高24.0cmである。

3は半截竹管による平行沈線間に、半截竹管を2本1組にして連続押圧が施された土器で、貝殻腹縁を模したようにも見える。現存部最大径26.0cm、現存高10.0cmである。

5は細い半截竹管を用いて横帯を区画し、区画内に同様の工具で、上半部に鋸歯文ないしは交差鋸歯文を、下半部には鋸歯文間が弧状の沈線が密に施文されている。文様構成は諸磯b式であるが、胎土や整形は諸磯b式とは異なり、浮島式に通じる。現存部最大径15.6cm、現存高8.6cmである。

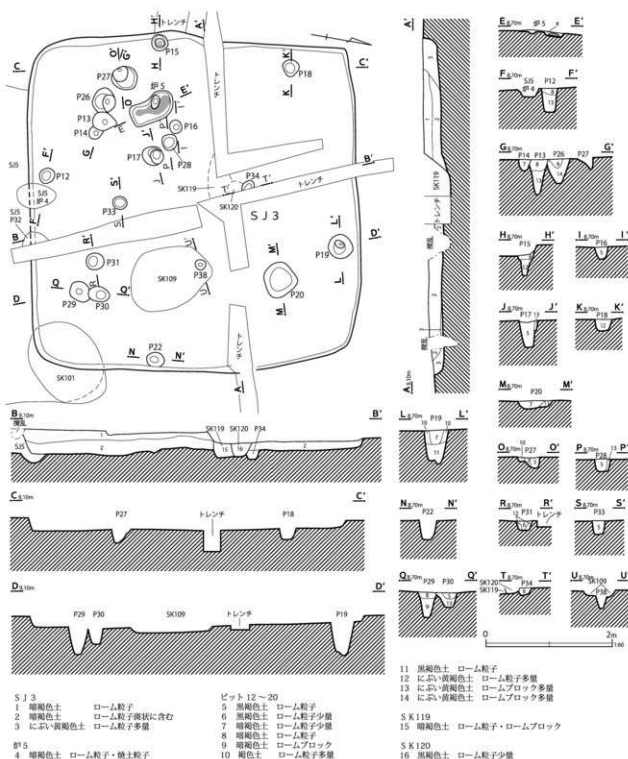
6は半截竹管により、短い平行沈線が施文された土器で、あるいは貝殻腹縁文の模倣であろうか。現存部最大径16.0cm、現存高8.0cmである。



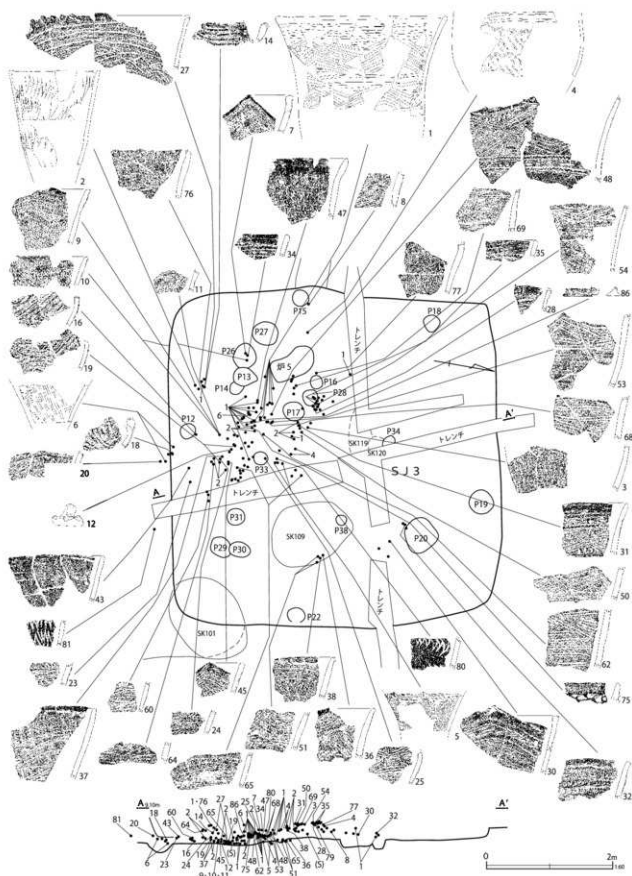
第17図 第2号住居跡出土遺物

4は胴中位に半截竹管による平行沈線が施文され、胴下部には間隔の粗い附加条縄文と結節部の回転痕が施文されている。現存部最大径28.0cm、現存高14.0cmである。

第21～23図に破片類を一括した。7は4単位波状口縁の波頂部で、口唇に沿って施文された爪形文下に、鋸歯状の文様が施されている。諸磯a式であろう。8は間隔の狭い鋸歯文が重畳施文され、



第18図 第3号住居跡



菱形状となっている。諸磯 a 式であろう。9～11は同一個体と考えられる。やや幅の広い平行沈線間に、同一工具による爪形文が施文されている。文様構成は平行沈線間が鋸歯状となり、10から緩い波状口縁が想起される。諸磯 b 式古段階であろう。

12～24に諸磯 b 2 式の浮線文が施文された土器を図示した。12は獣面突起で、イノシシを表現したものと考えられる。正面には沈線と刺突で顔を表現している。側面には細い浮線が X 字状に貼付されている。獣面突起は本例のみである。

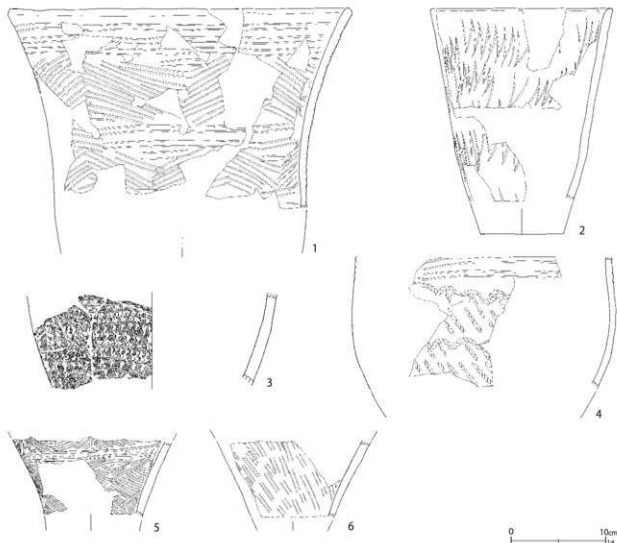
13～19は口縁部から頸部にかけての破片である。

13は内湾する口縁部で、口唇上に突起を有する。14、15はキャリバー状の口縁部で、緩い波状口縁と推定される。13～15は、縄文地文で、口唇に沿って浮線が廻り、以下に文様が施文されるが、詳細は不明である。

16～19は、口縁下部から頸部にかけての破片である。縄文地文上に浮線による文様が施文されている。文様の詳細は不明だが、恐らく端部が渦巻状に入り組むモチーフと考えられる。

20～24は胴部破片である。いずれも縄文地文上に器面を廻る浮線が貼付されている。

25、26は、縄文地文上に沈線文が描かれる諸磯



第20図 第3号住居跡出土遺物(1)

b 2式土器である。25は口頸部で、口縁部には鋸歯文に接した沈線により、菱形のモチーフが描かれている。26は平行沈線のみである。

諸磯式は、胎土に小礫を多く含み、褐色の色調のものがほとんどである。後述する浮島式土器は、胎土に細砂粒が含まれ、灰白色の色調が多いことから、歴然とした差異がある。

27以下に浮島式土器を図示した。27は口唇上に小突起が貼付され、口唇下を廻る平行沈線によって区画された横帯内には、鋸歯文を交差させ菱形のモチーフが描かれている。地文は附加条縄文である。

28～30は平行沈線の土器で、28、29の口唇上には突起が貼付されている。30は4単位の波状口縁で、口唇に沿った爪形文下、鋸歯状ないしは菱形のモチーフが描かれた土器と思われる。

31は口唇下を廻る爪形文下、鋸歯状の沈線を上下に施文し、菱形のモチーフを描き出している。

32～35は、口唇下に爪形文が施文される破片である。36は波状口縁と推定され、口唇に沿って廻る爪形文下と、器面を水平に廻る平行沈線間に、鋸歯状の平行沈線が施文されている。

37は斜行ないしは水平に施文された平行沈線の土器である。

38は、口唇下を廻る平行沈線下に、斜行する平行沈線が施文されている。

39～41、44、46は、平行沈線が器面を廻る破片で、文様の区画が否かは不明である。46は、粗い縄文を地文としている。47は爪形文を口唇と並行して密に施文しているが、あるいは貝殻腹縁の施文効果を図った可能性もある。

42は器面を水平に廻る平行沈線間に、斜行する平行沈線が施文されており、37に近い要素がある。

43は水平に施文された平行沈線下に、鋸歯状の平行沈線が描かれている。

45は波状口縁で、波頂部直下には、端部が入り組み状となる平行沈線文が施されている。

48は波状口縁と考えられ、爪形文で区画された口縁部に、鋸歯状の平行沈線文を上下に施文することにより、鋸歯状のモチーフを描き出している。文様帯区画線間や、文様空白部には刺突が加えられている。48は49と同一個体の可能性がある。50、51、53～55も同様のモチーフ構成をもつと考えられる。55は地文に粗い縄文が施文されている。56～58、60～62は、小破片で詳細が判別しかねるが、平行と斜行する沈線が描かれていることから、あるいは同様のモチーフが描かれる可能性も考えられる。

52は平行沈線で区画された横帯内に、鋸歯状の平行沈線文が施文されている。

59は曲線的な沈線が密に描かれており、あるいは第20図5のようなモチーフの一部とも考えられる。

63～70には、沈線が粗く施文された土器を図示した。63は器面を廻る平行沈線間に、斜行する平行沈線が施文されていることから、多帯構成と考えられる。64、65は弧状の平行沈線文が描かれている。66～71は粗い平行沈線の土器で、詳細は不明である。

72は爪形文が器面を廻る土器である。

73～75は、口唇が肥厚する土器で、74には指頭による押圧が、75には工具による押圧が施されている。76～81には貝殻腹縁の土器を図示した。

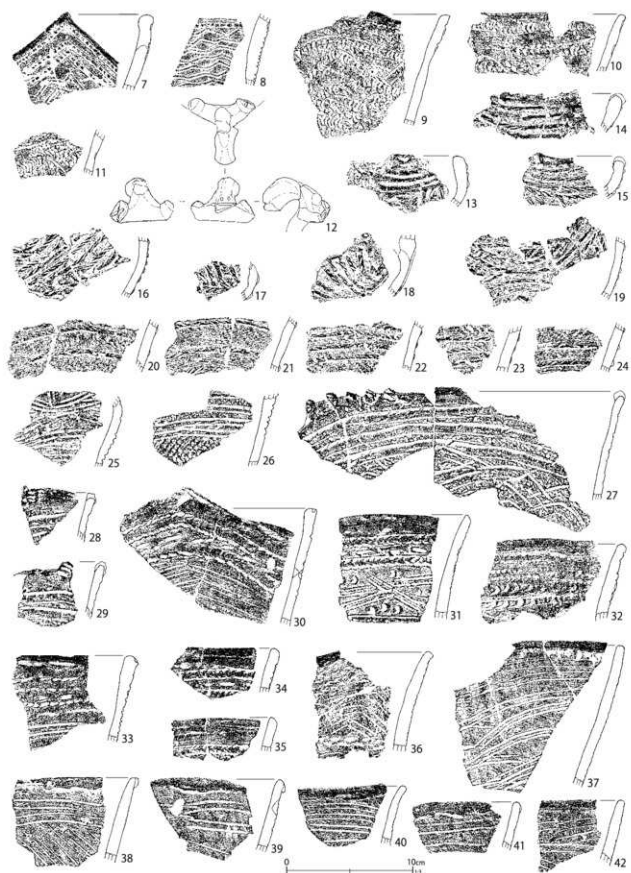
82～86には底部を図示した。83には、貝殻腹縁文下、縄の結節部が回転施文されている。86には半截竹管による短い沈線が施文されている。

87は厚みのある円板状で、残存部位から土製塊状耳飾りと考えられる。

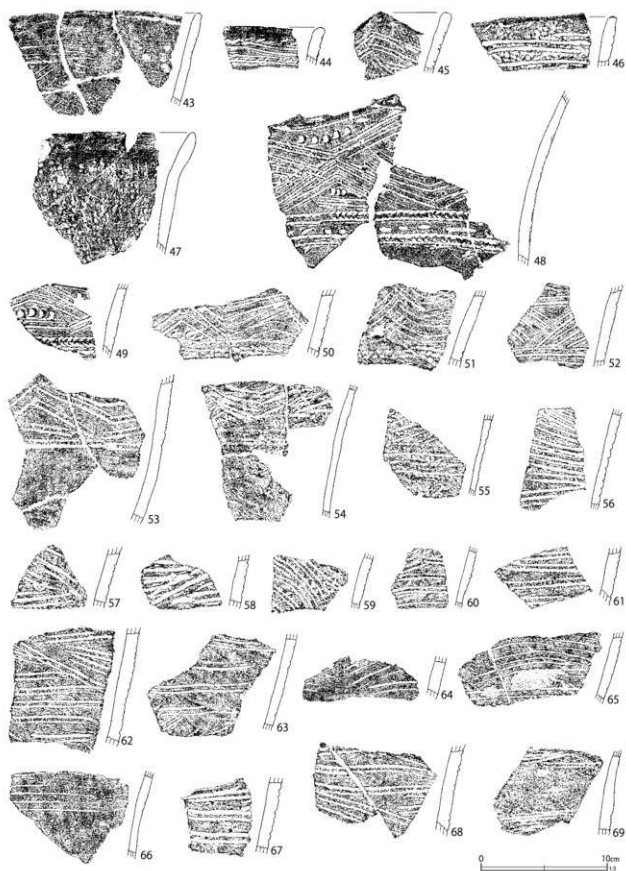
石器 (第23図88～91)

88は、チャート製の石鏃である。無茎で基部が平坦である。縁辺を加工しているが、先端が先鋭でないことから、未製品と考えられる。

89は、黒曜石製の縦長割片である。背面に同じ



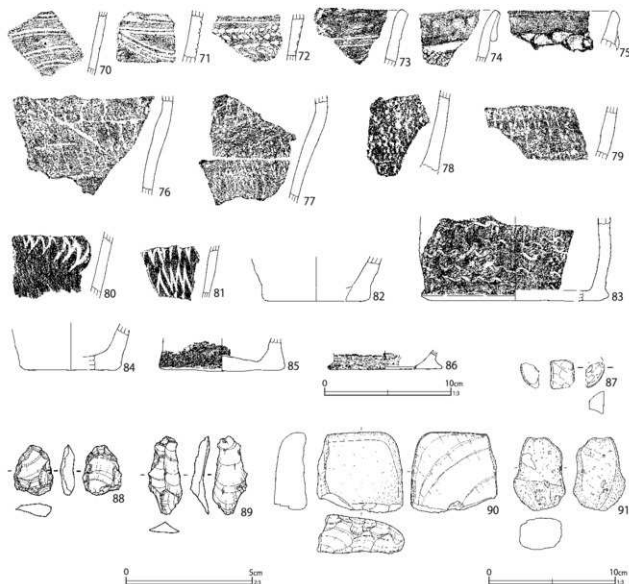
第21图 第3号住居跡出土文物(2)



第22图 第3号住居跡出土遺物(3)

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表(第23図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
87	土製珠状耳飾り	幅:1.1cm 高さ:2.0cm 重さ:4.93g 胎土:BEFI 焼成:良好 残存:20% 色調:ぶい・褐						12-13
88	石鏃	チャート	2.0	1.5	0.5	1.9		21-6
89	剥片	黒曜石	3.1	1.3	0.8	1.5		21-7
90	礫器	ホルンフェルス	6.4	6.8	3.0	190.7		21-8
91	浮子か	軽石	5.8	4.1	3.1	7.2		21-9



第23図 第3号住居跡出土遺物(4)

形の剥片を剥離した痕跡が残る。

90は、ホルンフェルス製の礫器である。扁平な分割礫の下端部に表裏面から加工している。

91は、軽石である。多孔質で、両側縁が抉れていることから、浮子の可能性がある。表裏面にわずかに擦痕がみられる。

第5号住居跡 (第24図)

J-10グリッドに位置する。重複する第2、3号住居跡、第100号土壌に壊されている。第101号土壌を壊している。

規模は計測範囲で、長軸長5.4m、短軸長3.3m、深さ0.2m、長軸方位はN-90°-Wである。平面形態は、東西に長い長方形と想定される。

柱穴は、P25、32が本住居跡に帰属するものと想定したが、いずれもごく浅く不確定である。

が跡は、住居跡のやや南寄りの中央部と、西寄

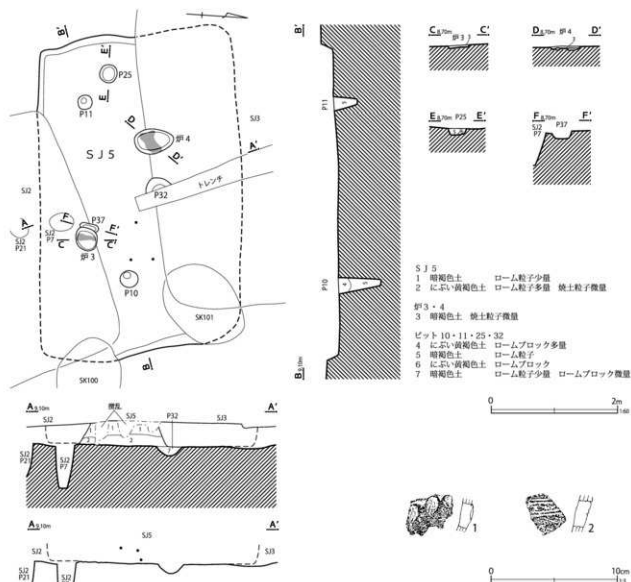
りに位置している。出土遺物は第24図に示した。

土器 (第24図1、2)

第5号住居跡から出土した遺物は極めて少なく、土器は図示した2点にとどまった。

1は棒状工具による押圧が施された土器で、恐らく浮島式の肥厚する口唇部直下の破片であろう。胎土は細砂粒が多く含まれ、色調は灰白色である。

2は幅の狭い平行沈線が施文された土器で、沈線間には刺突が施されている。細砂粒を多く含み、色調は灰褐色である。



第24図 第5号住居跡、出土遺物

(2) 土壌

本調査で検出された土壌110基のうち、縄文時代のもと考えられる土壌は25基である。ほとんどの土壌の覆土には縄文土器の破片が含まれていたため、出土状況などを精査し、遺物の帰属が不確定な土壌については形態や覆土の特徴から時期を決定した。規模等は第15～17表に示した。

第1号土壌 (第25、27図)

H・I-9グリッドに位置する。第2号土壌と重複し、これを壊している。隅丸長方形である。

出土遺物は第27図1～4に示した。1は諸磯b2式浮線文土器、2、3は附加条縄文が施文された浮島式土器である。4は結節浮線文の十三菩提式土器で、混在と考えられる。

第2号土壌 (第25、27図)

H・I-9グリッドに位置する。第1号土壌と重複し、これに壊されている。隅丸方形である。

出土遺物は第27図5に示した。附加条縄文が施文されており、浮島式土器と考えられる。

第3号土壌 (第25、27図)

I-9グリッドに位置する。同グリッドP9と重複するが新旧関係は不明である。楕円形である。

出土遺物は第27図6～10に示した。6～8は貝殻腹縁文が施文された浮島式土器である。7は口唇部が強く外反する。9は無文の胴下部破片で、輪積痕が見られることから、浮島式と考えられる。10は中央部に孔をもつ土製の珠状耳飾りである。

第4号土壌 (第25、27図)

I-9グリッドに位置する。第5号土壌と重複し、これに壊されている。楕円形である。

出土遺物は第27図11～14に示した。11は附加条縄文が横位羽状に施文されている。12、13は半截竹管による平行沈線が認められ、13は鋸歯状に施文されている。14は横位縄文施文の土器である。すべて浮島式と考えられる。

第5号土壌 (第25、27図)

I-9グリッドに位置する。第4号土壌と重複

し、これを壊している。楕円形である。

出土遺物は第27図15～24に示した。16、17は半截竹管による爪形文、18には平行沈線文が施文されている。19は附加条縄文地文上に、半截竹管により器面を廻る平行沈線と曲線的なモチーフが描かれている。20は半截竹管による弧状の平行沈線を上下に施文し、菱形状のモチーフを描いたものと考えられる。21は貝殻腹縁文である。

22、23は底部破片で、22は浮島式と考えられる。23は浮線文が施文された諸磯b2式土器である。24はチャート製の二次加工剥片である。剥片の縁辺に連続的に加工している。

第9号土壌 (第25図)

H-9グリッドに位置する。楕円形である。

第12号土壌 (第25、28図)

I-9グリッドに位置する。楕円形で、断面はわずかにオーバーハングするバケツ形である。

出土遺物は第28図25、26に示した。いずれも附加条縄文を地文にもち、26には地文上に沈線が施されている。いずれも浮島式である。

第15号土壌 (第25、28図)

H-9・10グリッドに位置する。第14号土壌と重複し、これに壊されている。楕円形である。

出土遺物は第28図27、28に示した。27は鋭利な工具による沈線文が施されている。浮島式である。28は縄文のみの小破片で、胎土や原体から、諸磯式と考えられる。

第16号土壌 (第25、28図)

H-8グリッドに位置する。楕円形である。

出土遺物は第28図29に示した。附加条縄文が施文された浮島式である。

第17号土壌 (第25、28図)

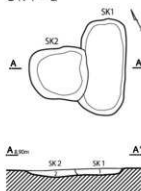
G-8グリッドに位置する。楕円形である。

出土遺物は第28図30に示した。繊維を含み無節縄文が施文された黒浜式である。

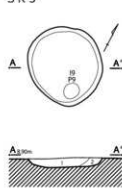
第18号土壌 (第25図)

H-8グリッドに位置する。楕円形である。

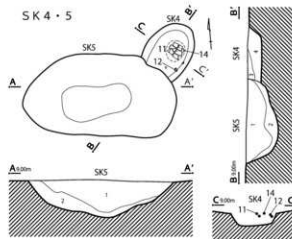
SK 1・2



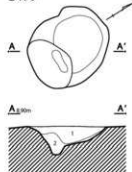
SK 3



SK 4・5



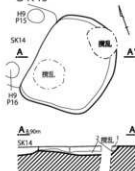
SK 9



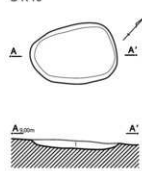
SK 12



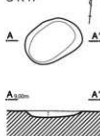
SK 15



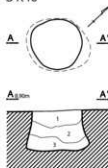
SK 16



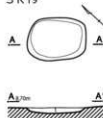
SK 17



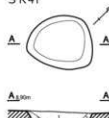
SK 18



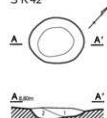
SK 19



SK 41



SK 42



SK 1・2
1 黒褐色土 (SK1)
2 暗褐色土 ローム粒子 (SK2)

SK 3
1 暗褐色土
2 にぶい黄褐色土

SK 4・5
1 ローム粒子・ロームブロック (φ2~5cm) 少量 しまりあり (SK5)
2 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色粒子多量 ロームブロック (φ3cm) 少量 (SK5)
3 暗褐色土 ローム粒子多量 (SK4)
4 暗褐色土 ローム粒子極多量 ロームブロック (φ2cm) 多量 (SK4)

SK 9
1 暗褐色土
2 暗褐色土 ローム粒子

SK 12
1 黒褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子少量
腐化粒子微量
2 暗褐色土 ローム粒子極多量

SK 15
1 黒褐色土 ローム粒子多量 しまりなし
2 褐色土 ローム粒子極多量 黒褐色粒子多量 しまりあり

SK 16
1 暗褐色土 ローム粒子多量 黒褐色粒子少量 しまり強い

SK 17
1 褐色土 ローム粒子極多量 黒褐色粒子多量 しまりあり 黒褐色粒子多量

SK 18
1 暗褐色土 ローム粒子極多量 ロームブロック (φ2cm)・黒褐色粒子多量
2 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (φ2cm) 微量
3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (φ2cm) 少量

SK 19
1 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色粒子少量

SK 41
1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 にぶい黄褐色土 ローム粒子偏在に含む
3 暗褐色土 ローム粒子少量
4 にぶい黄褐色土 ローム粒子多量

SK 42
1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 にぶい黄褐色土 ローム粒子多量

0 2m 1:40

第25図 土壌(1)

第19号土壌 (第25、28図)

G-9グリッドに位置する。隅丸長方形である。

出土遺物は、第28図31、32に示した。31は平行沈線間に爪形文が施されており諸磯b式古段階と考えられる。32は半截竹管を交互にずらしながら施したもので、貝殻腹縁文風な施文である。

第41号土壌 (第25、28図)

F-7グリッドに位置する。楕円形である。

出土遺物は第28図33～35に示した。いずれも繊維を含む黒浜式土器で、33は撚りの粗いRL、34は撚りの細かいRL、35は無節Lの原体が施文されている。

第42号土壌 (第25、28図)

F-7グリッドに位置する。楕円形である。

出土遺物は第28図36に示した。繊維を含み、LR原体が施文された黒浜式である。

第48号土壌 (第26、28図)

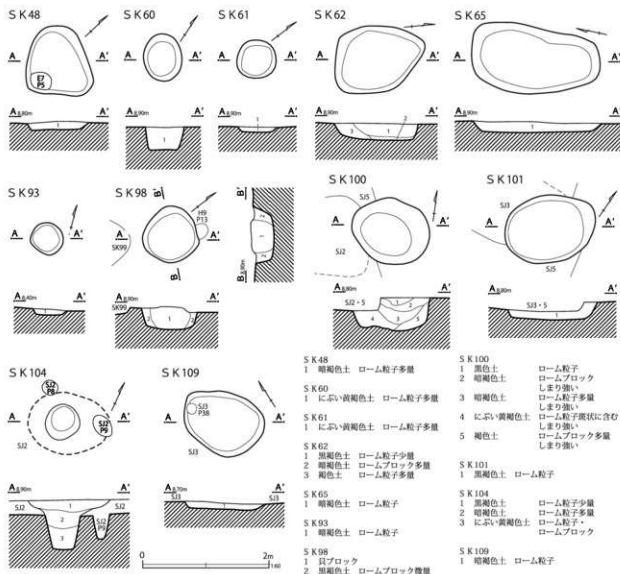
E-7グリッドに位置する。楕円形である。

出土遺物は第28図37～39に示した。いずれも1段3条のRL原体による縄文施文の土器で、諸磯b式と考えられる。

第60号土壌 (第26、28図)

C-6グリッドに位置する。楕円形である。

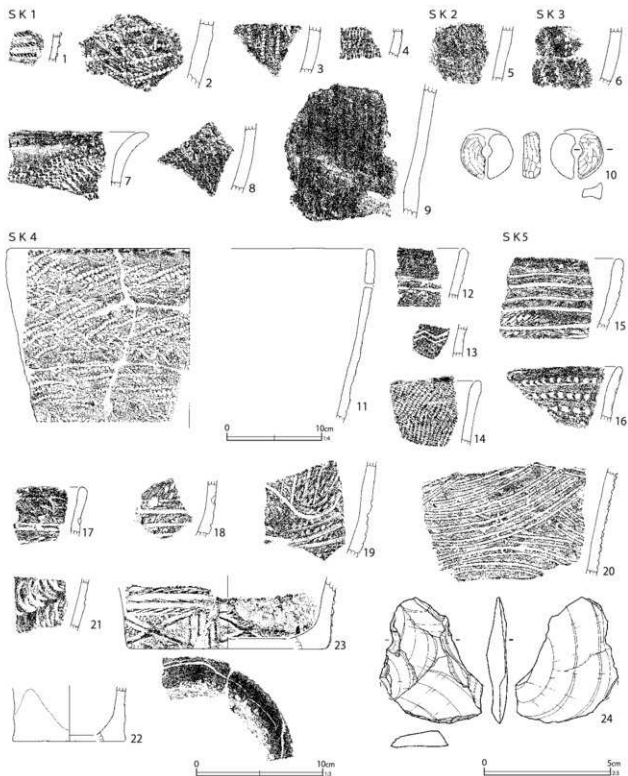
出土遺物は第28図40に示した。半截竹管による



第26図 土壌 (2)

第5表 土壇出土遺物観察表(第27図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
10	土製片状耳飾り	SK3 径(4.0)cm 高さ3.5cm 重さ7.79g 胎土:BEFI 焼成:良好 残存:45% 色調:ぶい褐						12-14
24	RF	チャート	5.0	4.1	0.8	12.8	SK5	21-10



第27図 土壇出土遺物(1)

平行沈線が施された浮島式である。

第61号土墳 (第26、28図)

C-5・6グリッドに位置する。円形である。

出土遺物は、第28図41に示した。繊維を含む黒浜式で、無節で撚りの粗い原体による縄文が施文されている。

第62号土墳 (第26、28図)

D-5グリッドに位置する。不整形である。

出土遺物は、第28図42～44に示した。42はL、43はRL、44は附加条の原体を用いて縄文が施文されている。浮島式である。

第65号土墳 (第26、28図)

C-5グリッドに位置する。隅丸長方形である。

出土遺物は、第28図45、46に示した。いずれも貝殻腹縁文が施された浮島式である。

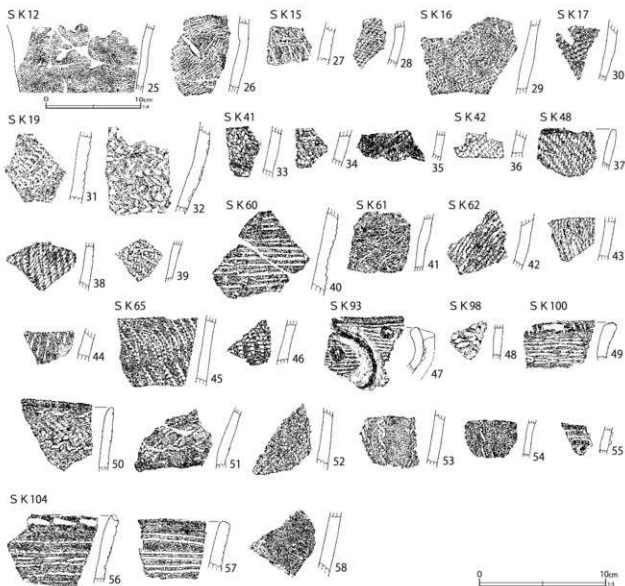
第93号土墳 (第26、28図)

A-5グリッドに位置する。円形である。

出土遺物は、第28図47に示した。半截竹管による密な平行沈線の上に、貝殻状、ボタン状貼付文を持つ諸磯e式である。

第98号土墳 (第26、28図)

H・I-8・9グリッドに位置する。円形を呈



第28図 土墳出土遺物(2)

する。地点貝塚であり、貝については後述する。

出土遺物は、第28図48に示した。繊維を含む黒浜式で、無節Rと思われる粗い原体で施文されている。

第100号土壌 (第26、28図)

J-10グリッドに位置する。第2号住居跡、第5号住居跡と重複しこれを壊している。楕円形である。

出土遺物は、第28図49～55に示した。49は口唇上に半截竹管による押圧が施され、器面には同一工具による結節沈線が施文されている。50はRL縄文地上に横位の結節が回転施文されている。いずれも浮島式である。51～54は十三菩提式と考えられる土器群で、いずれにも結節が施文されている。55は結節浮線文の十三菩提式である。

第101号土壌 (第26図)

J-10グリッドに位置する。第3号住居跡、第5号住居跡と重複する。楕円形である。

第104号土壌 (第26、28図)

J-10グリッドに位置する。第2号住居跡と重複し、これを壊している。円形である。

出土遺物は、第28図56～58に示した。いずれも浮島式で、56は口唇上に半截竹管背面による押圧が施され、器面には同一工具により結節状、間隔のあいた沈線が交互に施文されている。57は半截竹管による沈線が施文されている。58は無文の土器で、いずれも浮島式である。

第109号土壌 (第26図)

I・J-10グリッドに位置する。第3号住居跡と重複し、これに壊されている。楕円形である。

(3) 貝層 (第29、30図、第6表)

H・I-8・9グリッドに位置する第98号土壌からは、ブロック状の貝が検出された。土壌の平面形は長径90cm、短径89cmのほぼ正円形を呈し、深さは35cmである。遺構の検出状況より、土壌の上位は削平されている可能性が高く、本来はさら

に深い土壌であったものと想定される。土壌は、遺構確認面まで貝が充填された状態であった。貝層中から出土した土器片より、時期は縄文時代前期中葉の黒浜式期と考えられる。

貝層は、分層せず全量をサンプリングした。分量は約0.13立米である。サンプルを土ごと乾燥させて、5mm・2mm・1mm・0.25mmのフルイにかけ、貝種の同定作業を行った。このうち、3,658点について貝種を同定した。サンプルには陸産微小貝が含有されていたが、細小であったため貝種の同定はできなかった。また、貝の風化がかなり進行しており、殻長・殻高が計測できたのは、母数の多いアサリ・シオフキに限られる。計測にはデジタルノギス(ミットヨ製デジマチックキャリパCD-15AX)を使用した。

貝種はアサリ(74.83%)が主体で、次いで多いのがシオフキ(21.29%)である。ハマグリ(0.47%)、マガキ(1.50%)、オオノガイ(1.29%)、マテガイ(0.1%)、オキシジミ(0.26%)、ヤマトシジミ(0.26%)は微量であった(第29図、第6表)。多くが鹹水産の貝類である。また、合わせ貝は、アサリが6点、シオフキが27点含まれていた。

第30図は、アサリとシオフキの殻長および殻高の分布をグラフ化したものである。殻長と殻高は基本的には対応関係にあるため、本文中では殻長値のみで記載することとした。

本土域より出土したシオフキの殻長は、33mmから52mmに及び、最も数が多いのは41～42mmのものである。37mm程度のものから個数が増加する傾向にあり、37～48mm前後の個体を主として採集していたと考えられる。アサリの殻長は、33mmから56mmで、最も数が多いのは、45mmから46mmのものである。39mm程度のものから個数が増加する傾向にあり、40～50mm前後の個体を主に採集していたと考えられる。

計測の結果から、いずれの貝でも、殻長は40～50mmの値にまとまる傾向があり、一定の大きさの

ものを選択して採集していた可能性がある。

出土したシオフキのうち、遺存状態が良好なものを出し、貝殻成長線分析と放射性炭素年代測定を行った(第21、22表)。貝殻成長線分析では、採集は春季から夏季にかけて行われ、貝殻は数回に渡って土壌内に廃棄されたという結果が得られた。また、貝の年齢は平均4歳であり、成熟個体群が主に採集されていたようである。放射性炭素年代測定では、縄文時代前期中葉から後葉という年代が得られた。これは、出土した土器片の年代観と大きく矛盾しないものである。

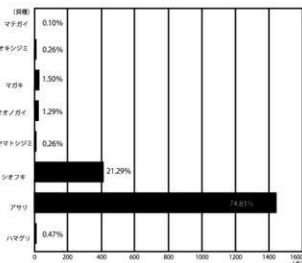
植野地原遺跡の第1次調査では、黒浜式期の住

居跡から、3か所の貝ブロックが検出された。貝種は、アサリ(42.8%)がほぼ半数を占め、その他に、シオフキ(20.5%)、カガミガイ(15.0%)、ハイガイ(11.9%)、ハマグリ(9.8%)が含まれていた。この組成は、本調査の第98号土壌の組成とほぼ同等の値を示している。

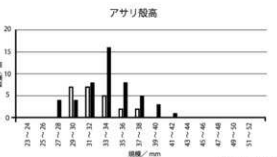
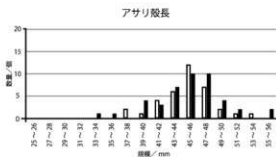
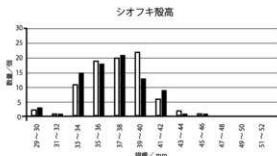
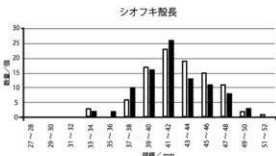
第1次調査第1号住居跡、第2次調査第98号土壌で検出された貝種において主体となるアサリやシオフキは潮間帯を好む貝である。このことから、遺跡周辺は低潮時に干潟の広がる環境であったことがうかがわれる。

第6表 貝種組成表

フルイ	5 mm		2 mm		1 mm	
	L	R	L	R	L	R
ハマグリ	9	9				
アサリ	1429	1304	14	16	3	1
シオフキ	365	404	7	5	1	
ヤマトシジミ	5	1				
オオノガイ	23	20		1		1
マガキ	18	3	10		1	
オキシジミ	4	1	1			
マテガイ	1		1			



第29図 貝種組成グラフ



第30図 殻長、殻高分布

2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第4号住居跡 (第31～34図)

C-3・4グリッドに位置する。規模は、計測範囲で長軸長6.3m、短軸長4.7m、深さ30～40cm、長軸方位はN-79°-Wである。平面形態は長方形を呈する。

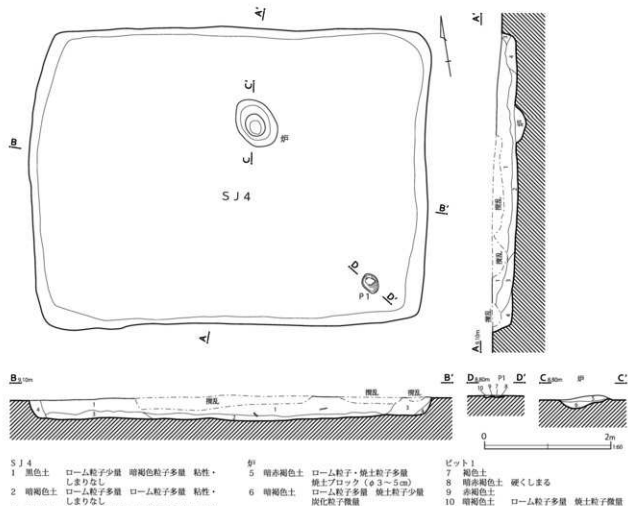
住居跡の中央が攪乱されており、深いところで覆土の半ばまで達する。床面は平坦であった。

柱穴、貯蔵穴などの施設は検出されなかった。が跡は、住居跡中央のやや北より位置し、楕円形を呈する。規模は、長径0.8m、短径0.6m、深さ17cmである。

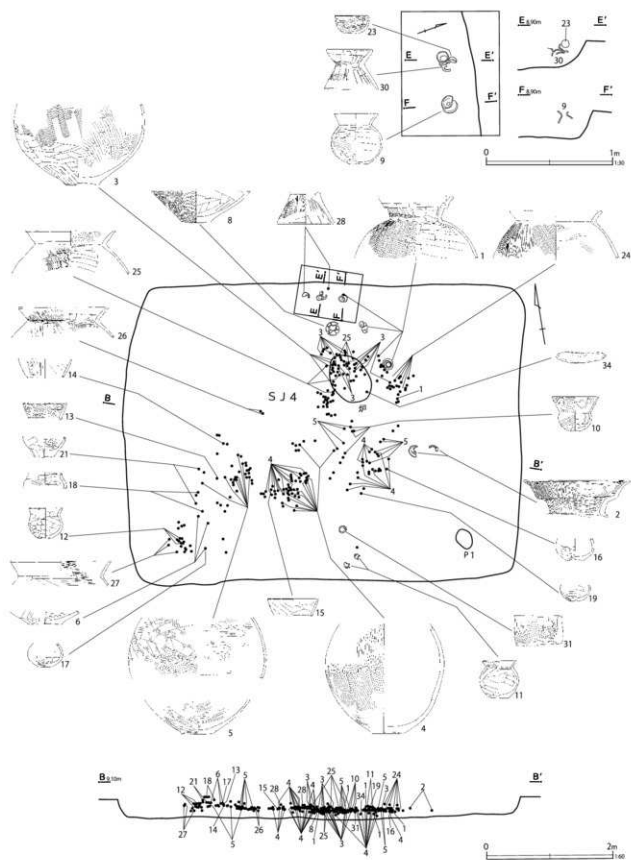
南東隅では、長径0.3m、短径0.2mの楕円形の燃焼面が検出された。深さは4cmとごく浅く、掘り込みはなかったものと考えられる。燃焼面は粘土質であった。いわゆる、祭壇状遺構の可能性はあるが、ここでは便宜的にP1とした。

出土遺物は、第33、34図に示した。遺物は、主に覆土1層と、その下層との境界に位置し、住居跡の南西部分とが跡周辺にまとまって分布する。

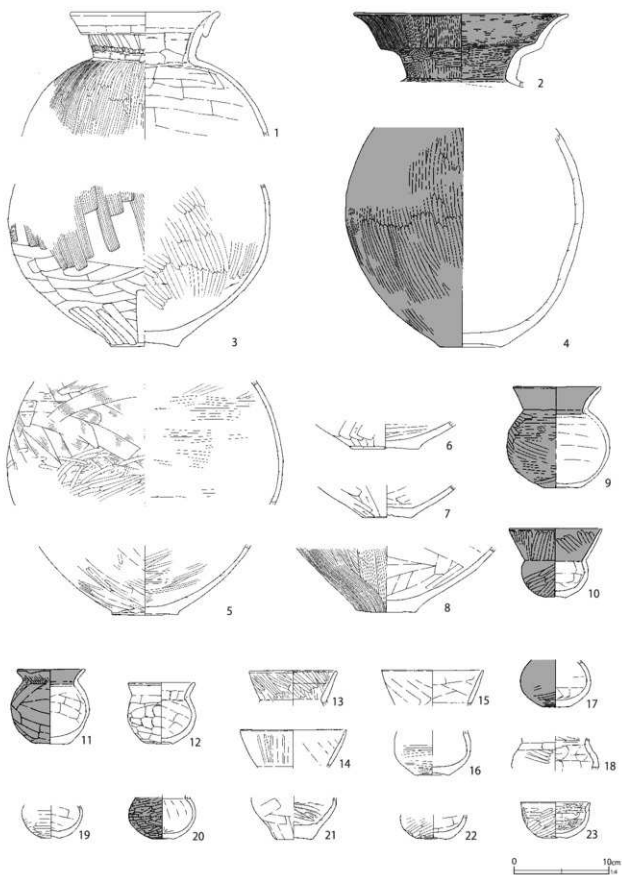
第33図1～8には壺を示した。いずれも、頸部の縮まりが緩く、長胴気味である。1は、複合口縁壺である。口縁部は厚く内外面ヨコナデ、頸部は外面にヘラが当たった痕が巡る。2は二重口縁



第31図 第4号住居跡



第32图 第4号住居跡遺物出土状況



第33图 第4号住居跡出土遺物(1)

壺である。内外面に丁寧なヘラミガキの後、赤彩を施す。3は外面にヘラナデを施す。小口状工具による木目が上部に残る。内面にヘラミガキを施す。4は外面をヘラミガキした後赤彩を施す。内面は風化による剥落が激しく、調整を観察することができなかった。5は、外面は小口状工具によるナデの後、ヘラミガキを施す。内面は3と同様にヘラミガキを施す。

9～22には小型壺、および埴を示した。本住居跡の出土遺物では、小型壺や埴の占める割合が多く注目される。9、11、12、18、21、22は小型壺である。いずれも、内外面に丁寧な調整が認められるが、18、21は他と比べて調整が粗雑で、表面には凹凸が残る。18は内外面とも、ユビナデ、ユビオサエによる調整を主体とする。21の内面には、粘土がまだ乾ききらないうちにヘラを押し付けたような、非常に強いヘラナデが認められる。底部は厚手である。12は体部の外面に強いヘラナデを施しており、ヘラケズリに近い痕跡が残る。10、13～17、19、20は、埴である。口縁部はやや薄手

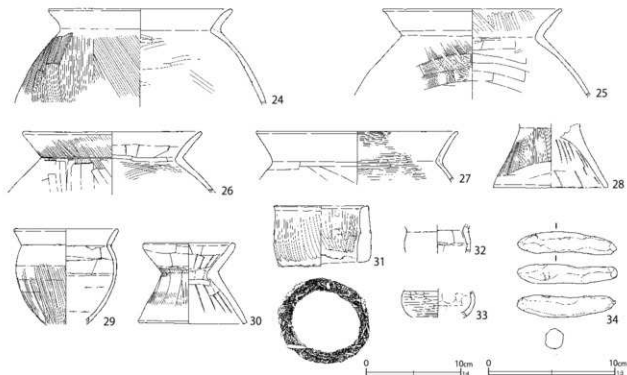
で長く、胴部は丸形を呈する。いずれもヘラナデ、ヘラミガキによる丁寧な調整を施す。

23は鉢である。底部は丸く、やや内側にへこむ。内外面に、ヨコナデ後丁寧なヘラミガキを施す。

第34図24～28には、甕を示した。28は台付甕の脚部である。外面は刷毛目後、下部にヘラナデを施す。内面はやや強いヘラナデである。また、欠損部分が多く図化することはできなかったが、台付甕の胴部が1点出土している。胎土や調整の痕跡から28と同一個体の可能性がある。同様の理由で図化できなかったものとして、平底甕の胴部3点と、底部の形態が不明な甕破片1点がある。

29は小型甕である。内面の調整は弱いヘラナデで、輪積の痕跡が残されている。口縁部ヨコナデ、胴部外面に刷毛目を施す。

30、31は器台である。いわゆる異形器台形土器で、茨城県や千葉県北西部を中心に分布する。30は器受部と脚部がハの字状に開き、接合部が貫通している。脚部部の接地面に対して、ヘラによる面取りを成す。内外面にヘラナデ、刷毛目を施す。



第34図 第4号住居跡出土遺物(2)

第7表 第4号住居跡出土遺物観察表(第33、34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	15.6	[13.2]	—	ABDEG	60	普通	にぶい橙	No198・221・289・290・296	9-11
2	土師器	壺	(22.3)	[7.8]	—	ABEG	60	普通	暗赤	No291・292 赤彩	10-1
3	土師器	壺	—	[17.2]	7.0	ABEF	40	普通	明褐	No80・143・145~147・149・151・152・154・155・160・161・168・169・172・175・181・205・263・280	10-2
4	土師器	壺	—	[24.3]	7.0	ABDG	60	普通	赤褐	No69・71~73・75・93・100・104・108・111~113・115・118~121・123・125~129・131・132・137・139・140・230・238・239・242~245・247・248・253・254・275・283 赤彩	10-3
5	土師器	壺	—	[7.3]	6.9	ABDEGJ	35	普通	赤褐	No3・42・44・51・55・57・58・225・226・228・229・236・237・240・241・246・276	10-4
6	土師器	壺	—	[3.0]	7.0	ABDE	60	普通	明赤褐	No8・9・30・トレンチ	
7	土師器	壺	—	[3.5]	5.0	ABEF	35	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
8	土師器	壺	—	[7.0]	6.3	BDEF	90	普通	赤褐	No288	
9	土師器	小型壺	9.1	10.7	4.0	ABFGI	95	普通	赤褐	No287 赤彩	10-5
10	土師器	増	(9.8)	[7.3]	2.1	ABE	70	普通	にぶい黄	No225・227・231・265 赤彩	10-6
11	土師器	小型壺	7.1	7.9	3.8	ABEF	75	普通	灰黄	No294・295 赤彩	10-7
12	土師器	小型壺	6.8	7.0	2.8	ABEG	95	普通	にぶい黄橙	No16・17・20	10-8
13	土師器	増	(9.2)	[3.8]	—	ABDEF	45	普通	赤褐	No54	10-9
14	土師器	増	(11.1)	[4.0]	—	BDEFGI	30	普通	橙	No37	
15	土師器	増	(10.8)	[3.7]	—	ABDE	55	普通	にぶい黄	No70	10-10
16	土師器	増	—	[4.7]	3.5	ABDEFG	65	普通	にぶい黄橙	No250 赤彩か	11-1
17	土師器	増	—	[5.0]	2.9	ABEFG	55	普通	にぶい橙	No30 赤彩	11-2
18	土師器	小型壺	—	[3.4]	—	ABEF	25	普通	黄褐	No4・7	11-3
19	土師器	増	—	[3.5]	2.8	BEF	55	普通	褐	No255 外面煤付着	11-4
20	土師器	増	—	[4.6]	2.2	ABDFG	40	普通	橙	赤彩	11-5
21	土師器	小型壺	—	[4.5]	3.6	ABEF	60	普通	にぶい褐	No1・6 外面煤付着	11-6
22	土師器	小型壺	—	[2.6]	2.8	BEG	35	普通	にぶい黄橙		11-7
23	土師器	鉢	7.2	3.8	2.4	ABDEF	100	普通	橙	No285	11-8
24	土師器	甕	(19.4)	[10.1]	—	ABEF	30	普通	橙	No210・213~216・218	11-9
25	土師器	甕	(18.8)	[9.3]	—	ABDEF	30	普通	橙	No148・158・164・165・170・188	11-10
26	土師器	甕	(18.7)	[6.5]	—	ABDFG	30	普通	明赤褐	No33・34・トレンチ	11-11
27	土師器	甕	(20.9)	[5.1]	—	BEG	10	普通	黒褐	No14・15・24・トレンチ	11-12
28	土師器	台付甕(脚)	—	[6.7]	12.0	ABDEG	60	普通	橙	No284・297	11-13
29	土師器	小型甕	(10.8)	[10.2]	—	BDEG	30	普通	にぶい赤褐		11-14
30	土師器	器台	9.2	8.5	9.9	ABFG	95	普通	橙	No286	11-15
31	土師器	器台	10.0	6.4	9.5	BEFG	100	普通	明褐	No293 内外面煤付着	12-1
32	土師器	ミニチュア土器	—	[3.1]	—	BEG	25	普通	にぶい黄橙		12-2
33	土師器	ミニチュア土器	—	[2.9]	—	ABFG	30	普通	にぶい黄橙		12-3
34	土製品	棒状土製品	長7.8cm 径1.6cm 重±18.6g			BDEF	100	普通	明黄褐	No195	12-4

被熱の痕跡は認められない。31は筒形を呈する。1段の輪積みによって成形し、上端部を外反気味に整える。接地面全体に、小枝状のものが押し付けられてついたと考えられる圧痕が認められる。内外面ともにヘラミガキを施す。非常に強く焼き締まっており、器器台の可能性が高い。

32、33はミニチュア土器である。胎土は、他の土器よりも白色味が強い。32の外面は風化が激し

く、磨滅している。内面にはヘラナデが施されるが、輪積の痕跡が消しきれずに残されている。33の外面はヘラケズリ後ヘラミガキを施す。内面にはユビオサエの痕跡が残る。

34は棒状土製品である。粘土を手捏ねによって棒状に整え、右側の端部を指でつまんで整形している。表面にはユビナデを施す。

(2) 土墳

検出された土墳110基のうち、古墳時代の土墳は6基である。規模等は第16、17表に示した。出土遺物は大半が小破片で、図化できるものは3点に限られる。また、第57号土墳からは古墳時代の遺物は出土しなかったが、覆土の特徴や形態などから同時期と考えた。土墳は、第4号住居跡より南東方向のD-4～6グリッドの範囲に集中し、第54～57、102号土墳は、南西から北東に一列に分布する。いずれの土墳にも、ローム粒子、ロームブロックを多量に含む暗褐色土、黒褐色土が堆積していた。時期は、出土遺物より第4号住居跡と並行する古墳時代前期と考えられる。

第54号土墳 (第35図)

D-5グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。土師器の破片が少量出土した。

第55号土墳 (第35図)

D-5グリッドに位置する。平面形態は円形である。赤彩を施す土師器の破片が1点出土した。

第56号土墳 (第35図)

D-5グリッドに位置する。平面形態は円形である。土師器壺の頸部や、土師器の破片が少量出土した。

第57号土墳 (第35図)

D-6グリッドに位置する。平面形態は円形である。

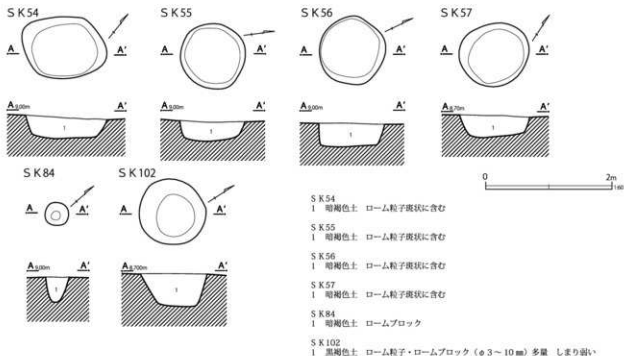
第84号土墳 (第35、36図)

D-4グリッドに位置する。平面形態は円形である。

出土遺物は、第36図に示した。1は壺の口縁部である。内面にわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。また、内外面には赤彩を施す。2は壺の底部である。外面はヘラケズリで整形し、内面にはヘラナデを施す。

第102号土墳 (第35、36図)

D-5グリッドに位置する。平面形態は円形である。出土遺物は第36図に示した。3は壺の頸部である。厚手で、内外面にヘラミガキを施す。



第35図 土墳

第8表 土壇出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(12.8)	[3.3]	—	ABEFG	25	普通	橙	SK84 内外面赤彩	12-7
2	土師器	甕	—	[2.0]	(2.1)	BEFG	25	普通	灰黄褐	SK84	12-8
3	土師器	甕	—	[3.4]	—	ABEG	40	普通	明褐	SK102	12-9



第36図 土壇出土遺物

(3) 土器集中 (第37図、第9表)

D・E-5グリッドに位置する。長さ8.6m、幅2.0mの範囲で、土器の細片が多く出土した。範囲内は確認面よりわずかにくぼんでいる。掘削の痕跡は確認できなかったが、土器の出土状態が特異であったため遺構とした。

土器集中は、古墳時代の土壇群と、近世に比定される第4号溝跡との間にあり、溝跡と近接する。

時期は明確ではないが、出土遺物の多くが古墳時代前期の土師器であったため、ここでは古墳時代の遺構として扱うこととした。ただし、出土遺物の中には縄文土器が25%程度含まれている。

出土遺物は第37図に示した。1はS字状口縁甕の口縁部である。

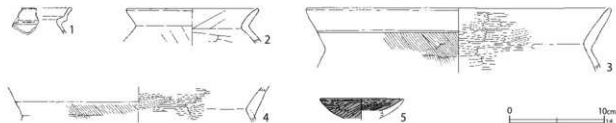
2～4は甕の口縁部である。2は口縁部ヨコナデ、胴部内外面にヘラナデを施す。3、4は同時期の甕としては大型のもので、いずれも、口縁部外面ヨコナデ、胴部外面刷毛目、内面にヘラミガキを施す。

5は器台の器受部である。内外面にヘラミガキによって丁寧に調整し、赤彩を施す。

この他に、器種を特定できたものとして、二重口縁壺1点、小型壺1点、甕4点、高杯の脚部1点があるが、細片であったため図化できなかった。

第9表 土器集中出土遺物観察表(第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	S字状口縁甕	—	[2.8]	—	ABDEG	5	普通	にぶい褐	D-5	12-10
2	土師器	甕	(13.8)	[3.7]	—	ABEF	5	普通	褐	D-5	12-10
3	土師器	甕	(32.0)	[6.7]	—	ABDG	10	普通	明赤褐	D-5・6	12-10
4	土師器	甕	—	[3.8]	—	ABDG	5	普通	橙	D-5	12-10
5	土師器	高杯	(8.8)	[2.1]	—	ABE	20	普通	明褐	D-5 内外面赤彩	12-10



第37図 土器集中出土遺物

3. 中、近世の遺構と遺物

(1) 溝跡

溝跡は5条検出された。やや深めの第1号溝跡と、浅い第2～5号溝跡とに大別できる。第5号溝跡は、第2号溝跡の一部として調査されたが、重複が認められないため単独の溝跡に改めた。いずれも南西から北東方向へ並走することから、これらの溝は互いに関連を持つものと想定される。

第2号溝跡は、aからbの順に1回、第3号溝跡は、bからa、cの順に2回再掘削されている。

遺物は、17世紀後半から近代までの陶磁器などが出土した。18世紀の所産のものが一定量含まれており、溝の主たる使用時期は18世紀代と想定される。規模等は第10表に示した。

第1号溝跡 (第38、40図)

D・E-5～7、E-8、F-5グリッドに位置する。第3号溝跡、第49号土塊と重複するが、新旧関係は不明である。南西側の端部は調査区外に位置し、南東側の端部は、農業用水の配水管によって壊されている。

南西から北東方向へ走り、D-6グリッドで約90°屈曲して南東へ方向を転換する。平面形態は、L字形を呈する。規模はばらつきがあり、総長43.4m、幅1.4～3.0m、深さ57～126cm、方位N-34°-E、N-51°-Wである。南西から北東方向へ走る部分は幅広く深く、北西から南東方向

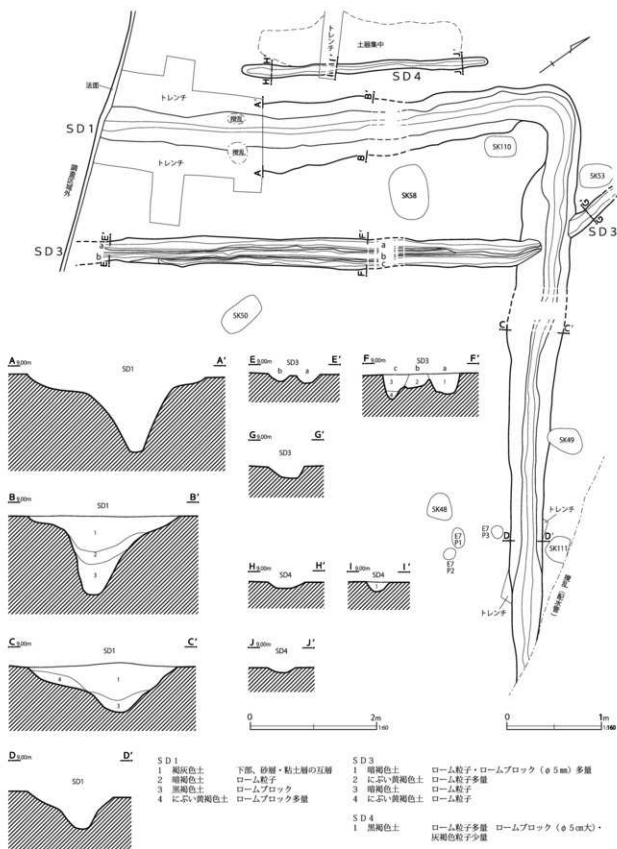
へ走る部分では、幅、深さともに縮小する傾向にある。断面形態はV字状を呈する。最上層である1層下部は、砂層と粘土層の互層堆積である。

出土遺物は第40図に示した。1～7は磁器である。1、2は肥前系の碗で、外面には染付が施される。3、4は肥前系の小坏である。4は底部が厚手で外面に染付が施される。5は肥前系の鉢である。内面には蛇の目軸刺ぎ、外面にはこんにゃく印判による染付が施される。6、7は皿である。6は肥前系で内外面に染付が施される。7は19世紀後半の所産であり、内面に酸化コバルトで型紙摺りを施す。

8～13には陶器を示した。8は瀬戸美濃系の腰鉋碗で、内面には灰釉を外面には鉄釉を施釉する。9は天目茶碗で17世紀初頭の所産である。10は瀬戸美濃系の小坏で、内外面に鉄釉を厚く施釉する。11は瀬戸美濃系の輪割げ皿である。削り出し高台を有し、内外面に鉄釉を施釉する。12は瀬戸美濃系の香炉である。内外面に灰釉を施釉する。外面には、丸ノミ状の工具で半菊花纹を施す。底部に貼りつけられた三脚には指頭痕が残る。底部には煤が顕著に付着する。13は京都信楽系の、脚付き灯火具の裾部片と考えられる。外面に灰釉を薄く施釉する。14～16には、土師質土器、石製品を示した。14、15は焙烙である。14は胎土に金雲母を

第10表 溝跡一覧表 (第38、40図)

番号	グリッド	平面形	断面形	方位	長さ/m	幅/m	深さ/cm	重複遺構		
								溝跡より古	溝跡より新	不明
1	D・E-5～7 E-8 F-5	L字型	V字型	N-34°-E N-51°-W	43.4	1.4～3.0	57～126			SD3 SK49
2	F-8 G・H-7・8	直線	逆台形	N-35°-E	23.4	1.2～1.8	35～57			SK25 SK26
3	D-6 E・F-5・6	直線	逆台形	N-35°-E	23.4	0.6～1.3	15～42			SD1
4	D-5・6 E-5	直線	逆台形 皿状	N-32°-E	10.4	0.3～0.6	10～15	土器集中		
5	F・G-8 H-7・8	直線	逆台形	N-35°-E	19.4	0.3～1.0	14～29		SK37	SK96 G-8 P2



第38図 第1、3、4号溝跡

多量に含むことから、常陸産と考えられる。耳の痕跡がわずかに遺存し、底部は平底を呈する。15は口縁部に補修孔が認められる。底部は丸底を呈するものと考えられる。外面には煤が顕著に付着する。

16は、凝灰岩製の砥石である。砥面は被熱により黒色化し、大部分が剥落している。詳細は不明だが、表面に刃物痕らしき溝が一条みられる。

第2号溝跡 (第39、40図)

F-8、G・H-7・8グリッドに位置する。第25、26号土層と重複するが、新旧関係は不明である。北側の端部は調査区外に位置する。南西側の端部は、農業用水の配水管によって壊されている。並走する2条のa、b溝からなり、1回の再掘削が認められる。a溝をb溝が壊している。

規模は、長さ23.4m、幅1.2~1.8m、深さ35~57cm、方位N-35°-Eである。断面形態は、逆台形を呈する。

出土遺物は、第40図に示した。17は17世紀後半の肥前系磁器碗である。外面に染付が施される。18は19世紀後葉の磁器碗である。外面に酸化コバルトによる手描きの染付が施される。

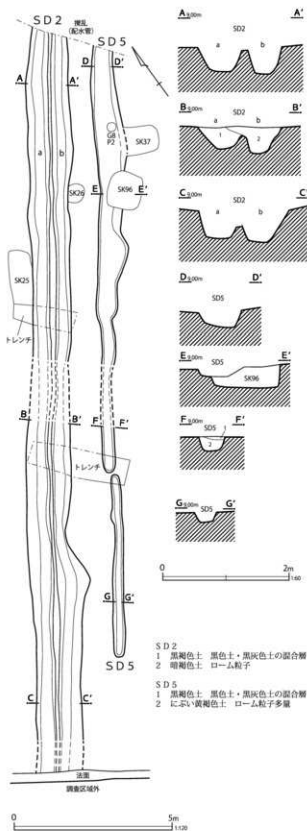
19は軽石製の石製品である。扁平で裏面が滑らかに摩耗していることから、砥石と考えられる。

第3号溝跡 (第38図)

D-6、E・F-5・6グリッドに位置する。第1号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。重複部分においてわずかに北側へ方向転換し、直後に途切れる。複雑に重複するa、b、c溝からなり、2回の再掘削が認められる。b溝を、a、c溝が壊しており、a、c溝間の新旧関係は不明である。規模は、長さ23.4m、幅0.6~1.3m、深さ15~42cm、方位N-35°-Eである。断面形態は、逆台形を呈する。

第4号溝跡 (第38図)

D-5・6、E-5グリッドに位置する。他の遺構との重複は認められないが、溝跡の西側に接



第39図 第2、5号溝跡

して土器集中が位置する。

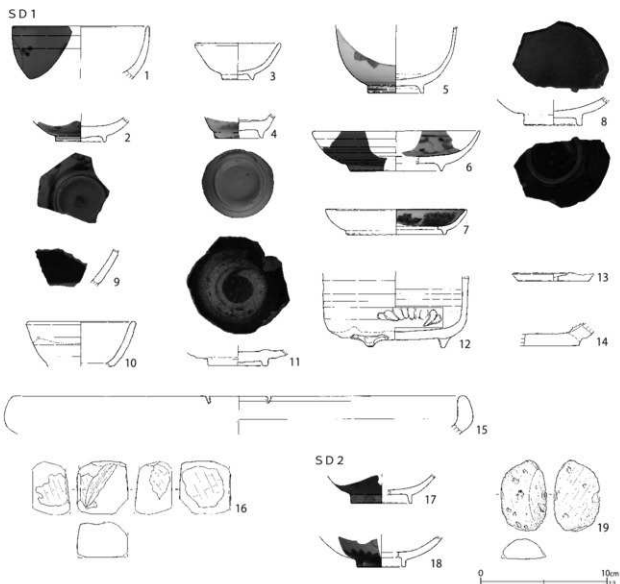
規模は、長さ10.4m、幅0.3～0.6m、深さ10～15cm、方位N-32°-Eである。

第4号溝跡は、他の4条の溝と比較して、長さ、深さともに規模が非常に小さい。断面形態は、皿状を呈する。

小破片のため図化することはできなかったが、18世紀初頭の所産である瀬戸美濃系陶器碗、18世紀代の所産である瀬戸美濃系陶器鉢鉢、時期不明のかわらけなどが出土している。

第5号溝跡（第39図）

F・G-8、H-7・8グリッドに位置する。第37号土坑と重複し、これに壊されている。また、第96号土坑、G-8グリッドP2と重複するが、新旧関係は不明である。南西側の端部は、調査区外に位置する。北東側の端部は、農業用水の配水管によって壊されている。H-8グリッドにおいて途切れる。規模は、長さ19.4m、幅0.3～1.0m、深さ14～29cm、方位N-35°-Eである。断面形態は、逆台形を呈する。



第40図 溝跡出土遺物

第11表 溝跡出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.8)	[4.2]	—		20	良好		SD1 肥前系 18C	24-1
2	磁器	碗	—	[2.0]	3.8		20	良好		SD1 肥前系 18C前～中葉	24-1
3	磁器	小坏	(6.8)	2.9	(2.4)		50	良好		SD1 肥前系	23-4
4	磁器	小坏	—	[1.7]	3.8		25	良好		SD1 肥前系 18C前半	24-1
5	磁器	鉢	—	[5.3]	(4.4)		40	良好		SD1 肥前系 内面蛇の目軸刺ぎ 外面こんにやく印判 18C前	23-5
6	磁器	皿	(10.0)	3.2	(3.9)		20	良好		SD1 肥前系 18C	24-1
7	磁器	皿	(11.2)	2.0	(7.8)		20	良好		SD1 酸化コバルト 型紙摺絵 19C後葉	24-1
8	陶器	碗	—	[1.7]	(4.8)	B G	30	良好		SD1 瀬戸美濃系 腰踏碗 内面鉄軸 外面鉄軸 18C後半	24-1
9	陶器	天目茶碗	—	[3.0]	—		5	普通		SD1 瀬戸美濃系 17C初頭	24-1
10	陶器	小坏	(8.4)	[3.6]	—	G	25	普通		SD1 瀬戸美濃系 内外面鉄軸 18C前～中葉	24-1
11	陶器	皿	—	[1.8]	4.7		25	普通		SD1 瀬戸美濃系 内外面鉄軸 輪刺ぎ皿	24-1
12	陶器	香炉	—	[5.8]	(8.8)	B	30	普通		SD1 瀬戸美濃系 内外面鉄軸 三脚貼り付け 18C中葉	23-6
13	陶器	灯火具か	(6.4)	[0.6]	(5.6)		25	普通		SD1 京都信楽系 外面鉄軸 19C中葉	24-1
14	土師質土器	焙烙	—	[1.2]	—	A F	5	良好	にぶい黄褐色	SD1 常陸産 金雲母を多量に含む 18Cか	24-1
15	土師質土器	焙烙	(35.4)	[3.0]	—	A B 1	20	良好	にぶい赤褐色	SD1 19Cか 外面煤	24-1
17	磁器	碗	—	[2.2]	(4.4)	G	25	良好		SD2 肥前系 17C後半	24-1
18	磁器	碗	—	[2.4]	(3.8)		20	良好		SD2 外面酸化コバルト 19C後葉	24-1
備考											
16	砥石	凝灰岩	長さ 4.2	幅 4.0	厚さ 3.0	重さ 65.0	SD1	被熱による剥落			25-2
	砥石か	軽石	[5.6]	[3.6]	1.6	13.8	SD2				25-3

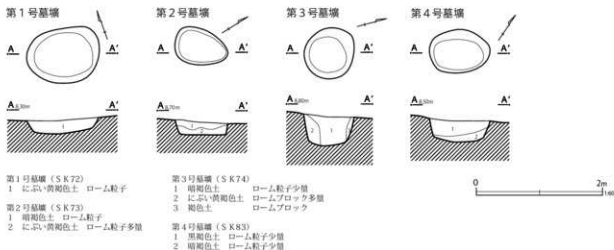
(2) 墓墳

第72～74、83号土墳は、出土遺物から近世の土墳墓と判断した。遺構の名称は土墳番号の順に、第1～4号墓墳に改めた。規模は第16、17表に示した。

墓墳の平面形態は、いずれもやや不整な楕円形、

ないしは円形である。墓墳としては深さが浅いことから、遺構の上位は削平されているものと考えられる。

出土遺物は、第42図に示した。すべての墓墳に、銭貨が六道銭として副葬されており、第1号墓墳から5枚、第2～4号墓墳から6枚、合計23枚が



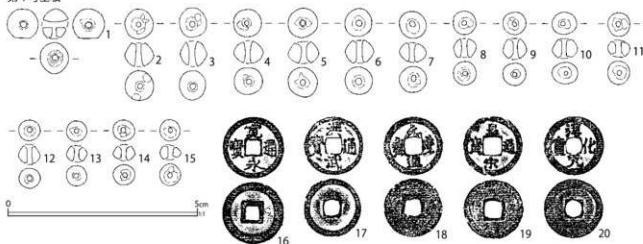
第41図 墓墳

出土している。また、第2、4号墓域では、21、34に示したとおり、6枚が接着した状態で出土し、34には孔に通した紐が遺存していた。他の銭貨も、まとまりをもって出土しており、埋葬に際して銭

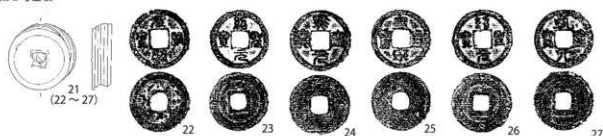
貨を有機質の紐や袋でまとめ、副葬した様子がかがわれる。

これらの接着した銭貨は、実測図と写真を撮影した後、1枚ずつに分離した。それぞれの遺存状

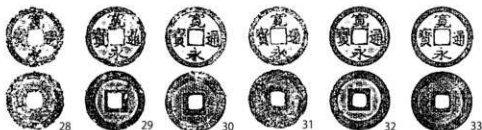
第1号墓域



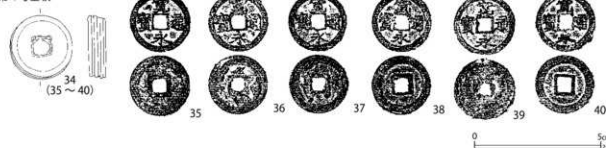
第2号墓域



第3号墓域



第4号墓域



第42図 墓域出土遺物

態は良好で、銭種を確認できた。銭貨の重なりは22と35を仮に上面とし、裏表のどちらの面が上の銭貨と接着していたか第13表中に示した。

銭種の内訳は、23枚のうち渡来銭10枚、寛永通

寶13枚でわずかに寛永通寶が多い。渡来銭のうち、第2号墓域より出土した27は、やや不鮮明ながら、初鑄年が758年の貞元重寶と考えられ、本墓域群中で最も古いものである。対して、第1号墓域よ

第12表 第1号墓域ガラス製品観察表(第42図)

番号	種別	製品名	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	孔径 (mm)	形状	備考	国版
1	ガラス製品	数珠球	7.5	7.5	8.5	0.62	1.0	球形	母珠	26-5
2	ガラス製品	数珠球	6.0	7.5	8.0	0.48	1.0	算盤形	成珠	26-5
3	ガラス製品	数珠球	6.5	7.0	8.0	0.49	1.0	算盤形	成珠	26-5
4	ガラス製品	数珠球	6.0	7.5	7.5	0.40	1.0	算盤形	成珠	26-5
5	ガラス製品	数珠球	6.0	8.0	8.0	0.44	1.0	算盤形	成珠	26-5
6	ガラス製品	数珠球	6.0	7.5	7.5	0.39	1.0	算盤形	成珠	26-5
7	ガラス製品	数珠球	5.5	7.0	7.0	0.33	1.0	算盤形	成珠	26-5
8	ガラス製品	数珠球	5.0	6.0	6.0	0.27	1.0	算盤形	成珠	26-5
9	ガラス製品	数珠球	5.5	6.0	6.0	0.26	1.0	算盤形	成珠	26-5
10	ガラス製品	数珠球	5.0	6.5	6.0	0.24	1.0	算盤形	成珠	26-5
11	ガラス製品	数珠球	4.0	6.0	6.0	0.17	1.0	算盤形	記子	26-5
12	ガラス製品	数珠球	4.5	6.0	5.5	0.18	1.0	算盤形	記子	26-5
13	ガラス製品	数珠球	4.0	5.5	5.5	0.15	1.0	算盤形	記子	26-5
14	ガラス製品	数珠球	4.0	6.0	5.5	0.17	1.0	算盤形	記子	26-5
15	ガラス製品	数珠球	4.0	5.5	6.0	0.13	1.0	算盤形	記子	26-5

第13表 銭貨観察表(第42図)

番号	種別	銭貨名	径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年	備考	国版
16	銭貨	寛永通寶	24.4	1.1	3.00	1636年	第1号墓域 古寛永	26-1
17	銭貨	洪武通寶	23.5	1.1	2.19	明 1368年	第1号墓域 真書	26-1
18	銭貨	元豊通寶	23.6	1.0	2.57	北宋 1078年	第1号墓域 行書	26-1
19	銭貨	皇宋通寶	24.3	1.1	2.42	北宋 1038年	第1号墓域 真書	26-1
20	銭貨	淳化元寶	24.1	1.0	3.05	北宋 990年	第1号墓域 行書	26-1
22	銭貨	元祐通寶	24.0	1.0	2.77	北宋 1078年	第2号墓域 篆書 22~27接着(表)	26-2
23	銭貨	紹聖元寶	23.7	1.2	3.23	北宋 1094年	第2号墓域 篆書 22~27接着(裏)	26-2
24	銭貨	熙寧元寶	24.4	0.9	3.66	北宋 1068年	第2号墓域 篆書 22~27接着(裏)	26-2
25	銭貨	皇宋通寶	23.6	0.8	2.85	北宋 1038年	第2号墓域 真書 22~27接着(裏)	26-2
26	銭貨	紹聖元寶	24.0	0.7	2.87	北宋 1094年	第2号墓域 篆書 22~27接着(裏)	26-2
27	銭貨	貞元重寶	23.6	0.9	2.42	唐 758年か	第2号墓域 貞元重寶か 真書 22~27接着(表)	26-2
28	銭貨	寛永通寶	23.9	1.1	2.33	1636年	第3号墓域 古寛永	26-3
29	銭貨	寛永通寶	24.5	1.0	2.50	1636年	第3号墓域 古寛永	26-3
30	銭貨	寛永通寶	25.0	1.4	3.61	1636年	第3号墓域 古寛永	26-3
31	銭貨	寛永通寶	24.5	1.0	2.84	1636年	第3号墓域 古寛永	26-3
32	銭貨	寛永通寶	24.9	0.9	3.01	1636年	第3号墓域 古寛永	26-3
33	銭貨	寛永通寶	25.2	1.0	2.88	1636年	第3号墓域 古寛永	26-3
35	銭貨	寛永通寶	24.8	1.1	3.22	1636年	第4号墓域 古寛永 35~40接着(表)	26-4
36	銭貨	寛永通寶	24.2	0.9	2.85	1636年	第4号墓域 古寛永 35~40接着(表)	26-4
37	銭貨	寛永通寶	24.3	1.0	3.00	1636年	第4号墓域 古寛永 35~40接着(裏)	26-4
38	銭貨	寛永通寶	23.8	1.4	3.70	1636年	第4号墓域 古寛永 35~40接着(表)	26-4
39	銭貨	寛永通寶	23.7	1.3	3.89	1636年	第4号墓域 古寛永 35~40接着(表)	26-4
40	銭貨	寛永通寶	24.8	1.4	2.75	1636年	第4号墓域 古寛永 35~40接着(表)	26-4

り出土した17の洪武通寶は、初鑄年が1368年と最も新しい。寛永通寶は、すべて1636～59年にかけて鑄造された古寛永である。銭貨の年代と遺構の造営年代は、必ずしも一致するものではないが、新寛永を含まないことから、少なくとも墓壇は17世紀代のものと想定される。

第1号墓壇 (第41、42図、第12、13表)

B-3・4グリッドに位置する。平面形態は不正楕円形、断面は逆台形を呈する。規模は、長径115cm、短径87cm、深さ20cmである。出土遺物は、ガラス製の数珠と銭貨である。

数珠球は、球の大きさから3つに分類できる。1は母珠で最も大きく、数珠の輪の両端と房をつなぐためのT字状の穿孔が認められる。2～10は成珠である。11～15は小型であり記子と考えられる。球の形態は、1を除いてすべて算盤形を呈する。本墓壇の銭貨は、古寛永1枚と渡来銭4枚から成る。銭貨の構成を考慮すると、墓壇は17世紀中葉頃に造られたものと考えられるが、この時期、ガラス製の数珠の出土例は少なく遺構の年代には若干の疑問が残る。

第2号墓壇 (第41、42図、第12、13表)

B-3グリッドに位置する。平面形態は不整楕円形で、断面は壁を垂直気味に掘り込んだ箱形を呈する。規模は、長径84cm、短径58cm、深さ23cmである。

遺物は、渡来銭が6枚出土しており、1038～1094年間に鑄造された北宋銭5枚と758年の唐代に初鑄された、乾元重寶と思われる銭貨1枚から成る。骨片や歯片が出土しているが風化が著しい。

第3号墓壇 (第41、42図、第12、13表)

B-3グリッドに位置する。平面形態は円形で、断面は壁面を垂直気味に掘り込んだ箱形を呈する。規模は、長径84cm、短径78cm、深さ47cmである。

覆土は典型的な土壌墓の堆積状況を示し、1層は遺体を納めた棺が分解された層、2、3層は棺の周りに入れられた埋戻し土と考えられる。

遺物は銭貨が6枚出土しており、すべて古寛永である。また、骨片と歯片が出土している。

第4号墓壇 (第41、42図、第12、13表)

B-3グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、断面は壁を垂直気味に掘り込んだ箱形を呈する。規模は、長径94cm、短径68cm、深さ33cmである。

遺物は古寛永が6枚出土したほか、歯片が出土している。

(3) 土壇

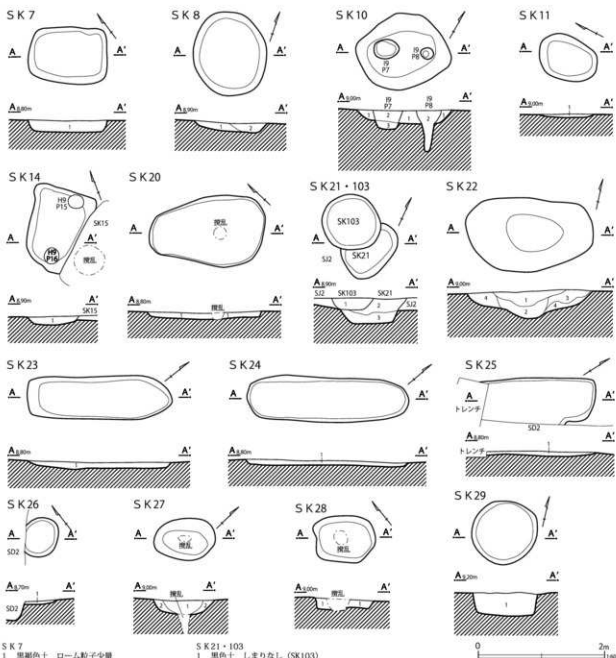
検出された土壇110基より、縄文、古墳時代の土壇、近世の墓壇を除くと79基となる。しかし、これらの土壇からは、遺構の時期を決定しうる遺物は出土しなかった。さらに、深さはごく浅いものが多く、遺構の用途についても不明な部分が多かった。そこで、土壇の長軸方向が、第1～5号溝跡の主軸方向と一致する41基の土壇については、溝とほぼ同時期に使用されたものと考え近世の土壇とした。第7、23、24、32、33、35、36、38、39、43～45、49、50、52、58、63、64、66、67、69～71、78、82、89、94、95、97、99、108、110、112～120号土壇がそれである。

それ以外の土壇は、時期の特定ができなかったが、便宜的に中近世の土壇として掲載した。

近世の土壇のうち、遺物が出土したものや、用途が想定できるものについては個別に記載した。それ以外の土壇、および時期不明の土壇については、一覧表(第15～17表)に示すのみとした。

第33号土壇 (第44、48図)

F-8グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径153cm、短径74cm、深さ15cmである。第48図2は、凝灰岩製の砥石である。刃物痕と思われる溝は、表面に一条、裏面と左側面にそれぞれ数条みられる。表裏面と両側面は摩耗しており、右側面は欠損後に再利用されている。



SK 7
1 黒褐色土 ローム粒子少量

SK 8
1 に近い黄褐色土 ローム粒子多量
2 暗褐色土

SK 10
1 暗褐色土 ローム粒子極多量 しまり強い
1-2 ガリッド ビット7・8
2 黒褐色土 ローム粒子多量
3 暗褐色土 ローム粒子極多量 しまり強い

SK 11
1 暗褐色土 ローム粒子多量 灰色粒子少量
しまりなし

SK 14
1 暗褐色土 ローム粒子極多量 黒褐色土少量
しまりあり

SK 20
1 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色土多量
緩くしまっている

SK 21・103
1 黒色土 しまりなし (SK103)
2 黒褐色土 ローム粒子 (SK21)
3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (SK21)

SK 22
1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック
($\phi 2 \sim 3$ cm) 少量
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック
($\phi 1 \sim 2$ cm) 少量
4 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック
($\phi 2 \sim 5$ cm) 少量

SK 23
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック ($\phi 2 \sim 3$ cm)・
暗褐色土多量 しまりあり 埋戻し

SK 24
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック ($\phi 2 \sim 3$ cm)・
暗褐色土多量 しまりあり 埋戻し

SK 25
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック ($\phi 2 \sim 3$ cm)・
暗褐色土多量 しまりあり 埋戻し

SK 26
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック ($\phi 1$ cm)
多量

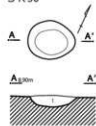
SK 27
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック ($\phi 3 \sim 5$ cm)
多量

SK 28
1 暗褐色土 ローム粒子極多量 黒褐色土少量

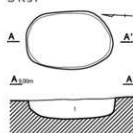
SK 29
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック
($\phi 1 \sim 3$ cm)・暗褐色土多量 埋戻し

第43図 土壌(1)

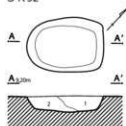
S K 30



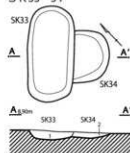
S K 31



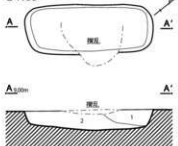
S K 32



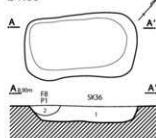
S K 33・34



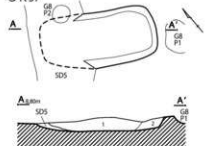
S K 35



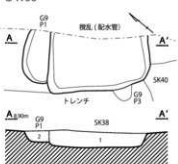
S K 36



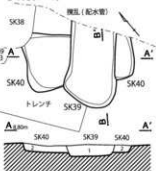
S K 37



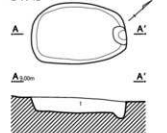
S K 38



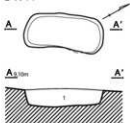
S K 39・40



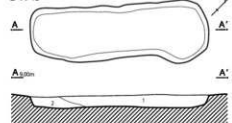
S K 43



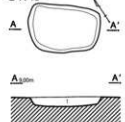
S K 44



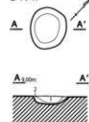
S K 45



S K 46



S K 47



S K 30
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土 極多量

S K 31
1 黒褐色土 ローム粒子・ローム ブロック (φ2~4cm) 多量 埋戻し上

S K 32
1 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色土 少量 しまりあり
2 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色土 多量 しまりあり

S K 33・34
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック (φ1cm)・暗褐色土多量 (S K 33)
2 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色土多量 (S K 34)

S K 35
1 黒色土 ローム粒子
2 暗褐色土 ローム粒子多量

S K 36
1 黒褐色土 ローム粒子少量
F-8 グリッド ビット1
2 にぶい・黄褐色土 ローム粒子多量

S K 37
1 暗褐色土 ローム粒子
2 にぶい・黄褐色土 ローム粒子塊状に含む

S K 38
1 黒褐色土 ローム粒子少量
G-9 グリッド ビット1
2 にぶい・黄褐色土 ローム粒子多量

S K 39・40
1 暗褐色土 ローム粒子多量 (S K 39)
2 黒褐色土 ローム粒子塊状に含む (S K 40)

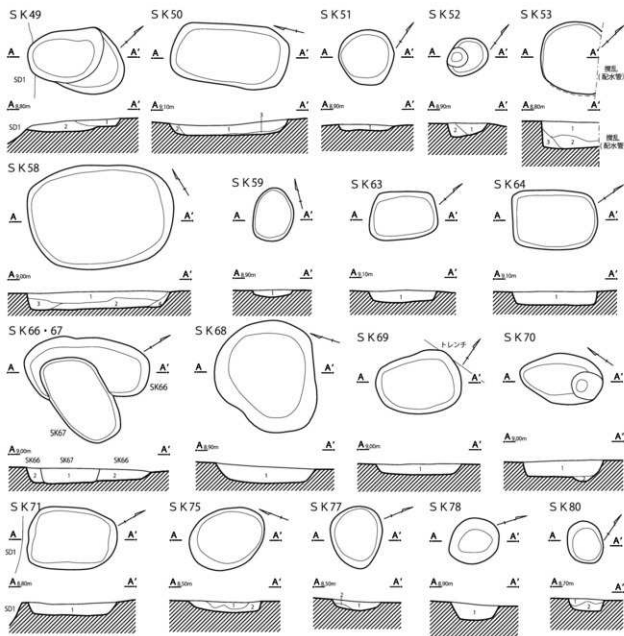
S K 43
1 黒褐色土 ローム粒子少量 しまりなし

S K 44
1 黒褐色土 ローム粒子

S K 45
1 暗褐色土 ローム粒子
2 にぶい・黄褐色土 ローム粒子多量

S K 46
1 黒褐色土 ローム粒子少量

S K 47
1 暗褐色土 ローム粒子
2 にぶい・黄褐色土 ローム粒子多量



S K 49
1 におい・黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
2 暗褐色土 ローム粒子

S K 50
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 におい・黄褐色土 ローム粒子多量
3 黄褐色土 ロームブロック

S K 51
1 暗褐色土 ローム粒子

S K 52
1 暗褐色土 ローム粒子
2 におい・黄褐色土 ローム粒子多量

S K 53
1 暗褐色土 ロームブロック
2 暗褐色土 ローム粒子多量
3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック

S K 58
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック
2 暗褐色土 ローム粒子
3 におい・黄褐色土 黒褐色土・ロームブロック多量
4 におい・黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

S K 59
1 におい・黄褐色土 ローム粒子多量

S K 63
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック

S K 64
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロックに含む

S K 65・67
1 暗褐色土 ローム粒子 (SK 67)
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (SK 66)

S K 68
1 におい・黄褐色土 ロームブロック多量

S K 69
1 暗褐色土 ローム粒子

S K 70
1 におい・黄褐色土 ローム粒子多量
2 暗褐色土 ロームブロック

S K 71
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

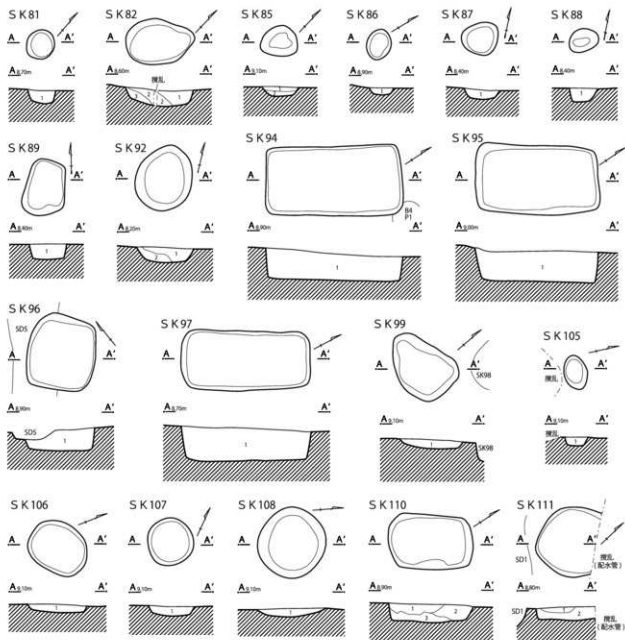
S K 75
1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 におい・黄褐色土 ローム粒子多量

S K 77
1 暗褐色土 ローム粒子
2 暗褐色土 ロームブロック多量

S K 78
1 におい・黄褐色土 ロームブロック多量

S K 80
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 におい・黄褐色土 ローム粒子多量

第45図 土壌 (3)



SK81
1 黒褐色土 ローム粒子少量

SK82
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子少量
3 暗褐色土 1層より稍深い
ローム粒子少量

SK85
1 暗褐色土
2 暗褐色土 ローム粒子少量

SK86
1 暗褐色土 ロームブロック

SK87
1 黒褐色土 ローム粒子少量

SK88
1 にぶい黄褐色土 ローム粒子多量

SK89
1 暗褐色土 ローム粒子多量

SK92
1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 にぶい黄褐色土 ローム粒子多量

SK94
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

SK95
1 暗褐色土 暗褐色土とロームブロックの互層 埋戻し

SK96
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (φ1~5cm)
黒褐色土粒子僅か 埋戻し

SK97
1 暗褐色土 ロームブロック (φ5mm程度) 多量

SK99
1 にぶい黄褐色土 ローム粒子

SK105
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土多量 しまり強い

SK106
1 暗褐色土 ローム粒子極多量 しまり強い

SK107
1 暗褐色土 ローム粒子極多量 しまり強い

SK108
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土多量 しまり強い

SK110
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土多量 しまり強い
2 黒褐色土 ローム粒子少量 暗褐色土多量 しまり強い
3 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色土多量 しまり強い

SK111
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土少量
2 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色土多量 しまり強い

第46図 土壌(4)

第94号土墳 (第46図)

B-4グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は、長径216cm、短径112cm、深さ46cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、断面形態は箱形を呈する。農作物の貯蔵施設の可能性がある。

第95号土墳 (第46図)

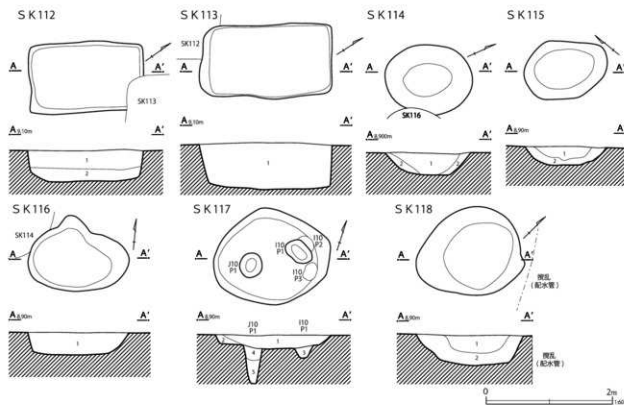
B・C-4グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は、長径195cm、短径110cm、深さ49cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、断面形態は箱形を呈する。農作物の貯蔵施設の可能性がある。

第97号土墳 (第46図)

B-4グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は、長径205cm、短径93cm、深さ53cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、断面形態は箱形を呈する。農作物の貯蔵施設の可能性がある。

第112号土墳 (第47図)

C-3グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径182cm、短径111cm、深さ50cmである。第113号土墳と重複するが新旧関係は不明である。断面形態は箱形を呈する。農作物の貯蔵施設の可能性がある。



- SK112
1 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子少量 しまりなし
2 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子・ロームブロック (φ3~5cm) 多量 しまりあり
- SK113
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (φ1~2cm) 多量 しまりなし
- SK114
1 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色粒子多量 しまりあり
2 暗褐色土 ローム粒子極多量 黒褐色粒子多量
- SK115
1 黒褐色土 ローム粒子・暗褐色粒子多量 しまりあり
2 暗褐色土 ローム粒子極多量 黒褐色粒子少量 しまりあり

- SK116
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (φ2~5cm)・黒褐色粒子多量 しまり強い
- SK117
1 暗褐色土 ロームブロック多量
2 にふい黄褐色土 ローム粒子多量
3 にふい黄褐色土 ローム粒子
4 にふい黄褐色土 ローム粒子
5 黒褐色土 ローム粒子少量
- SK118
1 黒褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (φ2~5cm)・暗褐色粒子多量
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (φ2~5cm)・黒褐色粒子多量

第47図 土墳(5)

第113号土壌 (第47図)

C-3グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は、長径208cm、短径118cm、深さ73cmである。第112号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、断面形態は箱形を呈する。農作物の貯蔵施設の可能性がある。

第116号土壌 (第47、48図)

G-9グリッドに位置する。平面形態は不整形である。規模は長径160cm、短径120cm、深さ37cmで、断面形態は逆台形を呈する。出土遺物は第48図に示した。1は延板状鉄製品である。両

端を欠損している。X線写真を撮影し確認したところ、刃がないため刃物ではないことが確認できた。用途は不明である。



第48図 土壌出土遺物

第14表 土壌出土遺物観察表(第48図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
1	延板状鉄製品	[4.3]	1.0	0.2	2.45	SK116		25-5
2		礫石	[2.0]	3.6	[2.7]	19.4	SK33	25-4

第15表 土壌一覧表(1)(第25、43図)

番号	時期	グリッド	平面形	長軸方位	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複遺構			備考
								土壌より古	土壌より新	不明	
1	縄文	H-1-9	隅丸長方形	N-32°-E	150	70	10	SK2			
2	縄文	H-1-9	隅丸方形	N-55°-W	95	84	12	SK1			
3	縄文	I-9	楕円形	N-27°-W	125	118	15			I-9 P9	
4	縄文	I-9	楕円形	N-41°-E	(82)	72	21	SK5			
5	縄文	I-9	楕円形	N-85°-W	243	128	50	SK4			
6	—										掘乱に変更
7	中近世	H-9	隅丸長方形	N-53°-W	125	90	18				
8	不明	H-9	楕円形	N-20°-W	133	115	15				
9	縄文	H-9	楕円形	N-30°-W	138	118	44				
10	不明	I-9-10	楕円形	N-37°-E	135	117	20		I-9 P7 I-9 P8		
11	不明	I-J-9	楕円形	N-17°-W	92	68	6				
12	縄文	I-9	楕円形	N-45°-E	65	62	37				
13	—										掘乱に変更
14	不明	H-9-10	楕円形	N-35°-E	132	78	13	SK15		H-9 P15 H-9 P16	
15	縄文	H-9-10	楕円形	N-46°-E	154	(123)	13	SK14			
16	縄文	H-8	楕円形	N-43°-E	138	93	13				
17	縄文	G-8	楕円形	N-54°-E	89	61	10				
18	縄文	H-8	楕円形	N-61°-E	103	85	64				
19	縄文	G-9	隅丸長方形	N-40°-W	92	63	9				
20	不明	G-8-9	楕円形	N-41°-W	180	113	11				
21	不明	J-10	楕円形	N-27°-E	93	62	38	SJ2	SK103		
22	不明	H-1-8	楕円形	N-78°-E	198	118	44				
23	中近世	G-8	隅丸長方形	N-38°-E	229	70	10				
24	中近世	G-8	隅丸長方形	N-39°-E	254	72	8				

第16表 土壌一覧表(2)(第25、26、35、43～45図)

番号	時期	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	重複遺構			備考
								土壌より古	土壌より新	不明	
25	不明	G-8	隅丸長方形	N-32°-E	(173)	(73)	7			SD2	
26	不明	G-8	楕円形	N-84°-E	67	57	5			SD2	
27	不明	G・H-7	楕円形	N-33°-E	95	67	22				
28	不明	G・H-7	楕円形	N-53°-W	93	74	17				
29	不明	G-7	円形	N	105	100	36				
30	不明	G-7・8	楕円形	N-66°-E	75	62	18				
31	不明	G-7	楕円形	N-5°-W	137	92	30				
32	中近世	G-6	楕円形	N-48°-E	122	86	26				
33	中近世	F-8	隅丸長方形	N-44°-E	153	74	15	SK34			
34	不明	F-8	楕円形	N-40°-E	80	(55)	9		SK33		
35	中近世	F-7	隅丸長方形	N-39°-E	202	78	32				
36	中近世	F-8	隅丸長方形	N-42°-E	180	102	25		F-8 P1		
37	不明	G-8	隅丸長方形	N-50°-W	187	89	21	SD 5			
38	中近世	G-9	隅丸長方形	N-46°-W	165	(94)	25	G-9 P1		SK40 G-9 P3	
39	中近世	G-9	楕円形	N-45°-E	(124)	81	7	SK 40			
40	不明	G-9	隅丸長方形	N-51°-W	172	89	11		SK39	SK38	
41	縄文	F-7	楕円形	N-51°-E	102	85	25				
42	縄文	F-7	楕円形	N-52°-E	87	72	18				
43	中近世	F-7	楕円形	N-42°-E	148	99	25				
44	中近世	F-7	隅丸長方形	N-32°-E	125	53	27				
45	中近世	F-7	隅丸長方形	N-44°-E	283	100	20				
46	不明	E-6・7	楕円形	N-48°-W	114	70	15				
47	不明	E-7	楕円形	N-46°-W	67	57	14				
48	縄文	E-7	楕円形	N-44°-W	108	106	12			E-7 P5	
49	中近世	E-7	不整形	N-55°-E	155	105	16			SD1	
50	中近世	E・F-6	隅丸長方形	N-77°-W	185	100	18				
51	不明	D-6・7	円形	N-14°-E	90	86	9				
52	中近世	D-7	楕円形	N-54°-E	67	55	21				
53	不明	D-6・7	楕円形	N-44°-W	112	(90)	43				
54	古墳	D-5	楕円形	N-52°-E	123	97	34				
55	古墳	D-5	円形	N	105	102	30				
56	古墳	D-5	円形	N	107	106	37				
57	古墳	D-6	円形	N	109	100	34				
58	中近世	E-6	楕円形	N-60°-W	230	163	28				
59	不明	B-6	楕円形	N-19°-E	84	63	10				
60	縄文	C-6	楕円形	N-31°-W	75	60	30				
61	縄文	C-5・6	円形	N	65	62	7				
62	縄文	D-5	不整形	N-4°-W	137	105	26				
63	中近世	D-5	隅丸長方形	N-30°-E	106	75	20				
64	中近世	D-5	隅丸長方形	N-34°-E	135	94	22				
65	縄文	C-5	隅丸長方形	N-11°-W	207	107	15				
66	中近世	C・D-5	隅丸長方形	N-31°-E	185	85	23		SK67		
67	中近世	C・D-5	楕円形	N-90°-E	150	85	23	SK66			
68	不明	C-6	楕円形	N-56°-E	180	163	25				
69	中近世	C-5	楕円形	N-44°-E	134	99	17				
70	中近世	B-5	楕円形	N-22°-W	132	82	33				
71	中近世	D-6	楕円形	N-36°-E	142	97	19				
72	近世	B-3・4	不整形円形	N-76°-W	115	87	20				第1号墓域に変更

第17表 土壇一覧表(3) (第26、35、43、45～47図)

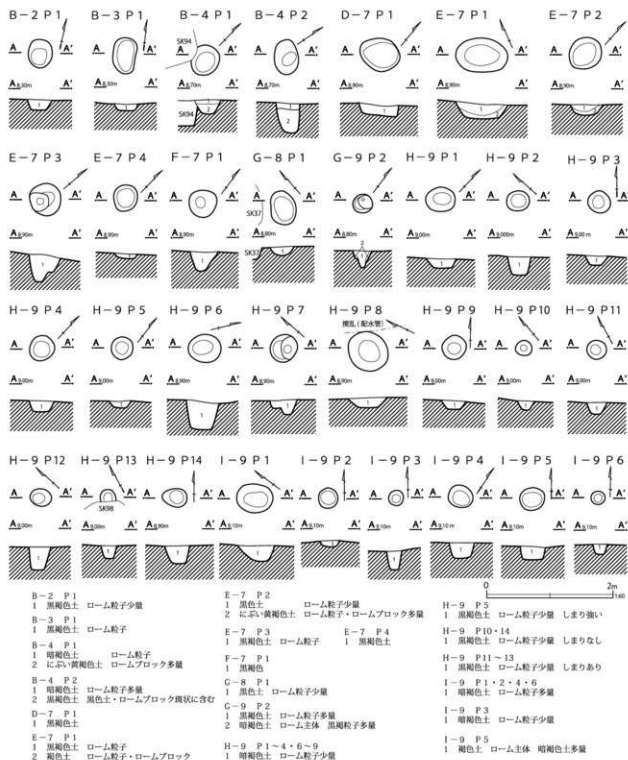
番号	時期	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	重複遺構			備考
								土壇より古	土壇より新	不明	
73	近世	B-3	不整形円形	N-49° - E	84	58	23				第2号墓端に変更
74	近世	B-3	円形	N	84	78	47				第3号墓端に変更
75	不明	B-4	楕円形	N-47° - W	125	92	17				
76	—										B-4 P1に変更
77	不明	B-4	楕円形	N-61° - W	97	82	12				
78	中近世	B-4	楕円形	N-27° - W	80	70	26				
79	—										B-4 P2に変更
80	不明	B-3・4	楕円形	N-44° - W	67	53	19				
81	不明	B-3・4	円形	N	48	44	18				
82	中近世	B-3	楕円形	N-47° - E	107	72	25				
83	近世	B-3	楕円形	N-58° - E	94	68	33				第4号墓端に変更
84	古墳	D-4	円形	N	37	36	40				
85	不明	B-3	楕円形	N-44° - E	57	47	16				
86	不明	B-3	楕円形	N-46° - W	48	39	11				
87	不明	B-3	楕円形	N-80° - E	56	52	13				
88	不明	B-3	楕円形	N-53° - E	47	37	23				
89	中近世	B-3	楕円形	N-16° - E	88	67	26				
90	—										B-3 P1に変更
91	—										B-2 P1に変更
92	不明	A・B-2	楕円形	N-12° - W	103	88	24				
93	縄文	A-5	円形	N	54	51	10				
94	中近世	B-4	隅丸長方形	N-33° - E	216	112	46		B4 P1		
95	中近世	B・C-4	隅丸長方形	N-33° - E	195	110	49				
96	不明	G-8	隅丸長方形	N-50° - E	116	109	34			SD5	
97	中近世	B-4	隅丸長方形	N-27° - E	205	93	53				
98	縄文	H-1・8・9	円形	N	90	89	35			H-9 P13	貝
99	中近世	I-8	不整形	N-85° - E	115	87	14				
100	縄文	J-10	楕円形	N-83° - W	125	103	53	SJ2 SJ5			
101	縄文	J-10	楕円形	N-56° - E	140	107	27		SJ3 SJ5		
102	古墳	D-5	円形	N	106	103	52				
103	不明	J-10	円形	N	94	90	18	SJ2 SK21			
104	縄文	J-10	円形	N-62° - E	56	54	77	SJ2			
105	不明	I-8	楕円形	N-85° - W	54	37	14				
106	不明	I-9	楕円形	N-56° - E	96	78	12				
107	不明	H-8	円形	N	74	73	15				
108	中近世	H-8	円形	N	112	108	14				
109	縄文	I・J-10	楕円形	N-34° - W	130	99	10		SJ3		
110	中近世	D-6	隅丸長方形	N-33° - E	135	87	27				
111	不明	E-7	楕円形	N-45° - W	(95)	110	22				
112	中近世	C-3	隅丸長方形	N-35° - E	182	111	50				SK113
113	中近世	C-3	隅丸長方形	N-32° - E	208	118	73				SK112
114	中近世	G-9	楕円形	N-24° - E	135	110	35				SK116
115	中近世	G-9	楕円形	N-41° - W	128	93	33				
116	中近世	G-9	不整形	N-83° - E	160	120	37				SK114
117	中近世	I・J-10	楕円形	N-72° - E	183	152	21	I-10 P1 J-10 P1			I-10 P2 I-10 P3
118	中近世	I-10 J-10-11	楕円形	N-45° - E	168	139	47				
119	中近世	I-10	不明	不明	(73)	(30)	23	SJ3	SK120		SKaから変更
120	中近世	I-10	不明	不明	(29)	(19)	21	SJ3 K119			SKbから変更

(4) ビット (第49図、第18表)

本調査では、46基のビットが検出された。調査区全体に分布している。第49図には単独で検出さ

れたものを示した。

ビットに伴う遺物が認められなかったため、これらの時期を判定することはできなかった。



第49図 ビット

第18表 ビット一覧表(第49図)

グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考	グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
B-2	1	44	37	16	SK91から変更	H-9	7	42	42	23	
B-3	1	58	36	10	SK90から変更		8	65	60	15	
B-4	1	47	46	23	SK76から変更 SK94と重複		9	38	38	13	
	2	55	38	46	SK79から変更		10	25	24	13	
D-7	1	65	51	18			11	32	30	17	
E-7	1	82	53	24			12	33	27	35	
	2	54	50	18			13	(18)	25	19	SK98と重複
	3	50	48	45			14	39	30	28	
	4	41	37	7			15	25	22	25	新規 SK14と重複
	5	33	26	21	新規 SK48と重複		16	25	24	26	※
F-7	1	45	43	30		I-9	1	58	45	25	
F-8	1	50	—	16	新規 断面のみ現れる SK36より新		2	32	30	10	
G-8	1	53	38	13			3	24	24	28	
	2	29	27	39	新規 SD 5 と重複		4	39	36	25	
G-9	1	(80)	(42)	19	SK38より古		5	38	36	21	
	2	32	30	26			6	22	21	16	
	3	(20)	33	26	新規 SK38と重複		7	49	31	28	新規 SK10より新
H-9	1	47	39	15			8	22	18	64	※
	2	35	32	28			9	26	23	30	新規 SK 3 と重複
	3	35	33	14		I-10	1	42	32	35	新規 SK117より古
	4	39	39	17			2	27	(7)	26	新規 SK117と重複
	5	36	35	11			3	28	20	30	※
	6	52	45	45		J-10	1	38	36	77	新規 SK117より古

4. グリッド出土遺物

(1) グリッド出土土器 (第50図～54図)

グリッドからは、縄文時代前期中葉から後期までの多岐にわたる土器群が出土した。ここでは、出土土器を以下の分類に従いその概要を記載する。

第Ⅰ群土器 (第50図1～29)

縄文時代前期中葉の黒浜式土器を本群とした。特徴によって以下に分類される。

第1類 (1～9)

いわゆる米字文の土器を本類とした。1、2は波状口縁である。口唇直下をめぐり、半截竹管による竹管文下に施文された縄文地上に、斜行する竹管文が施文される。地文には附加条縄文が多用され羽状施文される土器が多いようである。竹管文は二条1組となり、竹管文間が磨り消されないものと7のように磨り消しが施されるものとがある。

いずれも繊維を含むが丁寧な整形である。

第2類 (10～12)

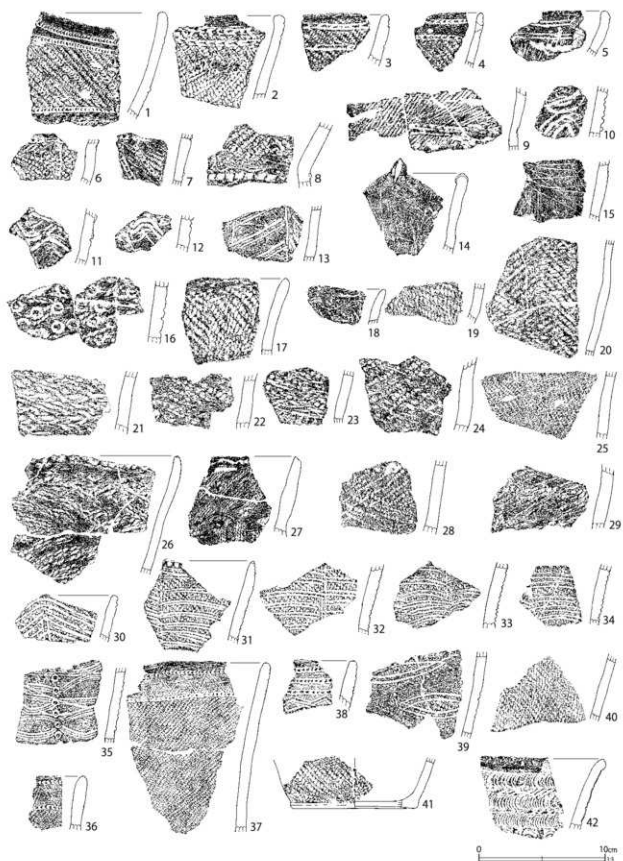
平行沈線で小波状文ないしはコンパス文が施文される土器を本類とした。10、11は上下対に施文され、菱形状となっている。いずれも繊維を含む。

第3類 (13)

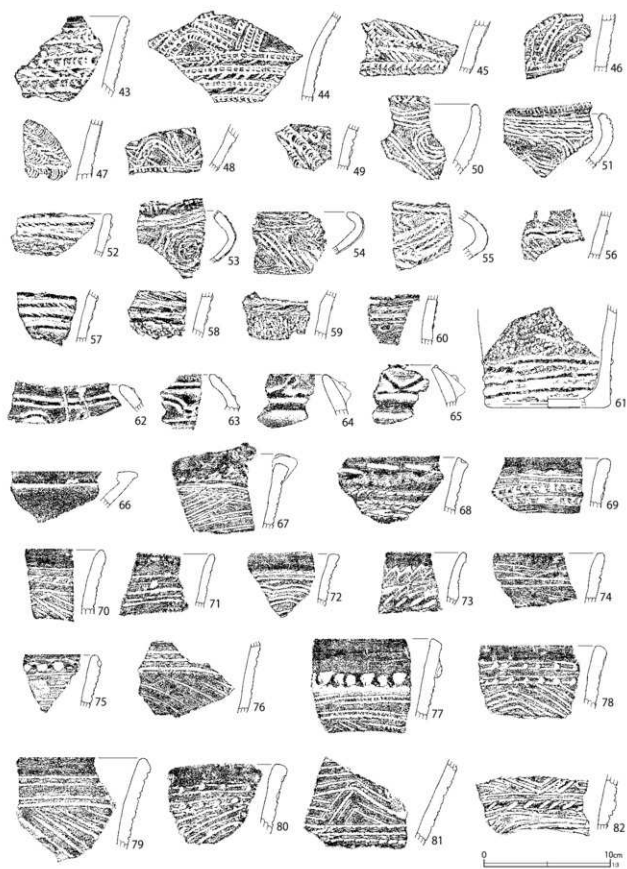
肋骨文が施文される土器を本類とした。この時期に比定される肋骨文は1点のみである。垂下する沈線に接して、直線的な斜行沈線が施文され、肋骨文を描いている。

第4類 (14、15)

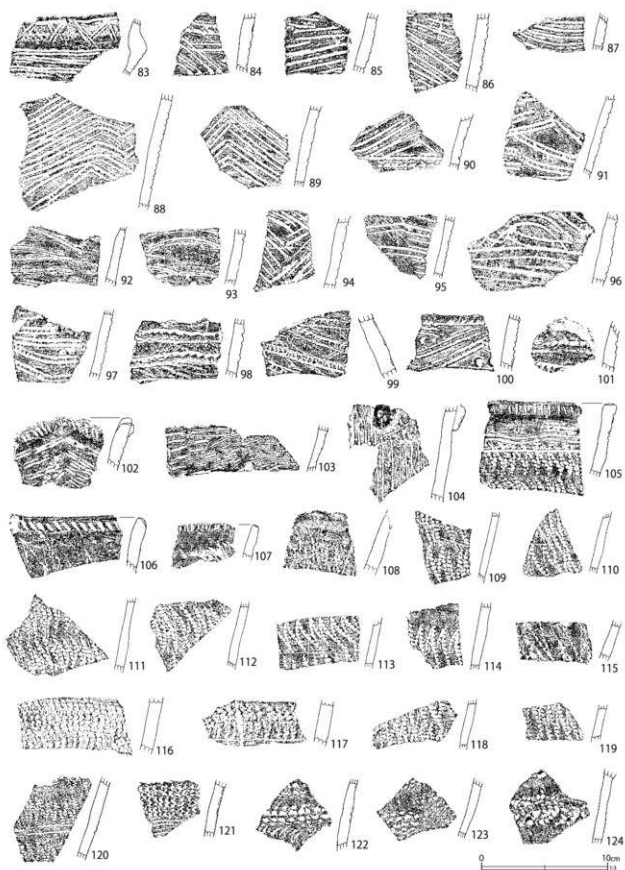
格子目文の土器を本類とした。14は波状口縁で波頂部に小突起を持ち、口唇上に刻目が施されている。器面には細い沈線により格子目文が描かれているが、整った形態ではない。いずれも繊維を含む。



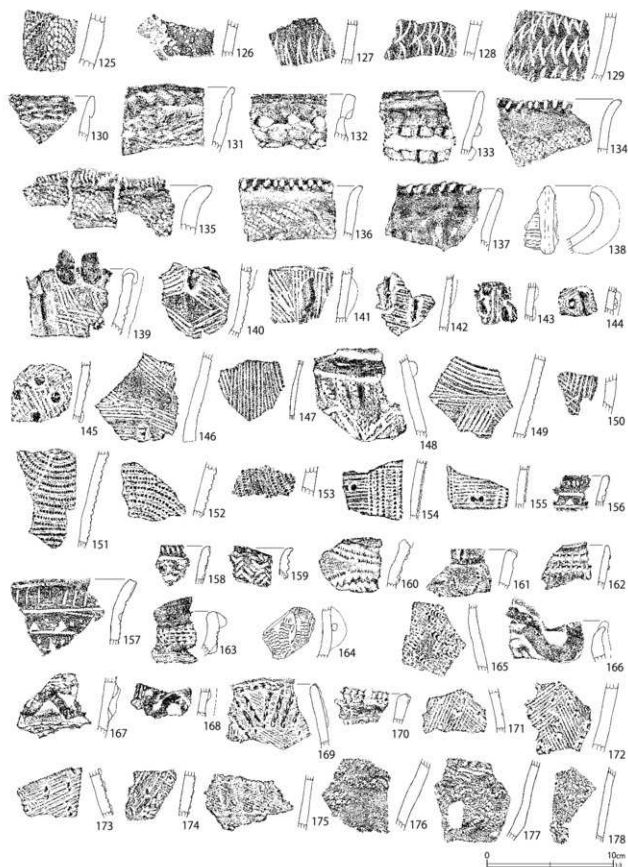
第50図 グリッド出土遺物(1)



第51図 グリッド出土遺物(2)



第52図 グリッド出土遺物(3)



第53図 グリッド出土遺物(4)

第5類 (16)

円形刺突が施された土器を本類とした。1点のみの出土である。地文には縄文が粗く施文されている。

第6類 (17~29)

地文のみの土器を一括して本類とした。17~20は単節縄文による施文で、20は施文原体を変えて羽状縄文を施文している。21~24は無節縄文である。25~29は附加条縄文による施文で、26は口唇上に棒状工具による押圧が施され、器面には原体を変えた羽状縄文が施文されている。

第Ⅱ群土器 (第50図30~41)

諸磯a式土器を本群とした。施文の特徴により、以下に分類される。

第1類 (30~35)

肋骨文の土器を本類とした。30~34のように、縄文地文上に半截竹管で、垂下する沈線間に孤状の沈線を施文することによりモチーフを描いたも

のと、35のように地文がなく円形刺突を境に、間隔の狭い上下対向する弧線を描いたものがある。35には横走する沈線が認められることから、口縁部が横位多段に区画されていると考えられる。

第2類 (36~38)

口唇直下に鋸歯文が施文される土器を本類とした。文様間には地文がなく、文様下に地文が施文されている。

第3類 (39)

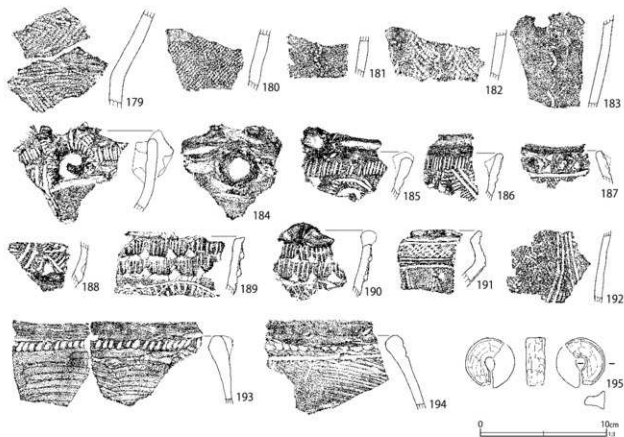
木葉状の文様が描かれた土器を本類とした。粗い縄文を地文とし、半截竹管により上下対向する弧線で木葉文を描いている。第1、2類に比べ、新しい様相を持つ。

第4類 (40、41)

縄文施文の破片や底部を本類とした。

第Ⅲ群土器 (第50~51図42~49)

諸磯b式古段階の土器を本群とした。文様の特徴によって以下のように分類される。



第54図 グリッド出土遺物(5)

第1類 (42、47)

何れも比較的幅広い半截竹管により密な爪形文が施文される土器で、爪形文間には斜位の刻目が施されることにより、浮線状の効果を表している。42の口唇直下の3条の爪形文下には、垂下する爪形文が描かれている。47は斜行する爪形文が施文されていることから、波状口縁の可能性もある。

第2類 (43～46、48、49)

第1類よりも幅の狭い半截竹管による爪形文でモチーフが描かれた土器である。爪形文間には斜行する刻目が施されていることは第1類と共通する。49には文様空白部に円形刺突が施されている。

第IV群土器 (第51図50～66)

諸磯b2式土器を本群とした。施文や器形の差異によって以下のように分類される。

第1類 (50、51)

沈線により文様が描かれる土器を本類とした。いずれもキャリバー形の口縁部で、半截竹管により端部が渦巻き状のモチーフが描かれる土器であろう。いずれも口唇上に刻目が施されている。

第2類 (52～61)

浮線により区画線や文様が描かれる土器を本類とした。モチーフ構成は第1類に共通し、二条を1単位とした浮線である。浮線上には向きを変えた刻目が矢羽根状に施されている。61は底部破片である。いずれも縄文を地文としている。

第3類 (62～66)

浅鉢形土器を本類とした。62～65は口唇が内湾し、口唇上には浮線による鋸歯状のモチーフが貼付されている。66は直線的に開く浅鉢で、口唇部が内屈している。

第V群土器 (第51図67～82、第52、53図83～137)

浮島式土器を本群とした。文様によって以下に分類される。

第1類 (67～101)

半截竹管による平行沈線文が施文された土器を本類とした。67～69、78、80、81のように、器面

を水平にめぐる横帯区画には爪形文が施され、区画間には平行沈線文が施文されるものと、98～101のように、文様も爪形文で描かれるものがある。文様は鋸歯状となるものが多いようである。73はヘラ状工具により貝殻腹縁状に施文されている。83には鋸歯文が施文されている。口唇上には68のように、棒状工具による押圧が施されるものがある。また、口唇直下には、75、77のように押圧が施されるものも認められる。

第2類 (102、103)

半截竹管により短い沈線が連続的に施文された土器を本類とした。102は波状口縁で、口唇上には刻目が施されている。

第3類 (104)

貼付文を持ち、縦の沈線が施された土器を本類とした。本例のみである。

第4類 (105～129)

貝殻腹縁が施文された土器を本類とした。この中には、105、106、108～126のように、ハイガイ等により施文されたものと、107、127～129のように、ハマグリ類により施文されたもの、122のように両者とがある。前者には、105、117、120のように、横位の沈線で器面が横帯区画される土器もある。興津式にも貝殻腹縁文の土器があるが、区分しがたい。

第5類 (130～133)

折り返し口縁もしくは口唇が肥厚する粗製の土器を本類とした。132、133は棒状工具による押圧が施されている。

第6類 (134～136)

縄文施文の土器を本類とした。134、135は口唇が強く外反し、時期的に下降する可能性がある。

第7類 (137)

無文粗製土器を本類とした。口唇上に刻目が施されている。

第VI群土器 (第53図138～155)

諸磯c式土器を本群とした。以下に分類される。

第1類 (146、147、149、150)

貼付文が見られないか極めて少ないと思われる土器を本類とした。第2類よりも古い可能性が推定される。

第2類 (138~145)

口縁部や胴部に突起が貼付された土器を本類とした。胴部には縦を基調とした文様が描かれている。

第3類 (151~155)

結節浮線による文様が描かれた土器を本類とした。151~153のように、渦巻き状の結節浮線の土器と、154~155のように垂下する結節浮線の土器があり、後者は前者の胴部に相当する可能性がある。

第4類 (148)

148は、貝殻腹縁文上に平行沈線で鋸歯文が描かれており、菱形モチーフを構成する可能性がある。興津式であろう。

第Ⅶ群土器 (第53、54図156~183)

広義の十三菩提式土器を本群とした。施文の特徴から以下のように分類される。

第1類 (156~158)

幅狭い横帯区画が重畳し、区画内に印刻が施される土器を本類とした。

第2類 (159)

単沈線で鋸歯状のモチーフが描かれる土器を本類とした。

第3類 (160~162)

結節浮線で文様が描かれる土器を本類とした。

第4類 (163~165)

結節沈線により文様が描かれる土器を本類とした。164は橋状突起である。

第5類 (166~168)

扁平な隆帯により、横S字状や鋸歯状の粘土紐が貼付された土器を本類とした。

第6類 (169~174)

口唇下に、短い結節浮線文が貼付された土器を本類とした。169には「ハ」の字状に結節浮線が貼付されている。地には簡歯状工具による条線が

施されている。

第7類 (175~183)

縄文施文の土器を本類とした。175~180の横位施文と、181~183の縦位施文があり、前者には177、179のように、原体を異にした羽状施文の土器がある。また、結節施文される点も特徴的である。

第Ⅷ群土器 (第54図184~192)

縄文中期初頭の土器を本群とした。文様の特徴によって以下に分類される。

第1類 (184~186、188)

五領ヶ台式土器のうち、口唇内面が肥厚する土器を本類とした。いずれも口唇部に短沈線が施され、平行沈線による文様間にも短沈線が充填され、印刻が施されている。184~186は同一個体の可能性がある。

第2類 (189、190)

第1類に近似するが、口唇が折り返し状となり、印刻が施される土器を本類とした。

第3類 (187)

口唇に小突起を持ち、体部には縄文地上に印刻が施される土器である。第1、2類に比べ、やや新しい様相を示すと思われる。

第4類 (191)

集合沈線文系の土器を本類とした。屈曲した幅の狭い口縁部に、格子目状に沈線文が施文されている。胴部は木目状然る地文上に平行沈線が垂下している。

第5類 (192)

縦位の結節を有する地文上に、Y字状の沈線文が描かれた土器である。五領ヶ台式でも新しい様相を示している。

第Ⅸ群土器 (第54図193、194)

安行式組線文系土器を本群とした。いずれも内傾する深鉢で、口唇が肥厚する。口唇上には、棒状工具による押圧が施されている。

(2) **グリッド出土土製品** (第54図、第19表)

195は土製の玦状耳飾りである。円形板状のつ

くりで、中央部の孔に向かってスリットが入る。
推定径3.8cm、幅1.6cmである。

(3) グリッド出土石器 (第55、56図、第19表) 石鏃 (第55図1～7)

5は黒曜石製、その他はチャート製である。

1、2は、無茎で基部が平坦である。剥片の縁辺に加工している。2は左右が非対称であることから、未製品と考えられる。

3～6は、無茎で基部に深い抉りが入る。4、5は、両面を丁寧に加工している。先端部が折れ、欠損面に副次的な剥離を伴うことから、衝撃剥離痕の可能性がある。6は縦長剥片の縁辺を加工し、両側縁が直線的で長さがある。

7は、両面を粗く加工している。平面形が整っておらず、厚みがあることから、未製品と考えられる。

楔形石器 (第55図8、9)

チャート製である。両極剥離痕が、8では上下縁と両側縁の二方向に、9では上下縁にみられる。

石核 (第55図10)

チャート製である。平坦な分割面を打面とし、打点を周囲に移動しながら、横長の剥片を剥離している。

磨製石斧 (第56図11)

緑色岩製と考えられる。明確な側面を持たないが、平面形が長方形、横断面形が扁平な隅丸長方形の定角式磨製石斧と考えられる。刃部は使用に伴って加工と研磨が繰り返されている。基部側は、欠損後の敲打により潰れている。

打製石斧 (第56図12)

頁岩製である。分割礫もしくは大型剥片を素材とする。刃部を中心に片面に加工している。鏡状である。

礫器 (第56図13～16)

13は頁岩製、14は、黒色頁岩製である。分割礫もしくは大型剥片を素材とし、下端部と左側縁に加工している。

15、16は、砂岩製である。礫もしくは分割礫を素材とする。16では下端部に表面および両側面から加工している。15では両端に加工している。両端の縁辺が敲打で潰れていることから敲石の可能性もある。

砥石 (第56図17)

凝灰岩製である。被熱による表面の剥落が著しいため、詳細はわからない。砥面が部分的に残っており、表裏面にわずかに櫛歯タガネ痕らしき痕跡がみられる。

磨石 (第56図18～23)

22は砂岩製、その他は安山岩製である。

20、21、23は、円礫もしくは楕円礫の周縁部を敲打で整形している。いずれも平坦部が滑らかに摩耗している。21の表面に敲打による浅い凹みがみられる。

18は円礫、19、22は、楕円礫をそのまま使用している。いずれも平坦部が摩耗している。18の裏面に敲打による浅い凹みがみられる。

石皿 (第56図24、25)

安山岩製である。24は周縁部を敲打で整形している。皿部に敲打による浅い凹みがいくつかみられる。25は皿部に漏斗状の凹穴がいくつかみられる。

敲石 (第56図26)

安山岩製である。上端部の一部が敲打で潰れている。

凹石 (第56図27)

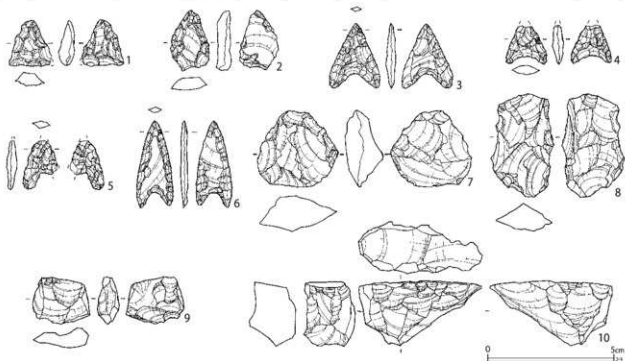
安山岩製である。周縁部を敲打と研磨で整形している。表裏面に敲打による凹みが多数みられる。

(4) グリッド出土陶磁器 (第57図、第20表)

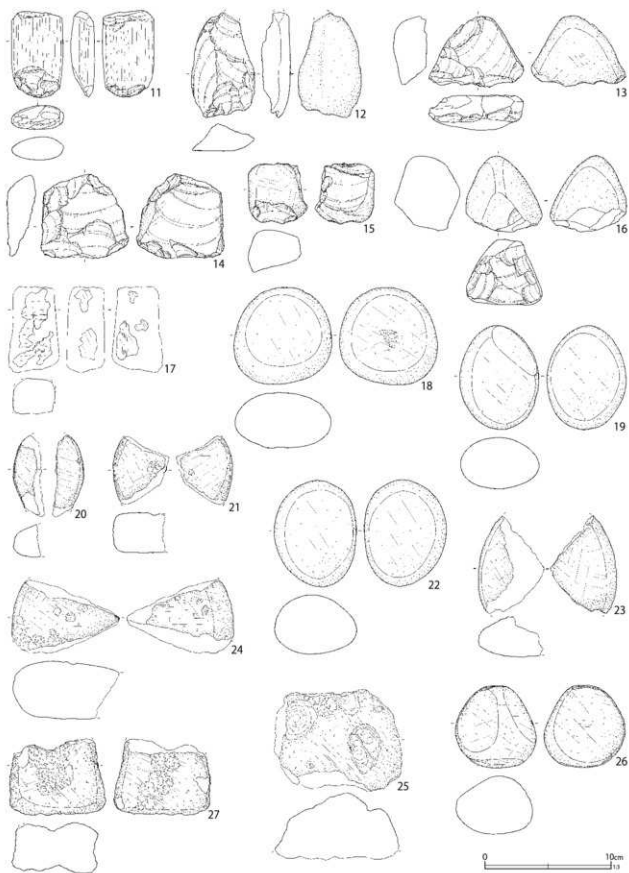
第57図1～9には磁器を示した。1～4、6は肥前系の碗である。4は底部片で高台部が欠損する。高台内に崩れた裏銘を染め付ける。5は瀬戸美濃系の小坏である。7は肥前系の段重で、外面に蛸唐草模様を染め付ける。8、9は朝徳利である。酸化コバルトによる型紙摺りを施すもので、19世紀後半の所産である。同一個体の可能性がある。

第19表 グリッド出土遺物観察表(1)(第54～56図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
195	土製珠状耳飾り	径:3.8cm 幅:1.6cm 高さ:3.7cm 重さ:10.81g 胎土:BDEFI 焼成:良好 残存:60% 色調:ぶい黄褐 試掘						12-15
1	石鏃	チャート	1.8	[1.7]	0.6	1.7	S K10	21-11
2	石鏃	チャート	2.4	1.5	0.6	2.2	G-7 未製品	21-12
3	石鏃	チャート	2.5	2.0	0.4	1.4	S J 4	21-13
4	石鏃	チャート	[1.5]	1.6	0.5	0.9	J-10	21-14
5	石鏃	黒曜石	[1.9]	1.3	0.4	0.7	D-5	21-15
6	石鏃	チャート	3.4	1.4	0.3	1.3	B-2	21-16
7	石鏃	チャート	3.0	3.2	1.5	12.0	I-9 未製品	21-17
8	楔形石器	チャート	4.1	2.5	1.2	10.9	S D3	21-18
9	楔形石器	チャート	1.8	2.3	0.9	3.8	第1トレンチ	22-1
10	石核	チャート	2.6	4.9	2.0	19.8	D-7	22-2
11	磨製石斧	緑色岩	6.8	4.1	1.9	91.3	F-7	22-3
12	打製石斧	頁岩	[8.4]	5.0	2.3	91.5	E-2	22-4
13	礫器	頁岩	5.6	7.5	2.7	133.9	I-10	22-5
14	礫器	黒色頁岩	6.7	6.9	2.3	118.4	S K38	22-6
15	礫器	砂岩	4.8	4.7	3.4	94.0	F-8	22-7
16	礫器	砂岩	6.1	6.0	5.2	219.8	S J 4 №257	22-8
17	砥石	凝灰岩	[6.8]	[4.0]	[3.0]	106.6	F-5 被熱による剥落	22-9
18	磨石	安山岩	7.7	7.8	4.4	382.7	F-8	22-10
19	磨石	安山岩	8.2	6.3	4.1	290.5	B-5	22-11
20	磨石	安山岩	[6.5]	[2.5]	[2.7]	39.1	S K103	22-12
21	磨石	安山岩	[5.4]	[4.5]	3.2	99.0	I-10	22-13
22	磨石	砂岩	8.5	6.5	4.7	357.0	D-7	22-14
23	磨石	安山岩	[7.8]	[5.2]	[3.3]	100.4	G-6	22-15
24	石皿	安山岩	[5.8]	[8.5]	5.9	207.3	H-8	22-16
25	石皿	安山岩	[8.2]	[10.1]	[5.5]	381.0	B-2	23-1
26	敲石	安山岩	6.6	6.4	4.9	270.1	S D1	23-2
27	凹石	安山岩	[6.1]	7.6	4.0	164.7	B-7	23-3



第55図 グリッド出土石器(1)



第56図 グリッド出土石器(2)

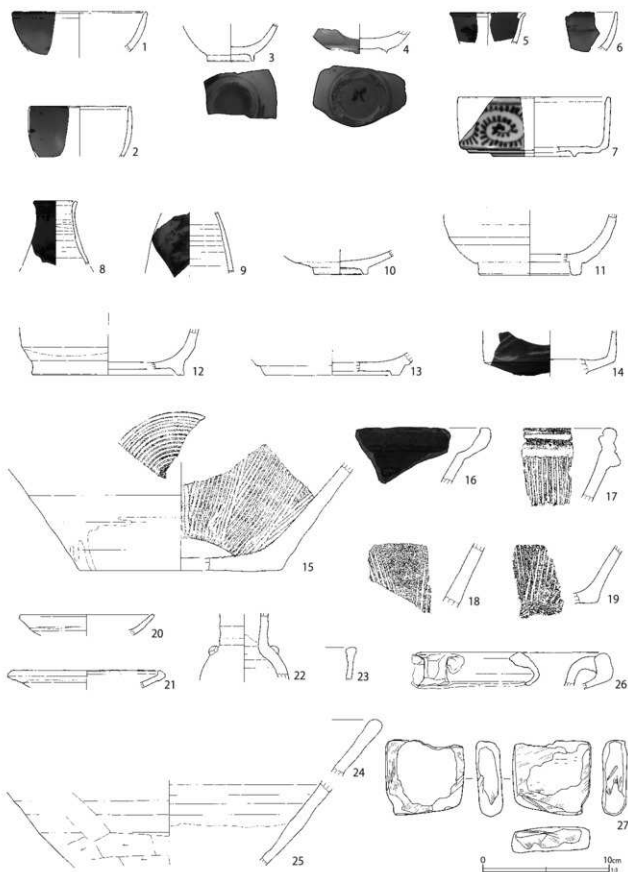
10～25には陶器を示した。10は瀬戸美濃系の平碗で、胎土は白色で非常に緻密である。11、13は瀬戸美濃系の鉢である。14は肥前系の鉢で、外面に波状の刷毛目模様を施す。12は瀬戸美濃系の半胴甕である。15～19は播鉢である。15は胎土が赤味を帯びており志戸呂産の可能性がある。16、18、19は瀬戸美濃系、17は堺明石系の所産である。20、21は瀬戸美濃系の灯火具である。22は瀬戸美濃系の瓶類であり、内面上部と外面に灰釉を施軸する。23は香炉である。24、25は山茶碗窯系の片口鉢である。本遺跡からは胴部の破片がさらに1点出土

しておりすべて同一個体と考えられる。口縁部の形状は、瀬戸窯山茶碗類・片口鉢編年（藤沢2007）第7型式との類似が認められ、13世紀中葉の所産と考えられる。内面下半部には使用痕が顕著に見受けられ、著しく剥離している。26は焙烙で耳が1か所遺存する。底部は丸底になるものと思われる。27は転用磁具である。5面に擦痕が残る。

陶磁器は、中世から明治時代にいたる年代幅のものが出土したが、主体となるのは18世紀代のものであった。これは、溝跡出土遺物とほぼ同様の傾向を示している。

第20表 グリッド出土遺物観察表(2) (第57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(9.4)	[3.3]	—			良好		E-6 肥前系 18C前～中葉	24-2
2	磁器	碗	(7.9)	[4.0]	—		20	良好		E-4 肥前系 19C前	24-2
3	磁器	碗	(7.5)	[3.0]	(3.6)		20	良好		G-8 肥前系 18C前	23-7
4	磁器	碗	—	[1.8]	(7.6)		20	良好		E-6 肥前系 18C	24-2
5	磁器	小坏	(6.0)	[2.5]	—		10	良好		表採 瀬戸美濃系 19世紀前半	24-2
6	磁器	碗	—	[3.1]	—		5	良好		J-10 肥前系 17C後葉	24-2
7	磁器	段重	(12.0)	4.7	(6.5)		15	良好		E-5 肥前系 19C前～中葉 口唇部露胎	23-8
8	磁器	燗德利	(3.4)	[4.9]	—		15	良好		B-2 酸化コバルト 型紙刷絵 19C後半	24-2
9	磁器	燗德利	—	[4.8]	—		15	良好		E-2 酸化コバルト 型紙刷絵 19C後半	24-2
10	陶器	平碗	—	[1.5]	4.3		25	普通		E-5 瀬戸美濃系 胎土緻密 18C	24-2
11	陶器	鉢	—	[4.9]	(8.0)	B	20	普通		E-4 瀬戸美濃系 内外面極軸施軸 18C後～19世紀前半	24-2
12	陶器	半胴甕	—	[3.7]	(12.0)	I K	20	普通		J-10 瀬戸美濃系 19C前半	23-9
13	陶器	鉢	—	[1.8]	(10.6)	I	10	普通		E-5 瀬戸美濃系 高台内露胎 18C	24-2
14	陶器	鉢	—	[3.4]	(10.5)		20	良好		D-7 肥前系 外面状の刷毛目を施す 18C前	24-2
15	陶器	播鉢	—	[4.2]	—	E	10	普通		D-5 志戸呂か 摺り目15本	23-10
16	陶器	播鉢	—	—	—			普通		E-5 瀬戸美濃系 17C後～18C前半	25-1
17	陶器	播鉢	—	[5.7]	—	E	10	良好		J-10 堺明石系 18世紀後半～19世紀初頭	25-1
18	陶器	播鉢	—	[4.7]	—	B	10	普通		E-5 瀬戸美濃系 18C	25-1
19	陶器	播鉢	—	[4.6]	—	G K	10	普通		E-4 瀬戸美濃系	25-1
20	陶器	灯明皿	(10.6)	[1.6]	—	B	20	良好		F-8 瀬戸美濃系 18C後～19C中葉	25-1
21	陶器	灯明具	(10.7)	[1.5]	—		10	普通		C-5 瀬戸美濃系 下位軸ふき取り 18C前～中葉	25-1
22	陶器	瓶類	(3.8)	[5.3]	—	G	20	普通		D-6 瀬戸美濃系 内外面灰釉施軸	25-1
23	陶器	香炉	—	[2.5]	—		5	普通		C-3 瀬戸美濃系 内面上位外面灰釉施軸 18C前～中葉	25-1
24	陶器	片口鉢	—	[5.0]	—	I	5	普通	白灰	表採 山茶碗窯系 25と同一個体か 13世紀中葉	25-1
25	陶器	片口鉢	—	[2.9]	—	I	5	普通	白灰	E-6 山茶碗窯系 24と同一個体か 13世紀中葉	25-1
26	土曜土器	焙烙	—	[2.8]	—	A B D F	5	良好	橙	E-5	23-11
27	瓦	瓦転用磁具	幅6.2cm 高さ5.5cm 重さ72.4g			I	100	普通	灰白	E-5 №128	25-6



第57図 グリッド出土遺物

V 自然科学分析

1. シオフキの貝殻成長線分析について

(1) はじめに

植野地原遺跡の2次調査では、縄文時代の遺構とみられる、貝層を伴う土壌が検出された。本報告では、土壌から出土したシオフキ *Mactra venerifomis* を試料として貝殻成長線分析を行い、先史社会における貝採集季節ならびに人類による捕獲圧について推定した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（別項参照）。以下に、分析結果と考察を記す。

(2) 試料と方法

試料は、第98号土壌の覆土から出土したシオフキ10点（試料No.1～No.10）である（第21表）。第98号土壌の時期は、出土した土器から縄文時代前期の黒浜式期と推定されている。なお、試料No.1とNo.4、No.6を用いて行った放射性炭素年代測定の結果、いずれも縄文時代前期中葉から後葉に相当する暦年代範囲を示した（別項参照）。分析対象としたシオフキは、貝塚の主体種にはならないが、貝塚からの出土報告があり、例えば加曾利貝塚では貝殻成長線分析もなされている（橋

泉, 1999）。しかしながら、シオフキの貝殻成長線に関する基礎的な研究は少なく、その推定季節の誤差などが明らかではない。貝殻成長線分析のレプリカ法は、常法（Koike, 1980）を用いた。また貝類の採集（死亡）季節は、縁辺に最も近い冬輪（最終冬輪）から縁辺までの日周線の本数（最終日周線）がその後に生存した日数を表しているため、これを計算し求めている。採集季節は、（2月15日）+（日輪の本数）=（貝の死亡日）として算出し、それを四季の二分割程度の大別に当てはめ直してから、採集季節の推定に利用している（Koike, 1980）。なお、上記の通り、放射性炭素年代測定を実施した試料については、理論的には何年前の何月何日に採集した貝殻という推定ができる。ただし、放射性炭素年代測定と貝殻成長線分析では、それぞれ誤差が生じる。貝の死亡季節を推定するために小池が定めた日周線の本数を基準とした季節の時期は1年を8期に区分しているが、本稿ではシオフキの基礎的研究が不足しているため、四季区分を採用した。

第21表 貝殻成長線分析試料

(L, Rはそれぞれ左、右、括弧内の数値は残存長を示す)

分析 No.	遺構	遺構の時期	採取位置	大分類	小分類	L/R	殻長 (mm)	殻高 (mm)	殻厚 (mm)	重量 (g)	年代測定番号
1	第98号土壌	縄文時代前期 (黒浜式期)	覆土	斧足綱	シオフキ	L	46.76	39.65	17.33	8.50	PLD-30126
2						L	41.75	35.26	15.16	5.81	
3						R	42.09	36.95	12.59	5.18	
4						R	47.23	39.19	17.39	8.39	PLD-30127
5						R	51.20	40.16	17.65	9.85	
6						L	52.90	45.37	19.85	11.44	PLD-30128
7						L	42.26	36.16	14.37	4.89	
8						L	(36.87)	32.74	12.30	3.17	
9						R	48.34	40.07	16.91	8.40	
10						R	42.50	36.51	13.57	4.09	

(3) 結果および考察

(a) サンプルの状態及び分析結果の概要

サンプルの状態は比較的良好であり、10点すべてが検鏡できた。ただし、1年目の冬輪群は、摩耗や欠損のため、検鏡できなかった(第22表)。採集季節は、春季から夏季である。またその年齢群は、主に3歳以上の成熟した個体であった。

(b) 推定採集季節

採集(死亡)日が推定できた個体10点の推定採集季節は、全て春季と夏季であった。春季が7点で最も多く、夏季は3点を確認した。計数できた最終日周線は平均76本であり、大きく外れた分析No.10の20本を除くと、平均83本に集約している。おそらく貝採集活動は、春季初頭(20本=3月6日頃に相当)より開始し、春季から夏季への移行時季(83本=5月8日頃に相当)に隆盛したと考えられる(第23表)。貝の採集季節を見る限り、一回の廃棄とは考え難く、数回に渡って廃棄されたと考えられる。第98号土壌における具体的な堆積状況は、試料のサンプリングが一括であり、それぞれの出土位置が不明なため、不明である。樋泉による縄文時代後期の加曾利南貝塚出土のシオフキの貝殻成長線分析の結果は、冬季に偏る傾向を示している(樋泉, 1999)。一方、同貝塚のアサリの分析結果は夏に偏る傾向を示しており、年間を通じて採集するハ

マグリとは異なった季節性の可能性を樋泉は示唆している。

これまでシオフキの採集季節は、加曾利南貝塚のように冬季中心との認識であったが、本報告の分析により、春季を中心とした採集の事例を確認できた。ただし本報告のシオフキは縄文時代前期の黒浜期で、後期の加曾利南貝塚との違いは時期差を反映している可能性もある。今後は、同一時期・同種での比較が必要であろう。

(c) 年齢組成

検鏡により求めた年齢組成は、2歳が1点、3歳が3点、4歳が4点で最も多く、5歳が1点、8歳が1点であった。平均は4歳である。この年齢群は成熟個体群と考えられ、人類による捕獲圧は低調と評価できる。

(4) まとめ

植野地原遺跡の第98号土壌より得られたシオフキ10点の貝殻成長線分析を行った結果、貝採集活動は春から夏に集中していた。また、年齢組成によれば、成熟個体が多く、人類による捕獲圧は低調と評価された。

第22表 シオフキの各年齢での殻高

分析No.	1	2	3	4	5	6	7	8
1	28.8	38.6						
2	24.6	34.6						
3	32.5	36.2						
4	33.7	36.6	38.3					
5	34.3	36.3	37.4	39.1				
6	-	-	-	-	41.2	43.5	45.0	
7	31.2	34.0	35.4					
8	32.0							
9	33.7	38.2	39.2					
10	28.2	33.4	36.6					

※ 1年目の殻高は、貝殻表面の摩耗および欠損の為、不明。

第23表 シオフキの推定採集季節と年齢

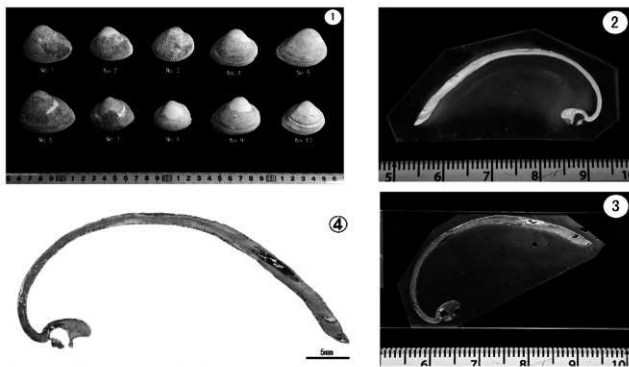
分析No.	最終日周線	採集(死亡)推定日	推定採集季節	年齢
1	57	4月12日	春季	3
2	68	4月23日	春季	3
3	80	5月5日	春季	3
4	85	5月10日	春季	4
5	91	5月16日	夏季	5
6	71	4月26日	春季	8
7	84	5月9日	春季	4
8	109	6月3日	夏季	2
9	98	5月23日	夏季	4
10	20	3月6日	春季	4

引用文献

Koike, H. (1980) Seasonal dating by growth line counting of the clam, *Meretrix lusoria*.

The university museum, The university of Tokyo, Bulletin, 18, 1-104.

桶泉岳二 (1999) 加曾利貝塚における貝層の研究：貝殻成長線分析による貝層形成過程と貝類採集活動に関する考察。99p, 千葉市立加曾利貝塚博物館。



①試料写真 (試料 No.1 ～ No.10)、②樹脂包埋後の試料 (試料 No.4)、③検鏡用プレパラート (試料 No.4)、

④成長線の断面写真 (試料 No.4)

第58図 シオブキの貝殻成長線分析

2. 放射性炭素年代測定について

(1) はじめに

幸手市に位置する植野地原遺跡から出土した貝について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて貝殻成長線分析も行われている (貝殻成長線分析の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、第98号土壌の覆土から採取された貝が3点で、いずれも海洋性のシオフキである (試料

No. 1 : PLD-30126、試料No. 4 : PLD-30127、試料No. 6 : PLD-30128)。遺構の時期は、縄文時代前期中葉 (黒浜式期) と推測されている。

測定試料の情報、調製データは第24表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクトAMS : NEC製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 24 表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30126	遺構 : 第 98 号土壌 位置 : 覆土 試料 No.1	種類 : 貝 (海洋性) (斧足綱 シオフキ (L)) 状態 : dry	超音波洗浄 酸エッチング (塩酸 : 0.5N)
PLD-30127	遺構 : 第 98 号土壌 位置 : 覆土 試料 No.4	種類 : 貝 (海洋性) (斧足綱 シオフキ (R)) 状態 : dry	超音波洗浄 酸エッチング (塩酸 : 0.5N)
PLD-30128	遺構 : 第 98 号土壌 位置 : 覆土 試料 No.6	種類 : 貝 (海洋性) (斧足綱 シオフキ (L)) 状態 : dry	超音波洗浄 酸エッチング (塩酸 : 0.5N)

(3) 結果

第 25 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得

られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 59 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。なお、暦年較正の詳細は紙幅の都合上省略する。

第 25 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-30126 試料 No.1	0.12 $\pm$ 0.24	5627 $\pm$ 22	5625 $\pm$ 20	Marine13: 4132-4026 cal BC (68.2%)	Marine13: 4170-3979 cal BC (95.4%)
PLD-30127 試料 No.4	-0.38 $\pm$ 0.25	5662 $\pm$ 22	5660 $\pm$ 20	Marine13: 4162-4057 cal BC (68.2%)	Marine13: 4216-4033 cal BC (95.4%)
PLD-30128 試料 No.6	0.05 $\pm$ 0.27	5662 $\pm$ 22	5660 $\pm$ 20	Marine13: 4162-4057 cal BC (68.2%)	Marine13: 4216-4033 cal BC (95.4%)

(4) 考察

海洋性試料の ^{14}C 年代は、海域ごとにリザーバ一効果が異なるため海域差が生じる。したがって、より確かな年代を求めるためには、試料が生息していた海域における補正值 (ΔR) を用いて海域差を補正する必要があるが、今回は Marine13 の

暦年代較正曲線をそのまま用いた。

各試料の暦年較正結果のうち 2 σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目すると、いずれも縄文時代前期中葉～後葉に相当する暦年代を示した。これは、遺構の推定時期である縄文時代前期中葉 (黒浜式期) に対して、整合的である。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, Radiocarbon, 51 (1) , 337-360.

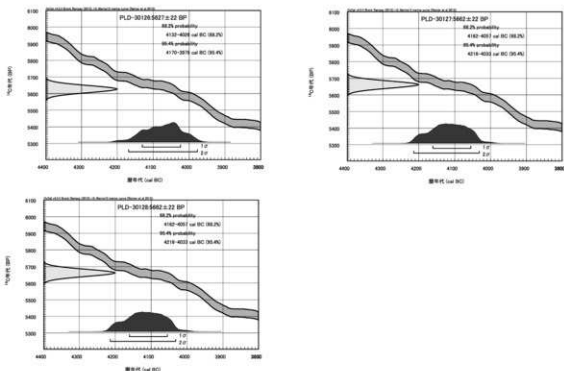
小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代.

小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編 「縄文時代の考古学 2 歴史のものとさしー縄文時代研究の編年体系ー」: 257-269, 同成社.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.

日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4) , 1869-1887.



第 59 図 暦年校正結果

VI 結語

縄文時代

縄文時代の遺構は住居跡4軒、土壇25基が検出された。その時期は、前期中葉の黒浜式期が土壇6基、前期後葉の諸磯b式期が住居跡4軒、土壇14基、前期末葉の十三菩提式期が土壇1基である。

前期中葉の黒浜式期の土壇では、第98号土壇から貝が多量に出土した。出土した貝はアサリが74.83%、シオフキが21.29%と両方で96%を占めていた。そのことから、遺跡周辺は砂質の干潟の広がる浅い海に面した環境であったことが推測される。幸手市の調査した第1次調査では、黒浜式期の住居跡が1軒検出されており、今回の調査区内では黒浜式期の住居跡は検出されなかったが、周辺に住居が存在していたことは充分に考えられる。

前期後葉の住居跡は、全て諸磯b式期に位置づけられる。4軒の住居跡は、調査区の南端から集中して検出された。第1号住居跡からは炉跡3基、3軒が重複する第2、3、5号住居跡からは炉跡5基が検出されており、ごく狭い範囲で建て替えが頻繁に行われていることが確認された。出土した土器は、浮島Ⅱ式土器を主体とし、諸磯b式土器が少量含まれていた。浮島式土器は東関東に分布域を持つ土器で、下総台地西縁部に立地する本遺跡もその分布域内であったと考えられる。また、諸磯b式期の遺構内から貝は検出されなかった。以上のことから、本遺跡は前期中葉の黒浜式期と前期後葉の諸磯b式期に、集落が営まれていたと考えられるが、その集落の規模については部分的な調査のため不明である。しかしながら、遺跡の分布状況から密集した大集落が営まれていたとは考え難い。諸磯b式期には、同じ地点で頻繁に建て替えが行われた住居跡群が検出されたが、同様の住居跡群が他にも数か所存在していた可能性が高いと考えられる。また、本遺跡の諸磯b式期には貝塚が形成されておらず、周辺の地域でもこの

時期の貝塚が減少している。このことから、前期後葉以降には海退が進み採貝の頻度が減少していったものと思われる。しかしながら、貝塚については、遺跡の南5kmの位置に所在する木津内貝塚（黒坂2003）で、諸磯c式期の住居跡内に掘り込まれた土壇内より、鹹水産の貝が検出されている。周辺で採取されたものか持ち込まれたものかは判断がつかないが、貝塚が形成されていたことは事実である。土器については、8、9割が浮島式土器であった。本遺跡の立地は大宮台地に近い印象を受けるが、海退が進んだ前期後葉以降には、東関東系の浮島式土器分布圏に含まれていたと考えられる。木津内貝塚でも、前期末葉の住居跡から、東関東系の興津式土器が主体的に出土している。このことから、当地域は、前期後葉には浮島、興津式土器の分布域に属していたことがわかる。

周辺地域において、諸磯式期の住居跡の出土例は少ない。今回の調査では、住居跡の重複状況や、出土土器の組成など、この地域の当時の様相を知る上で貴重な資料を得ることができた。

古墳時代

古墳時代の住居跡は、C-3・4グリッドに位置する。住居跡に付随する施設は炉跡とP1のみであり、柱穴は確認できなかった。P1は、住居跡の隅に位置する点や、焼土を伴う点などから、小倉均の指摘する「祭壇状遺構」の可能性ある（小倉1990）。近年調査された槇野地北遺跡では、古墳時代前期の大型住居跡に祭壇状遺構が認められ、関連が留意される。

住居跡より出土した壺や甕は、胴部が長胴気味で頸部の締まりが弱い。また、第34図25には、口縁部の端部に、指でつまんだような強いヨコナデの痕跡が認められる。埴は、胴部が球形を呈し、口縁部が長い。このような特徴から、遺物は「下加南型高坏」（書上1996）を含む土器群と並行する、

古墳時代前期の最も新しい段階に位置するものと考えられる。周辺の遺跡では、幸手市の横野地北遺跡や宮代町山崎山遺跡が、ほぼ同時期であろう。

住居跡出土の遺物のうち特徴的なものとして、第34図30、31、34がある。30、31は器台で、茨城県と千葉県北西部を中心に分布するものである。縄文時代の遺構と同様に、下総台地との関連が強い住居跡であることがうかがわれる。

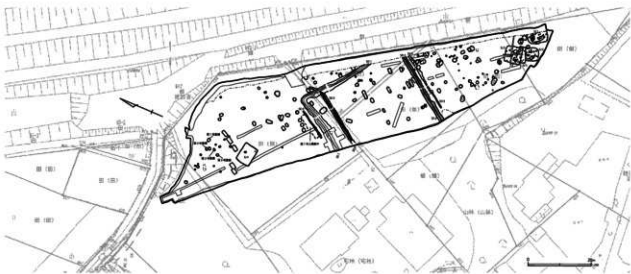
これらの器台は、一般的な小型器台と比較して、整形が粗雑であるなどの特徴を持つ。その名称は、「粗製器台（炉器台）」（伊東1977、鶴見1994）、「器台状脚形土器」（藤岡1983）、「支脚形土製品」（大橋1978）、「異形器台形土器」（千田1983、藤田、板橋1996）など、研究者によって様々で、機能についても、単体あるいは二、三個体一組で炉にかけられたとする説や、祭祀具とする説などがある。機能の認定は、出土状況や二次焼成痕の有無、セット関係などに左右され詳細な検討が進んでいないのが現状である。

ここで、本遺跡から出土した2点について確認すると、両者の形態的な差異は大きく、二個体一組のセット関係として捉えられるかは不明確である。また、31は二次焼成を受けている可能性があるため炉器台として使用されたことも考えられるが、30には二次焼成の痕跡は認められない。した

がって30、31の機能は不確定であり、このことから、名称については異形器台形土器としておきたい。

形態は、30は茨城県岩井市高崎貝塚、千葉県袖ヶ浦町山王辺遺跡、埼玉県日高市和田遺跡などから出土したものと極めて類似する。対して31は筒形を呈し、器受部を持つ異形器台形土器の中には類例を見つけれなかった。しかし、千葉県木更津市蓮華寺遺跡第4号住居跡や、同市塚原遺跡第1号墳丘下、市原市蛇谷遺跡第75B住居跡出土例のように、器受部を持たず、碗を逆にしたような形態のものと類似するように思われ、関連が想定される。

34は用途不明の土製品で、形態から棒状土製品とした。古墳時代前期の遺跡では、茨城県土浦市向原遺跡の第30号住居跡や、神奈川県横浜市寺谷戸遺跡第3号住居跡などから、類例が出土している。時代は下るが、古墳時代後期の東京都中野区新井三丁目遺跡K3号住居跡や、茨城県つくばみらい市和台遺跡第2号住居跡のカマド内などにも類例を見つけることができる。新井三丁目遺跡では、祭祀との関連が想定される土製品が共伴しており、棒状土製品も同様に用いられた可能性がある。また、菅原文也は、福島県石川町大日原B遺跡で採集されたものを「壺形土製品」（菅原1983）として考察を加えている。



第60図 現行地割りと検出された遺構

中近世

中近世の遺構は、墓壇、溝跡、土壌を検出した。明確に中世の遺物を伴う遺構は検出できなかったが、グリッドより山茶碗窯系片口鉢の破片が3点出土した。土壌は、出土遺物が少なく、時期や性格については不明なものが多い。

第60図より、第1、3号溝跡は、近接する現在の道路とは方位がわずかに異なることが確認できた。一方で、溝跡の方位と現行の地割とはおおむね一致しており、これらの溝は地境溝と考えられる。このことから、溝跡が形成された18世紀頃に

現行地割の淵源を辿ることができる。溝で区画された内部の土地利用については、遺構の分布状況から想定することは困難であるが、出土遺物が少なく、居住区であった可能性は低い。

明治期に作成された迅速図において、本遺跡の位置を確認すると、当時の堤防からは大きく離れた西側に位置することが見てとれる。遺構の形成当時、横野地原村には江戸川沿いに河岸が開成されていた。調査地点は、にぎわいを見せた江戸川沿いの街道からは外れた場所に立地していたと考えられる。

参考文献

- 青木 秀雄・河井 伸一・福田 聖・佐藤康二 2010『山崎遺跡・山崎山遺跡』宮代町教育委員会
伊東 重敏 1977「上総・山王辺019住居址」『ひだみち』No.5 常陸考古学研究所
大橋 信弥 1978「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17号 元興寺文化財研究所考古学研究室
小倉 均 1990「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構の研究」『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
書上 元博 1996「新屋敷遺跡C区」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
黒坂 祐二 2003「木津内貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第287集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
河野 一也ほか 2014「茨城県つくばみらい市和台遺跡第2次調査」大成エンジニアリング株式会社
小石 誠 1983「塚原遺跡発掘調査報告書」君津都市文化財センター発掘調査報告書第3集
君津都市文化財センター
埼玉地区文化財担当者会 1999「埼玉の縄文前期」埼玉地区文化財担当者会報告書第3集 埼玉地区文化財担当者会
生涯学習課市史編さん室 2002「幸手市史」通史編1／考古資料編 幸手市教育委員会
須田 勉・新田 栄治 1977「蛇谷遺跡」上総国分寺台遺跡調査団 市原市教育委員会
菅原 文也 1983「石川町大日原B遺跡採集の炭形土製品」『福島考古』第24号 福島考古学会
島村 薫・植松 剛 2002「木津内貝塚・向山遺跡」杉戸町文化財調査報告書第6集 杉戸町教育委員会
杉戸町役場（町史編さん室） 2005「杉戸町史」通史編 杉戸町役場
鈴木 信哉 2014「台東区下谷間明町遺跡から出土した数珠の材質と構成からみた17世紀の江戸における副葬品の様子」『古代』136号 早稲田大学考古学会
千田 利明 1983「異形器台形土器小考」『日本考古学研究所集報』V 日本考古学研究所
瀧瀬 芳之 2005「東地総田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第314集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鶴見 貞雄 1994「粗製器台の用途を考えるー高崎貝塚出土の器台形土器を例にしてー」『研究ノート』3
茨城県教育財団
野口 行雄 1988「蓮華寺遺跡」君津都市文化財センター発掘調査報告書第36集 君津都市文化財センター
日高市史編集委員会 1997「日高市史」原始・古代資料編 埼玉県日高市
藤岡 李司 1983「粗製土器台状脚形土器について」『研究連絡誌』第2号（財）千葉県文化財センター
藤沢 良祐 2007「灰陶器から山茶碗生産へ」『愛知県史』別編窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県
藤田 直也・板橋正幸 1996「関東地方における異形器台形土器の展開」『考古学の諸相』坂清秀先生還暦記念会
中野 修秀・越川 敏夫 1987「向原遺跡」向原遺跡調査会 土浦市教育委員会